

大菩薩峠「禹門三級の巻」中里介山

一

宇治山田の米友は、あれから毎日のように夢を見ます。その夢は、いつもはんで捺したように不動明王の夢であります。夢や新聞は、毎日変ったものを見せられるところにねうちがあるのだが、米友のように、毎夜毎夜同じ夢ばかりを見せられては、驚かなければなりません。

夢から醒めたたびに米友の驚き呆れた面も、やはりはんで捺したようなものです。米友はついに堪り兼ねて、床の間にかけてあった不動明王の画像を取外しました。この画像があるから、夢を見せられるのである、画像が無ければ、夢も無くなるであろうと思って、その晩は取外して床の間へ捲いておいたけれど、やはり同じように、不動明王の像が夢に現われました。米友は癢にさわってこの画像を、よそへうつしてしまおうと思って、今、かつぎ出したところであります。

今日は例の手槍を持って出ることの代りに、かなり大きな不動尊の画像を担いで、例によって両国橋を渡りかけました。そこで米友が思うには、これを打捨るにしても不動尊である、有難がっても有難がらなくつても、不動明王のお像である。芥溜の中へ打捨るわけにはゆかない。さりとて、道の真中へ抛り出して

おけない。また米友には、屑屋に売り飛ばすというほどの知恵も浮ばない。売り飛ばしてそれを己れの巾着銭にしようというような知恵は米友には出ない。出て来たところで彼の良心が許さない。この場合、不動尊の殊勝な信心家が現われて、この画像を米友の手から乞い受けて、祀りあがめる人が出て来れば米友は一議に及ばず、その画像を譲り渡したものであらうと思われるが、不幸にしてその人を得ることができない。せつかく、不動尊を担ぎ出して来たものの、実際、米友はこれをどう扱っていいかということに迷いきっているのです。この点においては、曾て京都へ遊びに行った弥次郎兵衛と喜多八とが、梯子を買ってもてあまして、京都の町を担ぎ歩いたように、米友のは梯子よりは有難い不動様であるだけに、なおさら捨場に困るのであります。

ほかのことにはあまり頓着はしない米友が、こういうことになるのと真面目に苦心するのです。甲州の袖切坂で鼻緒の切れたお角の下駄を、どう処分しようかと思つて、一里も三里も持ち歩いたこともあります。今はその下駄とも違つて、不動明王のお像だから、担ぎ出しは担ぎ出したものの、その心の中の苦心は容易なものではありません。

で、両国橋へ来て、フト思案半ばに思いついたのは、やっぱりここから川の中へ投げ込むのがよからうということでありました。両国橋から物を投げ込んだことは、米友には今までに経験がないではありません。第

一には、天誅^{てんちゆうぐみ}の貼紙をした立札を引っこぬいて、この川の中へ抛^{ほう}り込みました。第二には、金助から侮辱されて腹立ちまぎれに、頭からかぶって金助を、大川の真中へ抛り込んだこともあります。

それで米友は、こんどもその伝で不動明王を、ここから川の中へ抛り込もうと考えたものらしい。それで米友は、恐る恐る画像を肩から取り卸して、橋の前後を見渡しました。あいにくのことに往来の人がかなり多い。それがいちいち変な目つきをして、米友の拳動をジロジロと見るのが癪にさわる。どうも自分ながら盗み物でもするように気がとがめてならない。前に立札を投げ込んだ時のように、また金助を抛り込んだ時のように、端的に、痛快にやつつけてしまうことのできないのが忌々^{いまいま}しい。そこで米友は、せっかくの名案も実行が渋^{しぶ}って、いったん肩から取下ろした不動尊の画像を、また担ぎ直して、非常な不機嫌な顔色をして、

「ちえッ」

舌打ちをして焦^じれたそうに、また両国橋を渡り出しました。

彼は事をなす時には端的にやつつけてしまうが、その端的が外れると、もう底知れずにぐずついてしまします。一旦、川へ投げ込みそこねてみると、もう駄目です。大川へ投げ込めないものが、神田川へ投げ込めるはずがない。大川へも神田川へも投げ込めないものを、そこらの堀や溝へ投げ込めるものではない。米友

は思案に暮れながら不動尊を担いで、どこを歩むともなく歩み歩んで行きました。

しかしながら、いくら歩いてもこの上いい知恵の出ないことが哀れです。誰かしかるべき人に預けたのがよからうと、それは幾度も思案にのぼらないではありません。けれども、こうなってみると、預けた先も心配になるし、預けるといふそのことも心配になります。たとえば道庵先生とか、盲法師の弁信とかいうような者に、事情を打明けて頼めば、いやとは言うまいけれど、米友の気象では、そう言って頼むのが癪にさわります。なんだか自分が、この一幅の画像に怖れをなして、逃げ隠れでもするように見られるのが癪にさわらない限りもない。それで米友は、しかるべき相談相手を求めようとする気にもならないのであります。自分で自分の心が済むように始末しなければ、男の一分が立たないように思われてなりません。ですから、土にかじりついて、この画像だけは自分で始末をしようとして、煩悶^{はんもん}しながら歩いているのです。

ところが、これほど煩悶している米友の眼の前へ、ちらちらと不動様のお姿が現われます。今までは夢にのみ現われた不動様が、米友がこうして煩悶していると、ありありとその怖い面を向けて米友を睨^{にら}みつけるのだから、米友は焦^じれるばかりです。いったい、不動尊という奴がなんの恨みがあって、おれにこうして付き廻るのだ。今までに米友は、なにも不動様に恨まれるようなことをした覚えがない。夢になり、うつつに

なって自分の眼先へちらついて、こうまで俺を苦しめる不動様という奴の了見方がわからねえと、米友は腹が立ってたまりません。

米友の風采もかなり奇怪に出来てはいるが、どうも不動様とは太刀打ちができないらしい。ややもすればその不動様に睨みすくめられてしまうのが残念でたまらない。事実あるものならばそれでもよいが、画像はこうしてクルクルと捲き込んでしまつてある以上は、この世のいずこを尋ねても、不動様なんていうものがあつたらお目にかかる。ありもしないえそらごとの不動様に、夜も昼も睨められて、こっちの睨みが利かなくなるとは、腹が立って腹が立ってたまらない。腹が立つけれども、どうも喧嘩の相手がないには閉口です。相手といえはこの画像だが、さてこの画像を相手に、どう処分していいか、その思案に思い悩まされているのだから、どうにもこうにも仕方がない。

いつのまにか米友は、柳原の土手の通りを通り過ぎて、加賀ツ原のところまで来て見ると、加賀ツ原の真中に足軽のような者が、塵芥を集めて焼き捨てていました。多分、貧窮組の捨てて行った米の空俵や、蘆の類であろうと思われる。それをじっと立って見ていた米友が、また一思案を思い浮べました。

「そうだ、焼いてしまえば、元も子もなくなる」

そこで、ブルブルと身を振わして、自分ながらこの名案を喜んだものらしい。けれども、ここで焼こうとするのではない、どこかしかるべきところを選んで、

心静かに焼いてしまいたい。そう感じたから、急ぎ足で歩き出しました。

少しは遠くなつても、なるべくは、ずっと江戸の町を離れた人のいないところで、心静かに不動様を焼いてしまいたい。米友は、そう思って、跛者ではあるけれども達者な足を引きずって、昌平橋をずんずんとのぼって行きました。

足に任せて歩いた米友は、幾時かの後に広々とした野原に出ました。そこは代々木の原であります。米友は、代々木の原とは知らないで、ここいらならばよろうと思ひました。そうして不動尊の画像は、木の枝にかけておき、それから四辺の山林へ分け入って、杉の落葉だの、雑木の枯枝だのというものを盛んに掻き集めて来ては山を築きました。さて、時分はよしと思つたのに、気のつかないことつたら仕方がないので、米友は火道具というものを持っておりませんでした。この人は煙草を喫わない人だから、常に火道具を携帯しているというわけにはゆきません。途中で、そんなことに考えつきそうなものだが、この場に立至るまでそれと気がつかなかったのは、おぞましいともなんとも言いようがありません。泥棒をつかまえて縄を縛うような、ブマなことをしでかした自分を、米友は齒痒く思つて地団駄を踏みました。

四辺を見廻したところで、その時分の代々木あたりは、深山幽谷も同じものであります。旅人をつかまえて火種を借りるというわけにもゆかないし、どうして

も最寄りの百姓家へでも行つて、火打道具を無心しなければならぬ羽目です。

詮方なく米友は、代々木の原を立ち出でました。林のはずれを見ると、天氣がよいものだから丹沢や秩父あたりの山々が見えるし、富士の山は、くつきり姿をあらわしていました。米友も久しく見なかった広い原と、高い山の景色に触れると、胸膈がすつと開くようにいい心持になりました。原を出ると大根畑があつて、その向うに生垣があつて、そこでギーツと芻釣瓶の音がします。米友は、畑の中の道を突切つて行つて見ると百姓家です。その百姓家の門口へ立つてみたが、さて何と言つて火種を借りていいか、ハタと当惑してしまいました。煙草の火とも言えないし、さりとて不動様を焼くのだからとはなお言えない。なんといいこしらえて火種を借りようとグツと詰まつて、空しく百姓家の門口に突立つていました。そうすると百姓家の台所から、けたたましい声と羽バタキをして、大きな鶏が一つ飛び出して来て、戸惑いして、米友の頭に乘つかりうとしました。さすがの米友もこれには面喰つて、鶏を払いのけると、そのあとから小犬が飛び出して来て、米友に向つて頻りに吠え立てるのです。

こんなことでは駄目だと、米友は観念しました。まだ頼みもしない先から鶏にばかりにされたり、犬に吠えられたりするようでは、頼み込んでみたところで剣突を食うか、そうでなければ泥棒扱いでも受けるぐらいが関の山だろうと思つたから、米友はそのままスゴ

スゴとまた畑道を引返したものです。仕方がない、少しく遠くなつても町のあるところまで出かけて、錢を出して、火打道具を買い求めて来るよりほかはないと思ひました。

米友が畑道を引返して来ると、畑の畔で、百姓が一人、子供を相手に話しています。

「これ見ろ作十、誰か榛の木山ん中へ、こんな掛物を置きつぱなしにして行つただあ、ことによると泥棒かも知んねえ」

「爺、あにが書えてあるだえ」

百姓の老翁と子供とがその掛物を拵げて見ようとするとところだから、米友は眼の色を変えて駈け寄つて、横の方から、それをひつたりしました。

「おいらの不動様だ伊ッ」

百姓親子は、眼を円くしました。

水に入れようとしてやりそこない、火に焼こうとしてまたやりそこなつた米友は、ぜひなく不動尊の像をかついで、代々木の林を立ち出でました。

その途すがら米友は、なお頻りにこの画像の処分方を考えていました。そうして最後に考えたのは、前よりはずっと穩健な仕方でありまふ。それは個人に頼むことこそ億劫だが、しかるべき堂宮へ納めてしまえば文句はなからう。堂宮といううちには、神仏それぞれ持ち分があるのだから、不動様を閻魔様の許に頼むわけにはゆくまい。不動様は不動堂に限ると思ひました。で、住職か或いは堂守に、事情を言いこしらえ

て納めてしまえばイヤとは言うまい。イヤと言えば抛り込んで逃げてしまおう、とまで決心して、ようやく人通りのあるところへ出た時に、この辺にしかるべき不動堂はないものかと人に尋ねました。その人が、下総の成田山の出張所が、御府内のどこそこにあるということをよく教えて聞かせました。しかし米友は、江戸の市中まで持って帰りたくはないのだから、江戸に近い田舎でしかるべき不動堂はないかというようなことを尋ねると、それはまた滝の川の不動様と、目黒の不動様だろうという返事でありました。

その二つの不動様のうち、どれが近いかと尋ねると、ここからでは目黒の方が、ずっと近いということでした。だから米友は、よし、それでは目黒の不動にしよう、その方角を、よくよく聞き取ってそちらに足を向けました。

米友が不動尊の画像をかついで、目黒不動の境内まで来て見ると、そこが大変に賑やかで、お祭か縁日かであるらしい。あんまり賑やかで、かえってきまりが悪いと思いつながら米友は、その人混みの中へずんずん入って行くと、その日にこの庭で「富」があつたのです。

米友には、まだ「富」の観念がよく定まっておらないながらに、札幌の中へ入って、人の蔭になって様子をながめていたのです。

世話人が箱の中から、錐で本札を突き出して番号を読むと、みんなが持合せの影札を見比べて、当つたも

のは嬉しそうに、当たらないものは、しおらしい面をしています。当つた番号は紙に書いて、向うの柱へ貼り並べられました。それが大変な人気ですから、札には利害関係のない米友も、つい面白くなって頻りに富札の景気を見ていました。

面白がって見ているうちに、一の富七十三番の札が落ちました。跳り上って喜んだのは品川宿の建具屋の平吉という若い男で、この百両が平吉の手に落ちることにきまると、当人も嬉ぶし、誰も彼も羨ましうに見えました。平さんは札とひきかえにその百両を受取って、いそいそとその場を出かけると、平吉を知っている人が、あぶないものだ、平さんにあれを持たしては帰りがあぶないと言つて眉をひそめたのは、その幸運をそねんで言うものとは思われません。また帰りに泥棒や追剥につけられるという心配でもなく、それは、平さんという男の人柄を見てもわかることで、持ちつけない大金を持ったため、途中、出来心でどんなところへひつかかってしまふかわからない。それをあぶながっているものらしくあります。

果せる哉、この平さんは百両の富が当つた嬉しまぎれに、友達を無暗に引っぱって角の店へ上って、景気よく一杯やり出しました。

これは平さんがあまりよろしくないのです。こういう時は、何を置いてもいったん自宅へ帰って、女房の前へその百両を見せて喜ばせた上に、近所の者を呼んで一杯やるということにしなければ本当ではないのだ

が、嬉しい時は、なかなかそうは思慮が廻らないもので、ついここで百両の封を切つて散財することになりました。

そうすると、みんなしてこの平さんをチャホヤした上に、店の女中を初め、見知らぬお客までが、その当り運にあやかりたいというわけで、一杯いただきたるものだから、平さんは断わりきれないで、つい、うかうかと呑んでいるうちに、腹のしまりがつかなくなりました。どのみち、あてにしない金であるところへ、こうして福の神の生れ代りみたように、あがめ奉られては、平さんに限らず籬たがのゆるむのは仕方のないことです。

ちょうど、この時に、五六騎轡くつわを並べて通りかかった侍の遠乗りがあつたために大事が持ち上りました。いずれもしかるべき身分でもあり、年配でもあつて、軽からぬ役目をつとめているものらしい人品です。わざと多くのともをつれないで、微行しのびの体の遠乗りであつたが、そのうちの一人が、逞たくましい下郎に槍を立てさせていました。

その槍は九尺柄の十文字であります。それがちょうど、この店の下へ通りかかった時に、運悪く二階の上からクルクルと舞い下つて、この十文字の槍の鞘さやにひっかつたのが、鎖紐くさりひもの煙草入であります。根付ねつけとかますとが、十文字の鞘で支えられたのだから、ちょうどいいあんばいにひっかつたのではあつたけれども、それが大事の槍であつたから、槍持の奴やつこは嚇かつと

しました。槍持の奴と面かおを見合せた馬上の侍は、むつとして言わん方なき不快の色を示して通り過ぎたけれど、この槍持奴だけは、根の生えたようにそこへ突立つて動きません。

仁王立ちに突立つた槍持奴は、槍の鞘にひっかつた煙草入を取ろうともしないで、そのまま大地に突き立てて、頭から湯氣を立ててこの家の二階を睨にらみ上げています。

さしも騒がしかったこの店が、その時に水を打ったように静かになりました。店の者が一人も残らず面の色を青くしました。往来の人も歩みをとどめてしまいました。

そこへ店の中から転り出したのが例の平さんでありました。実は平さん自身が飛び出さない方がよかったのだけれども、この男は正直者でもあり、慌あわて者でもあつたから、店の者から何か言われると、慌あわててここへ飛び出して来たものです。

そうして槍持奴の前へ土下座をきつて申しわけをすると、槍持奴は雷かみなりの割れるような声で、

「このかんぶんくろはてめえのか」

平吉は縮み上つて、

「はいはい、手前のでございます」

「てめえのなら持つて行け」

「はいはい」

「早く持つて行け、何でえ、何で手なんぞを出しやがるんだい、この槍へ上つて自分の手で取つて行きやが

れ」

持つて行けと言いなから、槍はそこへ突き立てたま
まです。

この時に、前の五六騎づれの侍たちについていた
仲間たちが、ほとんど残らず取って返して、ズラリ
と平吉を取巻きました。

人に揉まれて来た米友が、聞くともしに聞いてい
ると、事件の要領はこうです。

百両の富に当った品川宿の平吉という建具屋が、嬉
しまぎれに身近の人を招んで、角の店の二階で飲んだ
揚げ、連れの一人が、平さん大金持になった上は、こ
んな安っぽい煙草入はよしてしまいねえと言って、冗
談にボンと往来へ抛り出す真似をしたのが、どうした
ハズミか本気に手が^{すべ}って、二階から往来へ飛び出し
てしまいました。飛び出した煙草入が運悪く、通りか
かった十文字の槍の鞘へからみついてしまいました。
事件の要領はただそれだけです。事柄はただそれだけ
だけれど、煙草入のからみついた相手が悪かったから、
全く始末のいけないことになってしまいました。

「いけねえ、いけねえ、平さんは鈴喜の庭へ引張り込
まれてしまった。あすこにはお歴々の方がお微行で大
勢休んでおいでなさるんだ、なんでもお奉行のお方や、
与力の方で、いずれも飛ぶ鳥を落す御威勢のお方なん
だそうだ。そのお槍へ平さんの煙草入がケチを附けて
しまったものだから、納まりがつかねえ、なんでも平
さんは、あのお槍で殺られちまうんだそうだ、あのお

槍を持った殿様が、平さんを突き殺しておいて、あと
で五人の殿様が試し斬りをなさるんだって言ってまし
たぜ。もう助かりません、何しろ、あっちが飛ぶ鳥を
落すお歴々のお揃いだから、誰も口の出せるものがあ
りやしませんや、こればかりはお庄屋様だって、不
動院の御前だって、後へ引いておしまいなさる。ああ
平さんがかわいそうだ、平さんがかわいそうだ、こん
なことだったら早く私たちが連れて帰りさえすればよ
かったんだが、ついここで飲み出したのが悪かった。
平さん、友達甲斐がねえと恨んじやいけねえよ、全く
友達甲斐がねえんだから、恨まれても仕方がねえけれ
ど、災難にしても、災難があんまり大き過ぎらあ。あ
れで皆さん、平さんには女房もあれば子供も二人まで
あるんですよ、おかみさんは今日の富を心待ちにして
待っているんでございますよ、まさか百両の一番札が
落ちようと思いませんが、もしいくらでも当りさえす
れば、子供にああしてやろう、こうしてやろうなんて、
出がけに算当を組んで笑いながら切火をきってくれた
もんです。それがこんなことになったと言って、どう
して私はおかみさんに合わす面がありましょう、金さ
ん、お前が附いてながら、早く連れて帰ってくれさえ
すればこんなことになりやしないと言って、おかみさ
んに泣かれたら、わたしや何と言って言いわけをしま
しょう。私が友達甲斐がねえから平さんを、あんなこ
とにしてみました、皆さん、わたしや平さんに済まな
い、平さんのおかみさんに済まない、なんとかして下

さいよう」

こう言っておいおいと泣いているのは、同じ品川から平吉と一緒に連れ立って、今日の富へ来た友達の人であります。多分、煙草入を手から迂らしたのがこの男でしょう。いい男が手放して泣くのだが、この場合に限って同情の至りで、ほとんど貰い泣きをしたがるものばかりです。しかし、こう言って泣きつかれても今更、誰がどうしてやろうと言うこともできません。宇治山田の米友が、うなり出したのはこの時です。

米友が鈴喜の家の裏手の竹藪の中をうろついていたのは、それから間もないことでした。

庄屋様に行っても、竜泉寺の住職を煩わしても、お詫びの叶わないと言われるのを米友が、救い出そうとするつもりか知らん。

例の不動尊の画像は刀でも差すように、腰へしっかりと挿んで、藪の中にある大木へ攀上りました。その大木の上から見下ろすと、鈴喜の家の庭から、開け放した間取りまでが手に取るようです。

庭は思いの外ひっそりとしていたが、その一方の隅の楓の木の下に、後ろ手に結かれていたのは建具屋の平吉という人らしい。座敷の上には、お歴々の遠乗りの連中が食事の最中と見えて、誰も平吉を顧みる者がいない。槍持の奴の姿も見えなければ、仲間連中も一人としてその番をしている者はありません。あえて木の根へ括っておけば、あえて番人を附ける必要は

なからうけれど、うっかりしているのは、問題の十文字の九尺柄の槍です。あれほど大事な槍が、ここでは無雑作にその楓の木へ、横の方から立てかけられてあるだけです。大木の上から事の体を一通り見下ろした米友は、その無雑作に立てかけられた十文字の九尺柄の槍を見ると、むらむらと悪戯心が起りました。

問題の中心はあの男でなくて、あの槍であると思いました。それにからまった鎖紐の煙草入などは、もとより物の数ではないが、槍はたしかにあの連中のうちの表道具である。この場合、中へ飛び込んで、あの男を助けて来るのは容易なことではないが、あの槍を取り上げてしまうのは、さしたる難事ではないと気のついたのが、米友の悪戯心をそそったわけです。それをするには、ここから物置の屋根へ飛びうつって、母屋の庇を渡り、そこに腹這って手を延ばしさえすれば、楽々と槍を捲き上げることができると気がついてみると、それは面白い面白い、早く捲き上げて下さいと、槍の方で米友を手招きするように見え出したから堪りません。極めて身軽に米友は、大木の上から物置の屋根へ飛び下りてしまいました。

飛び下りた途端に帯をゆすぶって、腰に差していた不動尊の画像を背中へ廻し、そのままズルと走って母屋の庇へ出ました。庭では牡鶏が一羽、小首を傾げて物珍しそうに、米友の挙動をながめているだけです。

そこで米友は庇の上へ腹這いになって下をのぞいて

見ると、食事を了おわったお歴々の連中は、しきりに比翼塚ひよくづかの噂わさをしているらしい。結ゆわかれてゐる平吉は見れば、死人のようになって、すすり泣きをしているのがかわいそうです。

米友は右の手を差伸べると、楓に立てかけた槍をスルスルと引き上げました。同じ木の根に結かれていた平吉すらもそれを知らないくらいだから、誰あつて感づいた者はありません。ただ、屋根の上を歩いていたブチ猫がこの体を見て、急に両足を揃え、背骨を高くして、威嚇いかくの姿勢を示したのが、米友を苦笑いさせただけのものでした。

仕済しすましたりという面をして米友は、その槍を小脇にかい込むや、また以前の物置の上へ舞い戻つて、そこから塀を伝わつて、屋根の外へ出てしまいました。

それからいくらか経たない後のこと、いざという時に、楓の木へ立てかけた槍がありません。槍持の奴は青くなり、誰にたずねても要領を得たのはいない。平吉は打つても叩かれても知ろうはずがない。どうしても行方不明とあれば盗まれたのだ。盗まれたのは煙草入をからまれたよりは少し痛みが重い。ことに奉行であるか、与力であるか知らないが、そのお歴々が五六騎集まっている眼の前で盗まれたとすれば、いよいよ痛みが重い。

こうして鈴喜すずきの家の内外では、槍の紛失から青くなつて騒いでゐる時分に、外から一つの報告がありました。

不動の境内けいだいで、見慣れない小男が、しきりに十文字の槍をおもちゃにしているということです。槍をおもちゃにしているという報告は、穩かならぬ知らせです。鈴喜の家の内外を探しあぐねた連中が、ソレと言つて我れ先に飛び出しました。

これより先、槍を荷なつた宇治山田の米友は、どういう見か知らないが、不動の境内の人混みの中へ返つて返しました。十文字の槍は肩にしているが、不動の画像は腰にたばさんでいます。

いったい、この時分の米友の了見方というものは、米友自身にもよくわかりません。近來のことは世間にも、米友の周囲にも、あまり変へん兆ちようが多いから、この短気な正直者は精神に異状と言わないまでも、多少自暴やけ氣味きみになつてゐるかも知れません。槍を担ぎ出して、人目に触れない方角はいくらかもあるのに、好んで人出の多い不動の境内へ返つて返して、多くの人の注目に頓着せず、悠々と歩いて行くはあまりといえれば非常識です。

「おーい、小僧待て！」

かの槍持やりもち奴やつこをはじめ仲間ども、そのあとには鈴喜の家の主人雇人までがくつついて、ちょうど三仏堂の前まで来た時、その声を聞いて米友が、屹きつと後ろを振り返りました。

すわ、何事！ と思つたのは、前から事のなりゆきを知っているものばかりではありません。

待っていた！ と言わぬばかりに宇治山田の米友

は、九尺柄の十文字の槍を地に突き立て、三仏堂の前わだかまに蟠わだかまりました。その体を見ると、槍持の奴の癩かんしやく癩かんしやくが一時に破裂して、

「野郎、その槍はどこから持ってきた」

「鈴喜んちの庭から持ってきた」

米友はあえて驚かない。

「野郎、誰にことわって持ってきた」

「屋根の上の猫と、庭にいた鶏にことわって持ってきた」

「野郎、野郎」

槍持の奴は、にぎりこぶしを両方から握り固めました。

「何が野郎だ」

米友は短い両の足を、程よく踏張ふんばりました。

「よこしゃがれ」

槍持の奴は、米友をけし、飛ばそうとかかると、

「いやだい！」

身体をこころもち反そらせて、かかって来た槍持を左の手で、ひよいと横の方へ突きました。そこで槍持の奴が、はずみを食って脆もろくも右の方へゴロゴロと転がったから、見ているものが驚きました。

「おや」

見ている者が面かおの色を変えた時に、宇治山田の米友が地団駄を踏んで、

「ただはやれねえやい、この槍が欲しけりや、代りの品を持って来いやい」

こう言って米友は、三仏堂の縁の前へ飛び上りました。

驚くべきことには、その途端に十文字の槍の鞘さやを払ってしまったものです。それはハズミで鞘が取れたのではなく、米友自身が心得て鞘を払った上に、当人がその鞘を丁寧ふところに懐中へ入れてしまったから、間違いない余地はありません。槍の中身は、さすがによく手入れが届いて明晃めいこう々たる長剣五寸横手四寸の業物わざものです。

これは誰も氣狂きちがいだと思いました。その氣狂いが槍の鞘を払って、ともかくも寄らば突かんと構えたのだから、命知らずでも、これはうっかりと近寄れません。たとえハズミにしろ、槍持の奴を取って投げた今の早業からして見ると、かりそめに構えた槍の姿勢というものは、無茶に打ってかかるの隙が見出せないことが、不思議といえば不思議です。剣呑けんおんといえば剣呑です。

宇治山田の米友がいま構えている姿勢というのは、心あつてかなくてか、「大乱れ」という形になっていました。これは多数の太刀たちを相手に応対する時、十文字槍の人が好んで用ゆる姿勢で、槍を中取りちゅうりに持つのを米友は、もう少し突きつめているだけの違いです。この姿勢で充分に使わせると、左右を薙なぎ立てることができません。近寄るのを追払って寄せつけないことができます。また薙刀なぎなたをつかうと同じように使って、敵を左右へ刎退はねけ、突きのけることもできます。面と、

腕と、膝との三段を、透間もなく責め立てて敵を悩ますこともできます。太刀を取って向って来るものを上段に突き出して、脇架に大きく引き取ることも自在です。米友は心あって宝蔵院流の大乱れの型を用いているのではなからうけれど、その構えがおのずからそうなっていることは争えません。争えない証拠には、タジタジと後ろへさがる者はあっても、米友の槍先に向って行こうとする者がありません。

米友が大乱れに取っていることが、米友自らの気取りでなくいだから、立っている者もまた、本式にそれを受取ることでできないのは勿論です。ただ精悍無比……というよりは無茶なその挙動が、すべての人の荒胆をひしぎました。氣狂いの刃物には、うっかり近寄らないがいいという聡明さが、タジタジと、さすがの命知らずをも後しざりさせたものと見えま

す。実際また竜之助に離れて以来、不動の夢を見つづけに見てからの米友というものは、氣狂いにこそならな

いけれども、その心理作用に異常な焦りがありました。建具屋の平吉なるものの災難を聞いたところで、一種の義憤を含む例の短氣がむらむらと萌したことは、この男としては寧ろ可愛いところであって、いつもいつもそれがために得をしてはいない。その度毎に命の綱渡りのようなことばかりしているのだが、幸いに、危ないところで一命だけはとりとめているのだが、それにしては今日のはあまりに無茶です。

もし、取巻いている奴等が突っかって来たら、縦横無尽に突き立てるつもりか知らん。いつか甲州道中の鶴川で、川越し人足を相手にやった二の舞を、そこでもやり出すつもりか知らん。あの時は幸いに、駒井能登守という思いがけない仲裁人が出て来て、頭を坊主にされて納まったけれども、今日はあの伝ではゆくまい。能登守のような物のわかった、押しの利く仲裁人が滅多に出て来ようと思われないのに、もし一人でも負傷させたということになると、今度は甲州の山の中の川越し人足とは相手が違って、非常な面倒なものになる。その上に、またいくら米友が荒れてみたところで、楓の木に結いつけられている建具屋の平吉が赦さるべきものでもなく、かえって米友が荒れれば荒れるほど、平吉の罪も重くなるというものでしょう。それですから、ここで米友が力み出したのは全く無茶です。義憤としては意味をなすかも知れないが、義侠の振舞としては全然事壊しであります。

「みんな聞いてくれ、おいらは品川宿の平吉なんて人は知ってやしねえんだ、煙草入が引かなかったのも、おいらの知ったことじゃねえや、ただ、あんまり癪にさわるから、時候のかげんで、この槍を持ち出したくなっ

ったんだ、鎌宝蔵院の九尺柄の使いごろの槍だから、虫のいどころで、今日は思う存分に使ってみたくなっ

たんだ、使ってしまったら返してやるから、それまでおいらに貸してくれ」

そう言ってクルクルとさせた眼中が、氣のせい

今日は殺気を帯びているようです。

ややあつて宇治山田の米友は、九尺柄の十文字の槍を、宙天高くハネ上げました。下まで落ちて来る間に手拍子を丁ちようと一つ打って、その手で受け止めると、右の手で水返しみづがへのあたりを掴つかんで、十文字を外輪そとわにして、自分の身体を心棒に、独楽こまのようにブン廻しをはじめました。これは鎌宝蔵院流七十三手のうちには無い手です。かりに積ってみると槍が九尺、米友の手の長さが一尺五寸として、直径二丈一尺の大独楽が廻りはじめたものです。しかもその独楽の外輪は鎌になっているのだから、当れば肉も骨も切れてしまいます。

見ている者が肝きもを冷して遠退いたのは無理ありません。縁日で齒磨はみを売る香具師かぐしが、その前芸をやるために、あまり見物を近くへ寄せまいとして地面へ筋を引いて廻るのを、ここでは鞘さやを払った真槍しんそうで、無雑作にブン廻しをはじめたのだから、その乱暴さ加減は格別です。

こうして見物を程よく追払っておいた米友は、一方の角から一方の角へ向けて、真一文字に走り出しました。

これには見物は驚かされたが、その走り方が尋常ではありません。さながら鳥が両翼をひろげて、低く飛んで行くような走り方です。眼前にかなり広い沼があるって、その沼の上を一文字に飛んではいるが、岸に着くと、はたと翼を納めて休やすらわんとする気合の飛び方でありました。これはまさしく鎌宝蔵院でいう「飛乱ひらん」

の型であります。

一方の見物が、あっ！と飛び退いた時には、宇治山田の米友はクルリと背を向けて、また前の方角へ真一文字に走り出しました。前には中空を飛ぶ鳥のような姿勢であつたが、今度は形を下段げだんに沈めて、槍を一尺ほどにつめて走るのが、さながら猛獣の進むが如き勢いであります。

それで一方の見物がまた、はっと飛び散ったけれども米友は、素早く身を返して元のところに突立って槍を中取りに持ち、前へ突き出しかたと思うと、柄を返してはつたと物を打つような形をしました。左から打ち込み、右から打ち込み、さながら棒と槍とを併せて使うように、九尺の十文字を両様に使いました。

それが終ると、十文字の長剣ちちようだけは遊ばせて、横手の鎌だけをヒラリヒラリと胡蝶こちょうのように舞わしています。十文字を逆手さかてに持って、上から突き伏せる形をしてみるのかと思えば、躍り上って空飛ぶ鳥を打って落すように変化しました。穂先を三様に使い分け、槍の柄を二様に使い分けるのみならず、石突を返して無二無三に突いて引くかと思えば、飛び違いざまに敵の小手へ引鎌ひきがまをかけて滝落しの形がきまります。

こうして宇治山田の米友は、たった一人で無茶苦茶に十文字の九尺柄をおもちゃにしています。おもちゃにしているわけではないが、見物の者にはそうとしか見えないのであります。しかし、そのおもちゃの扱いぶりの熟練と輕妙とを極めた捌さばきは、無心で見ている

見物をも酔わせるほどの働きでありました。

自棄^{やけ}にしても氣狂^{きやう}いにしても、これは面白い観物^{みもの}だと思わないわけにはゆきません。たしかに面白いには面白いが、あぶないこともまたあぶない。だからうつかり、いよいよ近寄ることはできません。怒気紛々として掴みかかろうとしている下郎たちも、どうにもこうにも米友に近寄る隙さえ見出すことができません。ひとりで無茶苦茶に使っている槍が傍へ寄れば、きつと物を言うにちがいない。物を言えば必ず田楽刺^{でんがくざ}しに刺されてしまいそうである。思いがけない氣狂いだと思いました。誰もまだ、ほんとうに米友が槍を心得ているのだと氣のついたものはありません。自棄に振り廻している槍の間から、本格と変則とが米友流に随処にころがり出すその妙処^{てう}を、見て取ってくれる人のないのが氣の毒です。氣の毒であるのみならず、この時に、どこからともなく泥草鞋^{どろわらじ}が片一方、米友の面上を望んで降って来ました。その泥草鞋は身を沈めて避けなければ、それも、それを合図に石や、木や、竹切れが、雨霰^{あめあられ}と降って来ました。

それと見るや米友は横っ飛びに飛んで、三仏堂の縁の上へ飛び上ったかと思うと、扉を押して堂の中へ身を隠し、素早く中から扉を閉して門^{かど}を締めました。そこで、かの槍持奴をはじめ、仲間どもは扉の前まで押寄せたけれども、さて、それを踏み破って、一步を堂の中へ踏み入れようということには、躊躇^{ちゅうちよ}踏^{ちよ}しなければなりません。踏み込んだが最後、中に待ち構え

た氣狂いのために、田楽刺しにされることは請合いと思わなければなりません。そのほかの群集^{ぐんしゅう}は徒ら^{いたずら}に三仏堂のまわりを取巻いて、わいわい噪^{さわ}いでいるばかりです。

ややあって、高い欄間^{らんま}の間から面^{かお}を現わした宇治山田の米友が、群集を見下ろしてこう言いました。

「おいらは宇治山田の米友といって、生れは伊勢の国の拜田村の者だが、わけがあつて江戸へ出て来たには出て来たが、江戸に來ても根っから詰まらねえや、時候のせいかこのごろは、氣がいらいらしてたまらねえ、右を向いても、左を向いても、癪^{しゃく}にさわる世の中だ、いったい、おいらのような人間は、見るもの、聞くものが癪にさわるように出来てるんだと、このごろつくづくそう思った、だから、死んでしまった方がいいんだらう、命なんぞは惜しかあねえや、この世の中に未練なんぞはありやしねえんだ、おいらは氣が短けえから、いやになると自分の命までがいやになってたまらねえ、親兄弟があるわけじゃなし、女房子供があるわけでもねえから、どうでもなる命だ、命のもてあましだ、そうかと言って、川へ飛んだり、首を縊^くったりするのにも氣が利^きかねえからな、ちようどいいところだ、あの建具屋の若いのに身代りになってやろうと思つて、こんな悪戯^{いたづら}をやり出したんだ、どうだい、あの若いのにはおかみさんもあれば、子供もあるという話だから、おいらは今いう通り、そんな厄介者は一人もねえ命のもてあまし者なんだから、身代りにしてくれね

えか、つまり、あの建具屋の縄を解いてやって、その代りに、おいらをふん縛ってくれ、あの若いのを助けてやってくれさえすりゃあ、素直にこの槍を返してやるよ、それが承知がでなけりゃ、当分このお堂の中でお籠りだ、無茶に踏み込んで来る奴がありや、この十文字でいちいちドテッ腹へ穴をあけて、冥途へ道連れにしてやるまでのことだよ、断わっておくが、こう見えても、おいらは槍だけは一人前に遣えるんだぜ、見る人が見たらわかるんだろが、おいらの槍は天然自然に会得しているんだぜ、それに木下流の磨きをかけているんだぜ、槍は身に応じたもので、おいらの身体では二間三間の槍は柄に合わねえ、九尺の十文字でさえ、ちつとばかり長過ぎるんだが、どうやらこれなら使えねえことはなからう、本氣にこの槍で、おいらが荒れ出した日には、死人、怪我人が山ほど出来るぜ、危ねえもんだが、おいらはそれをやらねえ、おとなしくこのお堂の中へ隠れているから、誰か確かな人を証人に、あの建具屋の若いのを、おいらの眼の前で許してやってくれ、そうすれば、この槍はちゃんと返してやった上に、おいらが身代りになって、牢ん中へブチ込まれようとも、見ているところで首をちょんぎられようとも不足は言わねえ、誰でもいいから話のわかる人を出して、しっかりと挨拶してくれ、それからついでに、お握飯に沢庵をつけて三つ四つ差入れてもらいてえ」

聞いている者がその言い分の不敵なのに呆れ返りま

した。呆れ返りながらも、聞いてみると幾分の道理がないでもない。ことに最後に握飯を差入れろということは、かなり虫のいい注文だと思いましたが。しかし腹が減っているだろうから、それも無理のない注文だと同情する者もありました。

この事件はついに、泰叡山の方丈を煩わして、解決をつけることになったのは幸いです。

槍の主も、こうなっては事を好まないらしい。米友の言うような条件で、建具屋の平吉を許してやる代りに、米友が縛られることになりました。その証人は泰叡山の方丈です。十文字の槍は元の主へかえて、米友は縄をかけられて、名主の家へ預けられました。

それでこの事件の当座の解決は出来たが、後難があるといえばその後難は、一に米友の身にかかって来るはずで。けれども、それは泰叡山の取扱いでどうにかなることでしょう。

二

「ナニ、水戸の山崎？ 山崎がここへやって来たのか」
さすがの南条力も、何か呆れ面でありました。

「さきから、お屋敷の前を行ったり来たりしておいになりしました」

「そうか、訪ねて来たものを会わないわけにもいきまい、ここへ案内してくれ給え」

案内に立ったお松は、再び玄関へ取って返そうとす

ると、南条はお松を呼び留めて、「お松どの、ちょっと待ってくれ、その山崎という男は、直接に拙者の名を言つて尋ねて来たか、それとも、最初にほかの者の名を言つて訪ねて来たのではないか」

「いいえ、ほかにはどなた様のお名前もおっしゃりはないません、南条様にお目にかかりたいと申しました」

「そうか、それならばよろしい、間違つても宇津木兵馬を訪ねて来たと言ひはしまいな」

「左様なことはおっしゃいません」

「ま、もう少し待ってくれ、いま訪ねて来たその山崎譲という男はな、宇津木兵馬に会わせてはならない人だ、兵馬がこの家にいるということを知らせても悪い人だ、先方がなんと云つても兵馬の名を出してはいけないぜ。それから、兵馬の部屋をよく始末して、山崎に中を見られないようにしておかなくてはいかん、この後とても、その辺はよく心得ておいてくれ給えよ」

南条は立つて行くお松を、わざわざ呼び留めて、これだけの注意を与えました。

やがて案内を受けた山崎は、南条の部屋へ入ると、「いつぞやは失礼」

と言つて挨拶しました。

「その節は失礼」

南条もまた同じようなことを言つて、礼を返しました。

してみればこの二人は、もう既にどこかで初対面が済んでいるものと見えます。多分、中仙道筋から相前後して、甲府の城下へ入ってから後、あの辺で相見るの機会があつたものと見なければなりません。

「南条殿はいつごろ、こちらへおいでになりましたな」

「左様、あれからまもなく、こっちへやつて参りましたよ」

「ははあ、左様でござるか」

「して山崎君、君は」

「拙者は、つい、この二三日前に出て来ました」

「左様でござるか。して、当分はこちらにおいでか、

或いはまた甲州筋へお立帰りなさるか」

「早速、甲府へ帰り、それからまた上方へ出かけるつもりであつたが、江戸へ来て見ると、江戸にも存外、いたずら者が多いから、当分は帰らぬことになりましたわい」

「ハハハ、どこへ行つても当節は、いたずら者が多くて困りますな」

「仰せの通り。上方のいたずら者は禁廷のお庭の前でいたずらをする、江戸のいたずら者は將軍の膝元をつついてふざける、なかにはものずきなのがあつて、拙者如きの首まで欲しがる奴があるから、全くやりきれたものではない」

山崎はこう言つて自分の首筋を撫でて見せると、南条は抜からぬ面をして、

「實際、あぶないものさねえ」

と言いました。

「あぶないことこの上なし、今の江戸は將軍家がお留守で、お膝元の警備がゆるんでいるところにつけ込んで、たちのよくないいたずら者がウヨウヨしている」
「それとても、たかの知れた浮浪人の仕業ゆえに、大したことは、ようせまい」

「ところが、^{じたい}事体は意外に重大で、浮浪人の後ろには、容易ならぬ巨根^{おおね}が張っている、その根を断つにあらざれば葉は枯れない。どうです南条君、その巨根をひとつ掘り返してみたいものだが、手を貸して下さるまいか」

「拙者共でお役に立つならば、ずいぶんお手助けを致すまいものでもないが、いったい、その巨根というのは何者だ」

「それは三田の四国町あたりに巢を食っている」

「なるほど」

「つまり、いたずら者の本家本元は薩摩だ、薩摩というやつは実に不埒^{ふちせん}千万なやつだ、その薩摩を取って押えて、ふかしたり、焼いたりしてしまいたいものだ」

「なるほど」

南条はなるほどと言って、妙な笑い方をしました。

「薩摩を掘り返して、ふかしたり、焼いたりして食ってしまわなければ、江戸の市中は鎮^{しず}まらん」

山崎が、今にもふかしたての薯^{いも}を食ってしまいそうなことを言うと、南条は皮肉な面をして、

「しかし、七十万石の薩摩薯だから、ふかしても、焼

いても、かなり食いであるなあ。第一、ずいぶんあつちこつちへ蔓^{つる}が張っているだろうから、掘り返すだけでもなかなか骨の折れる仕事じゃ」

「我々の仕業は、ただ蔓を手繰^{たぐ}ってみりゃいいのだ、手繰ってみると、思いがけないところへその蔓が張っているから妙だ、本所の相生町あたりまで、その薯蔓が伸びているからなあ」

山崎は胡坐^{あぐら}をかき直して、煙草盆をつるし上げ、鼻の先まで持つて来ました。

そこで話が少し途切れているところへ、廊下を渡つて来る人の足音がありました。南条の居間の前で、その足音が止まると、

「南条殿、おいででござりますか」

障子を颯^{さつ}と押開いたものです。

「あ……」

それで南条も、ややあわてました。障子を押開いた人も面食^{めし}つて、入りもやらず、さりとて立去りもならず、

「お客^{きやく}来てしたか、失礼」

その人はぜひなく障子を締め直して立去ろうとしたが、そのお客と面^{かお}を見合せないわけにはゆきません。

「おお……」

その声と共に障子をたてきつて、さながら、見るべからざるものを見たように、あわただしくその場を辞して行きました。ここに来合せたのは不幸にして宇津木兵馬であります。山崎讓は南条に向つて、

「南条殿、今のは貴殿のお知合いか」

「うむ、知っている」

この時の南条の返答ぶりを聞いて山崎は、

「南条君、君、少年をそそのかしちゃいけないぜ」

こう言つて、頗る冷淡に構えました。

「そりやどういう意味じゃ」

南条もそらとぼけているようです。山崎は莞爾と笑いました。

「いったい、九州の人間は、婦人よりも少年を愛する癖がある、君もまた九州人だろう」

「以ての外、拙者が九州人でない証拠は、拙者の音を聞いたらわかるだろう、婦人や少年のことは与り知らんことじゃ」

「ははあ」

山崎は、なおひとしお思案の体で、南条の弁解をうっかりと聞き流していたが、また煙草盆を鼻の先へつるし上げて、煙草の火をつけました。屈んで煙草盆の火をつけないで、火をつけるたびに煙草盆の方を鼻の先までつるし上げるのがこの男の癖と見えます。

南条が何かしら躍起の体に見えるのに、山崎はかえって冷淡に落着いて、煙草を一ぷく吹かしてから、
「それはどうでもよろしいことだが、南条殿、今のあの少年は、ちょっとみどころのありそうな少年でござるな」

「山崎君、みどころがあるかないか、君には一見して、そんなことがわかるのか」

「わかる」

と言いながら山崎譲は吹殻をハタくと、またしても煙草盆を持って鼻の先へつるし上げました。

南条力は横の方を向いて、壁にかけた山水画をながめながめ、しきりに頬ひげを撫でている。山崎は煙草吸いだが、南条は煙草をのまない。

「というのは……」

山崎は煙草を一ぷくしてから、お茶を取って飲みました。

こうして、また二人が奥歯に物のはさまったような会談ぶりをつづけようとする時分に、廊下を逃げるように立去った宇津木兵馬は、お松の部屋の前に来て立っています。ここへ立寄るつもりで来たのではないが、ここへ来なければならぬようになったらしい。

相生町の老女の家を辞して出でた山崎譲は、両国橋を渡りながら腕を組んで、独合点をして相生町の方を振り返りました。

「ははあ、万事読めたわい、南条の奴が、宇津木兵馬をそそのかしてやらせたんだ、道理で小腕ながら、や、いっこい斬り方ではないと思った。しかし、宇津木があすこにいたということも意外だが、あの先生が南条に頼まれたからとて、余人ならぬ拙者に斬ってかかるというのはわからない、宇津木もおれも、壬生にいては一つ釜の飯を食った仲じゃないか、それに何を間違っておれに刃を向けるのだろう、わからんな。ことによつてあの先生、南条あたりに説かれて、我々に裏

切りをするつもりでやったとすれば憎むべしだ、生意気な奴だ、打捨^{うちや}ってはおけないが、我々を敵とするほどに恨みのあるはずはないし、また敵にすれば損のいくことはわかってる、どういうつもりだろう、ひとつ会って詰問してやろうか、返答次第によつては不憚^{ふびん}ながらそのままでは置けん。しかし、あいつの腕は惜しい。むしろ、これは裏を搔^かいて、こつちがあれを逆利用して、あの一味の動静を探らせてみようか。それがよからう。まあ、しかし、この辺まで当りがつけば仕事は面白くなる」

山崎はこう言つて、ほほ笑みをしながら、両国橋を歩いて行きました。

山崎は、江戸を騒がす総ての巨根^{おおね}が薩摩に存することをよく知っております。この南条や五十嵐らは薩摩の者ではないが、薩摩とは密接の脈絡を保つて、何か関東において事を起そうとしている野心のほども、よく見抜いていました。甲府城乗取りの陰謀は、これがために一頓挫して、南条らは一時、気を抜くために江戸へ退散したことも、山崎は最初から知っていました。江戸へ出て来ては、片手間に彼等の行先をつきとめてやろうと、半ばは好奇心でやって来たのが、大木戸の事件以来、こいつは一番、真剣で突っ込まなくてはならないと思いました。

それでこの数日間、得意の炯眼^{けいがん}を光らして見ると、つきとめたのが本所の相生町の老女の家です。南条や五十嵐がこの家に入出入りしていること、時としてそこ

を住居として逗留していることを知るのは、山崎の手腕ではたいした難事ではありませんでした。

それで、あらまし老女の家の内外の形勢の予備知識を得ておいてから、その内状を発^{あは}きにかかるべく、いかなる手段を取ろうかと考えたが、これは拙^{へた}なことをするよりは、いきなり南条にぶつつかつて、その度胆^{どげん}を抜いてやるのが面白からうと、結局、こうして今日、押しかけてみたわけです。押しかけると南条以外に珍らしい獲物^{えもの}がありました。しかしながら、南条も宇津木も、それはまだ末で、例の巨根はそこから蔓^{つる}を張っている薩州屋敷にある。將軍不在に乗じて、江戸を騒がすことの根源はそこにある、ということのみきわめが大事であります。

山崎はそれを考えながら、両国の見世物小屋のある方へと知らず知らず足を引かれて来ました。

ところが、そのなかのひととき大きな見世物小屋に「江戸の花 女軽業」の看板が掛っています。その看板の文字を山崎が眺めていると、筆蹟に見覚えがある。見世物小屋などに掲げるには惜しいほどの字だと思いました。

「そうだ、神尾の字に似ているな、甲府詰めになった神尾主膳の筆によく似ているが、いかに落ちぶれたとて、まさか神尾が看板書きにもなるまい。あの男は、今どこに何をしているかなあ」

山崎はこう思つて看板を見てみると、その次に白い布を長く垂れて、全く変った筆で、「清澄の茂太郎事

病気の為、向う三日間相休み申候」と認めてありました。

山崎がその小屋の前を通り過ぎると、後ろから肩を叩く者があります。

「山崎先生」

「おお、七兵衛か」

振返って見ると、自分と同じような装いをした七兵衛でありました。

「相生町へおいでになりましたか」

「うん、相生町へ乗り込んで見たところだが、お前はどこにいた」

「私は、この女軽業の親方というのを知っております故、ちよつと立寄って参りました。して、相生町の方の御首尾はいかがでございます」

「なかなか面白かった」

「これから、どちらへおいでになります」

「そうさな、お前と会って相談をしてみたいこともあるんだが……」

「それでは、この女軽業の小屋の中へおいでになりますせんか、今も申し上げる通り、この小屋の親方というのが至極別懇べっこんなんでございますから、楽屋で休みながら、お話を伺おうではございませんか」

「なるほど、それもよからう」

いったん通り過ぎた女軽業の小屋の前へ、二人は立戻って来て、

「七兵衛、一体こりや何だ、この清澄の茂太郎という

のは」

「これについては、一通りの魂胆こんたんがあるんでございます。清澄の茂太郎というのは、房州から仕込んで来たこの小屋の呼び物で、ずいぶん客を呼んでいたのですが、このごろ、その呼び物が逃げ出してしまったんですな。逃げた顛末てんまつは、私がよく存じておりますが、女同士の鞆当さやあてというところがおかしいんで、両方でイガミ合っているうちに、肝腎の当人が、行方知れずになつてしまつたんでございますよ。当人の茂太郎というのが、二人の女を出し抜いて、近所の馬を引張り出して、どこへ行つてしまつたか、いまだに行方がわかりません。何しろ呼び物でございますから、こんなことをして三日の申しわけをしておくんでございませす」

七兵衛は山崎を案内して、路次から楽屋の方へ廻りました。お角は留守でしたけれど、女どもが取持ちをします。

二人はそこで一杯やりながら、

「さて、七兵衛、これからまた一つ、お前の手を借りたい仕事が出来たのだ、それはほかではない、芝の三田の、俗に四国町というところをお前は知っているか」
「エエ、存じておりますとも、赤羽根橋を渡れば真直ぐに行つたところ、金杉橋を渡ると右へ曲つたところが、それでございます。あの辺には薩摩と、阿波と、有馬と、伊予の四力国のお大名のお邸があるから、それで俗に四国町と申すことまで、ちゃあんと存じて

おりますよ」

「それだ、その四国町のうちでもいちばん大きな、薩摩の屋敷をお前は知ってるだろうな」

「それもよく存じておりますよ、あのお屋敷の前を俗に御守殿前ごしゅでんまえと申しましてね、門は黒塗りの立派なものでございます、屋根は銅葺の破風はふう作りで、鬼瓦の代りに撞木しゅもくのようなものが置いてございます、正面三力所に轡くわの紋がありますから、誰が見たって、これが薩州鹿児島で七十七万石の島津のお屋敷だとわかります」

「なるほど」

そこで山崎譲は懷中から紙入を取り出して、拡げたのは美濃紙大の一枚の絵図面でありました。

「これがその薩摩屋敷だ」

今更のようにその図面を、しげしげとながめます。

「その薩摩のお屋敷が、どうかなすったのですか」

七兵衛も傍から覗のぞき込みました。

「お前も知ってるだろう、近頃、江戸の市中を騒がす悪い奴は、大抵ここから出ているのだ」

「なるほど」

「ところで、この薩摩屋敷の中の模様を、すっかり調べ上げてみたいのだが、どうだ、お前によい知恵はないか」

「左様でございますなあ……あのお屋敷が物騒だということ、今は、今に始まったことじゃございませんなあ、大分、眼をつけておいでなさる方がございましたはず

ですよ。お隣が阿波の屋敷でございましょう、その阿波様の屋敷の火の見櫓の上から、薩州のお屋敷の模様を、こっそりと探っておいでになったお方もありましたっけ」

「おや、どうしてお前は、そんなことまで知っている」「ちよっとした通りがかりの節に、そんな噂をお聞き申しました。上の山藩の金子とおっしゃるお方などは、あれから薩摩の屋敷の中をのぞいて見ては、しきりに絵図を引いておいでになったことがあるそうでございまずけれど、本当ですか、嘘ですか」

「ナニ、上の山藩の金子？ それでは上の山の金子与三郎のことだろう、あの男ならば、やりそうなことだ」「それでなんですか、山崎先生、あなたも、あの薩摩のお屋敷の様子を、くわしくお調べになりたいのですか」

「そうだ、それについてお前の知恵を借りたいものだが、何とかしてあの屋敷の中へ入ってみる手段はないものかな」

こう言われて七兵衛は、篤とつくりと考えてみる氣になりました。暫く考えていたが、やがて仔細らしく、

「先生が、あの屋敷へ入り込むというのは容易なことじゃござんすまい、私も少々勝手の悪いことがございますのです、ここに一つ思い浮んだのは、ほかじゃございませぬ、甲州の山の中から出て来た勝つ氣で勘定高い小倅こせがれが一人、あの近所に住んでいるんでございまず、こいつが田作ごまめの齒はぎしりで、ヒドク薩州のおさむ

らいを恨んでいるんですから、あいつをつついて、当らしてみたらどうかと思うんですが……慾こそ深い、目から鼻へ抜けるような小倅でございますから、つかいようによつては、ずいぶんお役に立ちましょう」

話半ばのところへ、お角が帰つて来ました。

「七兵衛さん、お待たせ申しました」

「どうでした、子供は見つかりましたかね」

「いいえ、見つかりません。何しろ、動物の言葉がよくわかる子供ですから、動物に好かれて仕方がありません、蛇でも鳥でも、あの子を見ると、みんな友達気取りになつて傍へ寄つて来るし、当人もまた動物が大好きなんですから、あぶなくて仕方がありません、とうとう繋いでおいた馬を引張つてどこかへ行つてしまいました」

お角はこう言っているうちに、焦つたように、

「この間、千住の方から来た人の話に、下総の小金ヶ原に近いところで、たった一人の子供が裸馬に乗つたり、馬から下りて手綱を引っぱたりして、遊びながら東の方へ歩いて行つたのを見た者があるといひましたから、それではないかと思ひます。それで、今日は、これから小金ヶ原まで人をやってみようかと思つているところでした」

「なるほど」

「ですけども、それは月夜の晩のことで、それを見た人も遠目のことですから、茂太郎だか、どうだか、

わかつたものじゃありません、土地のお百姓の草刈子供やなにかであつたりしちゃあ、ばかばかりと思ひますけれど、それでも諦めのためですから」

お角は、ただ茂太郎に逃げられたといふことのほかには、負けぬ氣の業腹があるようです。けれども、ここでは別段に、お絹のことも恨んでもいないようです。お絹が連れて行つたはずの茂太郎は、七兵衛の知恵で、伯耆の安綱と交換して、無事に取返したものと見えます。今度、その少年が馬を連れて逃げ出したというのは、それから後の事件で、お絹はまるつきりこの事件にはかかわつていないようです。もし、お絹があのままで、いまだに茂太郎を誘拐して返さないようなことがあれば、それこそお角だつて、これだけの焦れ方ではないでしょう。お絹もまた、命がけで、そんないたずらを試みるほどに目先が見えないはずはありません。

あれはあれで解決がついて、別に、清澄の茂太郎は感ずるところあつて、月明に乗り、馴れた馬をひきつれて、この見世物小屋を立去つたものと見えます。

三

三田の薩州邸の附近の、越後屋という店に奉公していた忠作が、その家を辞して、専ら薩州邸内の模様を探りにかかつたのは、それから間もない時のことであります。

いろいろに変装した忠作の身体が、薩州邸を中心に三田のあたりに出沒していましたが、ある日、越後屋へ立寄って中庭を通りかかると、一室のうちに声高に話をしているさむらいの言葉を聞きました。そのさむらいは何者であるか一向わからないが、酒を飲みつつ威勢のよい話をしているうちに、薩摩ということが折々出るから、そこで何となく聞捨てにならなくなつて――

「左様、なんと言つても薩摩で第一の人物は西郷吉之助だろう、西郷につづく者は……西郷につづく者は、ちよつと誰だか見当がつかない」

「西郷はエライには違ひない。土佐の坂本竜馬が、西郷の度量測るべからず、これを叩くこと大なれば、おのずから大に、これを叩くこと小なれば、おのずから小なり、と言つて舌を捲いているところを見ると、かなりの人物であることがわかる。中岡慎太郎の手紙でも、この人学識あり、胆略あり、常に寡言にして、最も思慮雄断に長じ、たまたま一言を出せば確然人腸を貫く、且つ徳高くして人を服し、しばしば艱難を経すこぶて頗る事に老練と、讃め立てているところを見ても、かなりの大豪傑であらうと思われるが、しかし、薩摩において西郷ばかりが人物ではあるまい、小松帯刀や大久保一蔵は、西郷に優るとも劣ることなき豪傑だといふ評判じゃ」

「そりゃあ西郷以外にも豪傑がなからうはずはない、まず殿様の斉彬が非凡の人物でなければ西郷を引立て

ることができようはずがない、知恵と手腕においては小松帯刀や大久保市蔵が西郷に優るとも、徳の一点に至つては、梯子をかけても及ぶまい、人物が大きくつて徳がある、英雄首をめぐらせばすなわち神仙である、西郷は乱世には英雄になれる、頭の振りよう一つでは聖人にも仙人にもなれるところが豪傑中の豪傑だ、おそろく、薩州だけではなく、今の日本をひつくるめて第一等の大人物だろうと考えられる」

「エラク西郷に惚れ込んだものだ。ところで、その徳というものが問題になるのだ、聖人君子の徳というもののは、施して求むるところなきもので、その徳天地に等しという広大無辺なものになるのだが、英雄豪傑の徳というものは、一種の人心收攬術に過ぎんだからな。西郷のその徳というのも要するに、薩摩一国に限られた徳で、大きいと言つたところで、たいてい底もあれば裏もあるものだから、このごろ、江戸の市中へ壮士を入れて、いたずらをさせているのも、一に西郷の方寸に出でることではないか。あの男がこうして傾きかかった徳川の腹を立たせようとする策略は、なかなか腹黒いものだ。西郷にしたところで、徳川が倒れたら、そのあとを島津に継がせたかろうさ。長州は長州で、またこの次の征夷大將軍は毛利から出さねばならぬと思つていゝだろう。みんな相当の芝居氣を持つていない奴はなからう。しかし、このごろの薩摩屋敷が江戸の町家を荒すのは、芝居の筋書が少し乱暴すぎる」

「ありやあ、西郷がやっているのではない、益満ますみつがやっているのだ」

「益満というのはなにものだ」

「人によつては、西郷につづく薩摩での人物だと言っている。益満が采配さいはいを振ふるつて、ああして江戸の市中を騒がしているのだから、まだまだ面白い芝居が見られるだろう」

立聞きをしていた忠作は、この言葉を聞いていたく興味に打たれました。それでは薩摩屋敷の荒れ者あばものの采配を振っているのは益満という男か、その益満という男は、どんな男であろうと、忠作は益満という名を、しっかりと頭の中へ刻みつけました。

そこを出てから忠作は、薩摩屋敷のまわりを一廻りして、芝浜へ向いた用心門のところまで来かかると、ちょうど門内から、忠作よりは二つも三つも年上であろうと思われる少年が出て来ました。少年に似合わず、少しく酒気を帯びているようです。

一目見ただけで忠作は、たしかに見覚えのある若ざむらいだと思いました。深く記憶を繰り返してみてもなく、目から鼻へ抜けるこの少年の頭には、甲斐の徳間入とくまいりの川の中で砂金をすくっていた時、あの崖道から下りて来て道をたずねたのが七兵衛で、川を隔てて向うの崖道を七兵衛と共に歩いて行ったのが、ここへ出て来た若い人であります。

「よろしい、この人のあとをつけてみよう、自分は笠をかぶつて、酒屋の御用聞ごようきの風ふうをしているのだから、

勝手が悪くはない」

忠作にあとをつけられているとは知らぬ若い人。ただいま、薩州邸の用心門を立ち出でたのは別人ではない、宇津木兵馬であります。あとをつける者ありとも知らぬ宇津木兵馬は、かなりいい心持になって、

武蔵野に草はしなじな多かれど

摘む菜にすればさても少なし……

と口ずさみながら、芝の山内の方面へ歩いて行きます。増上寺の松林へ入り込んだ兵馬は、その中の松の一本の下をグルグルと廻りはじめたが、刀の小柄こづかを抜き取りその松の木に、ビシリと突き立てて行つてしまいました。

兵馬の立去つたあとで、その松の木の傍へ寄つて見て、はじめて小柄の突き立てられてあることを知り、忠作はそれを無雑作に引抜いて、松の木には目じるしの疵きずをつけ、またも兵馬のあとをつけて行きます。

兵馬は朴齒ほおばの下駄はかなにかを穿はいている。忠作は草鞋わらじの御用聞。兩人ともに歩きも歩いたり、芝の三田から本所の相生町まで、一息に歩いてしまいました。

さて、相生町へ来ると兵馬が例の老女の家へ入ったのを、忠作はたしかに見届けました。

ここまで来てみると、いったい、この家は何者の住居であるかということ突き留めて帰らねばなりません。忠作は屋敷の周囲を二三度まわりました。

「こんにちは、まだ御用はございませんか」

裏口へ廻つて、こんな声色こゑいろを使つてみると、

「三河屋の小僧さん？」

「はい」

「ちよいとここへ来て手を貸して下さいな」

「へえ、承知致しました」

呼び込まれたのを幸いに、潜りから長屋へ入り、

「こんにちは」

「小僧さん、後生ですからここへ来て手を貸して下さい
い」

薄暗い中でしきりに女の声。

「どちらでございます」

「かまわないから早く来て下さいよ」

「こちらから上つてもよろしうございますか」

「どこからでもよいから、早く来て手を貸して下さい」
流し元のあたりで頻りに呼ぶものだから、忠作は大
急ぎで行って見ると、一人の女中が枳を膝の下に組み
しいて、天下分け目のような騒ぎをしているところで
す。枳落しをこしらえて鼠を伏せるには伏せたが、ど
うしていいか始末に困っているところらしい。

「鼠が捕れましたね」

「小僧さん、早く、どうかして下さいな」

忠作は上手に枳を明けて鼠をギユウと捉まえて、地
面へ置くと、足をあげてそれを踏み殺してしまいまし
た。女中はホッと息をついて、

「おや、いつもの小僧さんと違いますね」

と言って忠作の面を見ました。

「どうか御贔を願います」

忠作は頭を下げました。

そこへ、廊下を渡って、また一人の女の人が、

「お福さん」

と呼ばれて、鼠を押えた女中が、

「はい」

と答えました。

「後生ですから、これへ汲みたてのお冷水をいっぱい
頂戴」

一つの銀瓶を手に捧げています。

「畏まりました、あの大井戸から汲んで参りまし
う」

「済みませんね」

廊下を渡って来た女の人は、手に持っていた銀瓶を、
鼠を押えていた女中に手渡しすると、鼠を押えていた
女中は、それを持って水汲みに出かけたもののよう
です。

「毎度有難うございます」

忠作はいいかげんのことを言っ立去ろうとする時
に、銀瓶を捧げて来た女の人が、

「もし、小僧さん」

と呼び留めました。

「はい、御用でございますか」

「あの、お前さんは毎日ここへ来るでしょうね」

「はい、毎日伺います」

「それではね、ちよつと、わたしに頼まれて下さいな」
「へえ、よろしうございますとも、できますことなら

「何なりと」

忠作を見かけて、何事をか頼もうとするこの女の人は、お松でありました。

忠作は、その頼まれごとを勿怪の幸いと立戻ると、

お松は何か用向を言おうとして忠作の顔を見て、

「小僧さん、お前のお店はどこ」

「三河屋でございます」

忠作は抜からず返答をしたつもりでいました。

お松は暫く思案していたが、やがて何を頼むのかと見れば、

「小僧さん、ついでの時でいいから、岩見銀山の薬を少しばかり買って来て頂戴な」と言いました。

「はい、承知致しました」

岩見銀山の薬が買いたければ、特に改まって酒屋の御用間に頼むまでもあるまいに、先刻も女中が鼠を伏せて頻りに騒いでいたが、今もわざわざ岩見銀山を注文するのは、よくよくこの屋敷では鼠で困らされているのだろうと思いました。そこへ以前の女が銀瓶に水を満たして持って来ると、

「どうも御苦労さま」

お松はそれを受取って、もとの廊下を帰って行きます。忠作も、お松から岩見銀山を買うべく頼まれた小銭を持って屋敷の外へ出てしまいました。

兵馬が未だこの屋敷へ帰らず、忠作がそのまわりをうろつかない以前に、肩臂いからした多くの豪傑がこ

の屋敷へ入り込みました。集まるもの十五六名。

例の南条力が牛耳を取っていて、このごろ暫く姿を見せなかった五十嵐甲子雄も、その側に控えています。

「さて、諸君」

南条が議長の役を承って、

「ここに一つ、諸君の志願を募りたいことがある、それは勿体ないような仕事で、その実さまで勿体ないことではなく、子供だましのような仕事で、実は相当の危険がある、やってみることは雑作がなくて、やり了せた後に祟りが来ないとは言えない、金銭に積ってはいくらでもないが、ある方面の神経を焦すにはくつきような利目のある仕事だ」

「そりやいったい何だ」

「実はこういうわけなのだ、上野山内の東照宮へ忍び込んで……じゃない、闖入してだ、神前の幣束を奪って来るのだ、幣束に限ったことはない、東照権現の前にある有難そうなものを、すべてひっくり返して来るのだ、それを、こっそりやってはいけない、面白そうにやって来るのだ、東照権現が有難いものには有難いが、有難くないものにはこの通りだというところを見せて来ればいいのだ、そのお印に幣束を持ち帰って来るのだ。事は兎戯に類するが、その及ぼすところに魂胆がある」

南条はこう言いました。何のことかと思えば、徳川幕府の本尊様である東照権現の神前に無礼を加え来れという注文であります。なるほど、一派の志士には以

前から、こういうことをやりたがっている人がありました。頼山陽の息子さんの頼三樹三郎なんぞという人も、たしか東照宮の燈籠が憎かったと見えて、それを刀で斬りつけて、ついに捉まって自分の首を斬られるような羽目になりました。ここでもまた、東照宮の神前の幣束が目の敵になつてきたようです。なるほど、燈籠や幣束を苛めたところで仕方がない、兎戯に類する仕事であるが、それをやらせようという者には、相当の魂胆がなければなりません。

果して、それは面白いからやろうという者が続出しました。

全体が悉く志願者ですから、指名をすれば不平が出る、よろしい、主人役を除いてその余の同勢が悉く、明夕押出そうということにきまつて会が終りました。宇津木兵馬が帰つて来たのは、その散会の後のことであります。

果してその翌日、上野の東照宮に思いがけない乱暴人が闖入しました。

内陣の正面、東照公の木像を納めた扉の前に立っている、三本の金の御幣を担ぎ出したものがあります。事のついでに左右の白幣も、拝殿に立てた幣も引っこ抜いて担ぎ出しました。お石の間で散々にお神酒をいただいて行った形跡もあります。矢大臣の髻を掻きむしって行ったのもこの輩の仕業と覺しい。獅子頭もかぶってみたが被りきれないと見えて、投げ出して行ったものと覺しい。

階段の左右にかけた釣燈籠も外して行きました。それと聞いて寒松院の別当が僧侶や侍をつれて駈けつけた時分には、件の乱暴者の影も形も見えません。

話によると、十数名の浪人体の者が怖ろしい勢いで闖入して来て、居り合わせたものの支うる違もなく、瞬く間にこの乱暴を仕了せて、鬨の声を揚げて引上げてしまったとのことであります。

腕に覚えのある者を択んで、そのあとを追わせただれど、乱暴人の行方はいっこう知れないとのことであります。

ところが實際は、その乱暴人が大手を振つて御成街道を引上げるのを見た者があるということでもあります。東照宮の御前にあつた三本の金の御幣を真中に押立て、これ見よがしに大道の真中を練つて歩いて、まだ五軒町までは行くまいと沙汰をしているものもありました。

けれどもまた、それは嘘だ、あいつらは風を食つて、もう逃げ去ってしまった、もう一足早かりせば、といつて地団駄を踏むものもありました。

「追っかけて行つたけれども、あの勢いに怖れをなして逃げて来たのだ」と悪口を言うものもある。

なるほど彼等は、三本の金の御幣を真中に押立てて、大江戸の真中を大手を振つて歩いている。

「下にいろ、下にいろ、東照権現様の出開帳だ、お開帳が拝みたければ、芝の三田の薩州屋敷へ来るがよい、

我々は薩州屋敷に住居致すもので、今日、上野まで東照宮の開帳をお迎えに参ったものだ、減多なことを致すと神様の祟り^{たた}が怖いぞよ」

こう言つて通行の人々を威嚇^{いかく}しながら歩いていきます。通行の人たちは慄え上つて道を避けて通しました。何も知らない老人夫婦は、本当に権現様が薩摩屋敷までお出開帳をなさるのかと思つて、路傍に伏し拝む者もありました。

そうすると一行の連中のうちから、わざと物々しげに拝殿から持ち出した細い紙の幣^{ぬぎ}で、その善男善女の頭を撫でてやり、

「神妙、神妙、一心に帰命頂礼^{きみようちやうらい}すれば、後生往生^{ごしようおうじやう}うたがいあるべからず」

というようなことを言つて、よけいに善男善女を有難がらせたりするものもありました。

「なお御信心がお望みならば、三田の薩州屋敷まで出て来て来るがよい、三田の薩州屋敷」

しかつめらしく、そんなことを言つて二言目には薩州屋敷を引出すのであります。まこと、薩州屋敷のものならば、たとえ何かの恨み、或いは企らみあつて、こんなことをやらせたり、やったりしてからが、表向きに薩州の名前を出すようなことはなかりそうなものであるのに、好んで薩州を振廻すところを見れば、薩摩の勢力を看板にする、実は無宿浮浪の徒でもあろうかと思われるにも拘らず、その途中、この冒瀆^{ぼうとく}極まる浮浪者を取締る機関が届かないのは、よそに見えてい

も齒痒^{はがゆ}いようです。もしや市中取締りの酒井左衛門尉の手に属する者にでもでつくわそうものならば、血の雨が降るだろうと、町々の者はヒヤヒヤしているけれど、酒井の手の者も、ついにここまで行き渡らないで、この乱暴者の一隊は金の御幣を守護して、とうとう三田の薩州屋敷へ乗込んでしまいました。

四

下総国小金ヶ原^{しもうさのくにがねはら}では、このごろ妙なことが流行^はりました。

月の出る時分になると、一人の子供が、一月寺の門内から一人の坊さんを乗せた一頭の馬を曳^ひき出すと、

やれ見ろ、それ見ろ

筑波^{つくば}見ろ

筑波の山から鬼が出た

鬼じゃあるまい白犬だ

一匹吠えれば皆吠える

ワンワン、ワンワン

というこの地方の俗謡の節を、馬を曳き出した子供が面白く口笛で吹き立てると、小金の宿の者共が、我を争うて彼等の廻りを取巻きます。

この寺から馬を曳き出して、口笛を吹いているのは、両国の見世物にいた清澄の茂太郎で、その馬にのせられてゐる坊さんというのは、お喋^{しゃべ}り坊主の弁信であります。

彼等はここを立ち出でて、どこへ行こうというのではない、毎晩、夕方になるとこうして馬を引っぱり出して、広い原の方へと出かけます。

茂太郎に言わせれば、馬に水をつかわせ、不自由な弁信には、散歩の機会を与えるためかも知れないが、土地の人は、それを待ち兼ねた見世物でもあるように、駈け出して集まるのが毎晩のことです。集まったもののうちの子供たちは、地面を叩きながら茂太郎の口笛に合わせて、

やれ見ろ、それ見ろ

筑波見ろ

筑波の山から鬼が出た

と歌い出すものだから、娘たちや若い衆が面白くなつて、それにあわして、

鬼じゃあるまい白犬だ

一匹吠えれば皆吠える

興に乗って年寄までが、それに合唱して歌い出すと、おのずから足拍子が面白くなり、馬の前後に集まって、盆踊りの身ぶりで踊りながら町から原へと練り出します。

もしもし

あなたは誰ですか

わたしは盲めくらでござります

だれを探しに來たのです

秋ちゃんを探しに來たのです

三べん廻っておいでなさい

おいでなさい、おいでなさい

この踊りが噂うわさに広がって、北は相馬、南は葛飾かつしか、東は佐倉の方面から、小金の町へ人が集まって來ます。噂を聞いて、踊りを見物せんがために來た者が、知らず知らず興に乗って、自らが踊りの人とならないのはありません。その伝染性の速かなことは、電波のようであります。

一よさ、踊りの味を占めたものは、その翌日の暮るを待ち兼ねて集まらないということはあります。

二里、三里、四里までは物の数ではありません。五里、七里、八里も遠しとせずして來り踊る若い者があります。これは必ずしも、清澄の茂太郎が吹く口笛一つに引寄せられるものではありません。多くの人は、人の集まるところが好きです。ことに若い男は、若い女の集まるところを好みます。若い女とてもまた、若い男の踊るのを見ていやがるということはありません。

多数の人が、興に乗じて集まる時には、老いたるもまた、若きに化せられて、そこには一種の異った心理状態が現われると見えます。

小金ヶ原に集まるほどの者は、みな踊りの人となりました。踊りを知らないものも動かされて、夢中に踊りの人となりました。

踊らないのはただ馬上のお喋り坊主と、音頭おんどを取る清澄の茂太郎だけであります。

「茂ちゃん、これはいったい、どうなるのでしょうかね」
興に乗ずると我を忘れて、家を明けっ放しにして夜

もすがら踊り抜こうという連中が、若い者や子供ばかりではありません。町の全体に、ほとんど幾人というほどこか留守番がないで、声の美しいものは声を自慢に、踊りのうまいものは身ぶりを自慢に、茂太郎の馬の廻りは、忽ちの間に何百人という人の輪を作ります。

その相歌う声は、さしにも広い小金ヶ原の隅々に響いて、空にさやけき月の宮居にまでも届こうという有様です。しかしながら、その何百人が声を合わせて歌う声は、いつも茂太郎が口笛一つに支配されている。彼等の声がいかに高くなり、いかに雑多になろうとも、馬を曳いて真中に立つ茂太郎の口笛だけは高々として、すべての声と動揺との中に聳えています。その口笛によって音頭があり、音頭があつて初めて身ぶりがあるのです。

単にそれは人間のみではなく、家々に養っている犬という犬がまたこの騒ぎに共鳴して、争つて表へ出でて、踊りと踊りの間を面白く狂い廻り、トヤに就いている鶏は、しきりに羽ばたきをして、飛んで下りたがる。いよいよ広いところへ練り出して、馬をとどめて立つと、その周囲を輪になって、人という人が夢中になつて踊り狂うのは、冷やかに見てみると、物につかれたお思われぬ振舞です。

こう騒ぎが高くなつては、馬上に置かれたお喋り坊主の弁信も、そのお喋りを切り出す隙がありません。空しく馬に乗せられて、見えない目で、群集の騒ぎを

聞いているだけであります。

馬上の弁信は、その周囲に耳を聳するばかりの踊りの歌と、足拍子を聞きながら、馬の手綱を引っぱっている茂太郎に、馬上から問いかけました。

その時、茂太郎は、もう口笛をやめておりました。

最初は、いつも茂太郎の口笛から音頭が始まるのだが、こう酣わになつてしまうと、茂太郎は頃を見計らつて、口笛をやめて、足踏みだけをして、群集をながめているのです。

「弁信さん、どうなるんだか、わたしにもわからないのよ、最初のうちは、わたしの口笛でみんなが集まつたけれど、今となつては、わたしがみんなの踊りに引摺られているようなんだもの。もし、わたしが口笛を吹かなかつたり、音頭を取らなかつたりすれば、きつとみんなの人が、わたしを殺してしまうだろうと思つてよ」

茂太郎は足拍子を止めないで、弁信を見上げました。「毎晩毎晩、倍ぐらいずつ人が殖えてきますね、一昨夜の晩五百人あつたものなら、昨晩は千人になつていました、明日の晩は三千人の人が集まるかも知れません。小金ヶ原は広いから幾ら人が集まってもかまわないけれど、留守居をしている者から、きつと苦情が出ますよ、娘を持っている母親や、息子を踊らせておく父親や、留守を預かっている年寄たちが、長く黙ってはいませんよ、いつかこの踊りを差しとめに来るにきまつている。けれどもお気の毒ながらこうなつては、

それらの人の力で差しとめることはできませんね、音頭を取る茂ちゃん、踊り出さないわたしでさえも手がつけられないのに、留守をしている人たちに、どうしてこの踊り狂う人たちの血気を抑えることができません。そうなる、きつとお上のお声がかかりということになるにきまつている、お役人が出向いて来て力づくで差しとめるということにきまつているよ。その時にお役人から、この踊りの音頭取りとして、茂ちゃんとわたしは捉まったらどうしよう。別にわたしたちが悪いことをしたというわけではないが、わたしたちが音頭を取りさえしなければ、この踊りは鎮まるという心持で、二人を捉まえ、牢の中へ連れて行かれたらどうしましょう。茂ちゃん、今のうちに何とか考えてお置き、わたしは、それが心配になるのよ」

弁信は茂太郎と共に相警める心でこう言いました。二人が相警めているにかかわらず、一方にはこの盛んなる人気を利用せんとする者が現われました。誰がしたのか踊っている間へ、八幡様や水天宮のお札をおびただしく撒き散らしたものがあります。人は天からお札が降ったものと思いました。

また一方には、こういつて言い触らす者もあります。「世は末になった、近いうちに世界の立直しがある、踊るなら今のうち」

このふれごとは、短いながら、人の眼前の快楽を噓るにはかなりの力を持っていました。

当時、人の心はどこへ行ってもさまで穏かだという

わけにはゆきません。先覚の人は国家の急を見て奔走しているが、なんにも知らぬ市井村落の人たちとても、どこぞ心の底に不安が宿っていないということはありません。近いうちに世間に大変動が起るだろうという暗示は、女子供の心にまで映っていないということはありません。

「踊るなら今のうち」——そこで世の終りがなんとなく近づいて、人が前路の短い慾望を貪り取ろうとする形勢が見え出します。

小金ヶ原のこの踊りが、ついに江戸にまで伝わるに至り、その盛んなる噂を聞いて、江戸から見物に出かける者があります。見物に行った者は必ずその仲間に加わって踊り出さねば止まないことです。

今は、この踊りの場でうたう歌が、やれ見ろ、それ見ろ、筑波見ろ、というこの地方の民謡だけではありません。相馬流山の節を持ち込むものもあります。潮来出島を改作する者もあります。ついに「えいじゃないか」を歌い出すものがあり、その踊りぶりも得手勝手の千差万別なものとなりました。

その翌日は、お札の降ったところの原の真中に、白木造りの仮宮が出来ました。その晩には仮宮の前へ、誰がするともなく、おびただしい鏡餅の供え物です。紙に包んだ金何疋のお初穂が山のように積まれました。

多分、江戸から来た物好きがしたことでしょう。白の襦袢に白の鉢巻の揃いで繰り込んで来た一隊が、鐘

や太鼓で盛んに「えいじゃないか」を踊ります。

「一杯飲んでも、えいじゃないか、えいじゃないか」

神前のお神酒をかかえ出して、自らも飲み、人にもすすめながら踊りました。

小金ヶ原の真中へ町が立ちます。物を売る店が軒を並べました。

毎夜、一旦、ここへ集まって踊りの音頭を揃えた連中が、散々に踊り抜いて、おのおのその土地土地へ踊りながら帰る。水戸様街道を東へ踊り行くもの、松戸から千住をかけて江戸方面へ流れ込むもの、北は筑波根へ向って急ぐ者、南は千葉佐倉をめざして崩れて行くもの、それに沿道に残されたものが参加して踊って行くから、大河の流れのように末へ行くほど流れが太くなるのはあたりまえです。

その中心地、小金ヶ原へ一夜のうちに出来た仮宮の宮柱も、みるみる太くなりました。いつ任命されたものか、もうそこに一癖ありげな神主が、烏帽子直垂で納まっております。

なるほど、この神主は一癖も二癖もありげで、ただ宮居の中に納まっているのみでなく、笏を振って手下の者を差図し、奉納の鏡餅は鏡餅、お賽銭はお賽銭で、恭しげに処分をさせる。お供え餅は俵へ詰め、お賽銭は吠へ入れてどこかへ送らせてしまう。

それからまたこの神主は、清澄の茂太郎と、盲法師の弁信の御機嫌を取ることが気味の悪いほどであります。仮宮は何の神様であるか知らないが、その御本体

を大切にするよりは、茂太郎と弁信の御機嫌を取ることが大事であるらしい。

憐れむべき二人の少年は、今はこの神主が怖ろしいものになりました。

茂太郎と弁信は、このところを逃げ出そうとします。逃げ出さなければ、もう命が堪らないと思いました。けれども、こうなってみると彼等二人は、盲目な群集を利用せんとする連中のためになくてならぬ偶像です。逃げようとしても逃がすまい。強いて出ようとすれば、ここに留まっているよりも危ない。額を突き合せて二人が相談をしたけれども、何を言うにも弁信は盲目であり、茂太郎は子供である。

「では、与次郎に相談してみましようか」
「ああ、与次郎に相談してみましようよ」

二人は与次郎に向ってその苦しい立場を説明して、よい知恵を借りたいということを哀願すると、暫く眼をつぶって思案していた与次郎が……待って下さい、この与次郎というのは、一月寺の食堂に留守番をしている七十を越えた老爺のことです。一月寺の貫主は年のうち大抵、江戸の出張所に住んでいる。院代がいるにはいるが、これはほとんど寺のことには無頓着で、短笛を弄して遊んでいる。与次郎が寺のことはいちばんよく知っていて、いちばんよく働くから、貫主も一目も二目も置くことがあります。与次郎老人が一月寺の実際の執事でありました。その与次郎が、弁信と茂太郎に相談をかけられて、暫く眼をつぶって

首を捻^{ひね}っていたが、やがて、ずかずかと立って戸棚の中から引出して来たのが、竹の網代^{あじろ}の笈^{おい}であります。

「我、汝が為めに箇^この直綴^{じきとつ}を做得^{つくり}了^{おわ}り」

与次郎老人が味^{あじ}なことを言い出しました。弁信はその声を聞いたけれども、その物を見ることができません。茂太郎はその物を見ているけれども、その言葉を悟ることができません。そこで老人は破顔一笑して、諄々^{とくとく}と直綴の説明をはじめたようです。

どんなことに納得^{なつとく}させたものか、その日の夕方には、例によって馬に跨^{また}った弁信が、一月寺の門前に現われました。現われたには現われたが、今日はその現われ方がいつものとは違います。いつも前に立って馬を引張って口笛を吹くべきはずの茂太郎が見えないで、その代りでもあるまいが、馬上の弁信法師は、身なりに応じない大きな笈^{おい}を背負って、自ら手綱を取っています。それに今までは裸馬であったが、今日は質素ながらも鞍^{くら}を置いて手綱をかませています。ただ、弁信の背中に背負っている笈が、いかにも大きいのに、弁信そのものが小兵^{こひょう}の法師ですから、弁信が笈を負うのではなく、笈が弁信を背負って馬に乗っているように見えます。

それと見て集まった人々は、今日の馬上の有様の変ったのに驚き、また前にいるべきはずの茂太郎のいないことを怪しみもしました。それにも拘らず、盲法師の弁信は自ら手綱をかいくって、徐々^{しずしず}と馬を進めながら、今日は馬上で得意のお喋りをはじめます。

「皆さん、老少不定^{ろうしよふじよう}と申して、悲しいことでございます、長らく皆様の御鼻^{ごひいき}屑^{くず}になつておりました茂太郎が死にました……お驚きなさるのも御尤^{ごもつと}もでございます、皆様がお驚きなさるより先に、私が驚きました、無常の風は朝^{あした}にも吹き夕^{ゆうべ}にも吹くとは申しながら、なんとこれはあんまり情けないことではござりませぬか、昨日までは皆様と一緒に、ああして歌をうたい、踊りを見ておりました茂太郎が、僅か一日病んで、眠るが如くこの世の息を引取りましたと申しますのは、ほんとに私ながら夢のようでございます、これと申しても、みな前世の因縁^{いんえん}づくでございますから、誰を怨^{うら}み、何を悲しもうようもございませぬ、それで、私は友達の誼^{よし}みに、せめてあの子の後生^{ごしやうせい}追善^{ぜん}を営みたいと思ひまして、今夕^{こんせき}こうやって出て参りました、私の背中をござらん下さいまし、この大きな笈の中に、この世の息を引取った清澄の茂太郎が、眠るが如くに往生を致しておりますのでございます、私は、これを持って江戸の菩提寺^{ぼだいじ}へ安らかに葬ってやりたいと思ひまして、そうしてこうやって出かけたのでございます」

五

小金ヶ原の珍^{ちん}な現象が、江戸の市中までも評判になると、そこに謡言^{ようげん}がある。曰^{いわ}く、近いうちに江戸の町という町が火になる、その時は江戸の町民は悉^{ことごと}く住むところを失うて、一時、小金ヶ原へ仮りの都を作ら

ねばならぬ。その時に最も幸福に救われたいものは、今のうち小金ヶ原の新しい神様を信心しておくがよろしいと、それはずいぶんばかばかしい謠言であります。

多少、心ある者は、一笑に附して顧みざるべきほどの無稽の言葉であるにかかわらず、それを信ずるものが少なくなかったということは、今も昔も変わることがありません。踊りに行くものよりは信心に行く者が多くなって、相当の身分あり財産ある者が、続々として詰めかけるようになった時分のことであります。

例の道庵先生が、このことを洩れ聞くと、小膝を丁と打ちました。

「さあ、また乃公の出る幕になった」

そこで近辺に住む子分たちに触れを廻し、馬鹿囃子の一隊を狩集め、なお有志の大連を差加えて小金ヶ原へ乗込み、都鄙の道俗をアツと言わせようとして、明日あたりはその下検分に、小金ヶ原まで出張してみようか知らんと思っていたところへ、宇治山田の米友が訪ねて来ました。

「先生」

「やあ、珍物入来」

さすがの道庵先生が舌を巻いて、額を逆さに撫で上げました。

「どうも暫く御無沙汰をしました」

「いやはや」

道庵は額を逆さに撫でて米友の面を見ながら、いやはやと言ったのは、どういう意味だかよくわかりませ

ん。

「このごろは先生、おいらは目黒の方に行っていますよ」

「なるほど、お前さん、このごろは目黒の方においでなさるのかね」

「目黒の不動様のお寺に御厄介になってるんだが、先生、近いうち旅立ちをするんで、旅の用意の薬をちつとばかり貰いに来た」

「そうですか、よくおいでなさいましたね」

道庵は忌に御丁寧な挨拶をして、米友をながめています。

「この中へひとつ詰めておもらい申したいんだ。なあに、近所に医者もあるにはありますがね、素姓の知れた医者の方が安心だから、それで吉坊主にことわって、わざわざ先生のところまで貰いに来ました」

と言いながら米友は、懷ろから黒塗りの四重印籠を二組取り出して、道庵の前へ並べました。

「なるほど、近所に医者もあるにはあるが、素姓の知れた医者の方が安心だから、それで吉坊主にことわって、わざわざこの長者町の道庵先生までお運び下し置かれたというわけだね。それはそれは痛み入ったことだ、有難くお請けをして、早速、薬は調べて上げるが、米友、もう少し前へおいで」

今日の道庵の猫撫声が大へんに気味が悪いのです。米友にとっては、女軽業のお角というものが苦手であるとは違った呼吸で、この道庵もまた苦手でありま

す。道庵に頭からケシ飛ばされる時も、米友は面食めんくらつてしまいが、こうして猫撫声で出られる時も、気味が悪くてたまらない。もう少し前へおいでと言われて、米友が妙にハニカンでいると道庵は、

「薬のことは薬で、たしかに承知致したが、お前に少々物の言い方を教えてやるから、もう少し前へ出ておいで」

なんでもないことですけれども、そういうことが氣味が悪いから米友は、あまり道庵の家へ寄りつきません。道庵を恩人だとも思い、医術にかけてはエライところのある先生だと信じてはいるながらも、米友が道庵に懐なつかないのは、いつもこうして米友を苦しからせては喜ぶといったような、人の悪いところがあるからです。

「お前、今、なんと言った、目黒から出て来たが、近所に医者もないではないが、素姓の知れたのがいいから、それでこの道庵まで尋ねて来たか、こう言ったね、お前とおれの仲だからそれでもいいけれども、ほかのお医者様の前へ行つて、そんなことを言おうものなら、ハリ倒されるよ」

「そりやどういうわけだろう」

米友自身では、誰に向つてもハリ倒されるようなことを言つた覚えはないのです。ここの先生に向つて言い得べきことは、よその先生に向つても言い得ないはずはないと思ひました。また、人によつて言を二三にするような米友じゃあねえ、と腹の中は不平でしたが、

道庵に向つては、口に出して啖呵たんかを切るわけにはゆきません。

「どういふわけということとはなからうじゃねえか、よく考えてみな、お前は目黒から来たと言つたらう、目黒はそれ、筍たけのこの名所だろう、筍はお前、どこへ生えると思う」

「そりや先生、筍は竹藪たけやぶの中へ生えるにきまつてらあな」

「それ見ろ、つまり目黒は藪の名所だろう、その藪の中から出て来たくせに、近所に医者もあるにはあるがとは、道庵に対して随分失礼な言い分じゃねえか、いやにあてつこするじゃねえか、その位なら何も最初から、先生、わたしもこのごろ目黒におりまして、近所に藪もあるにはありますが、同じ藪でも長者町の藪の方が氣心が知れて安心だから、それで、わざわざやつて参りましたと、なぜ素直に言わねえのだ、それをいやに、遠廻しに、近所に医者もあるにはあるが、わざわざ来てやつたと思はせるように言われるのが癪だあな、おたがいこつ言つた氣性だから、物を言うにも齒に衣きぬを着せねえようにして交際つきあおうじゃねえか」
実にくだらないこじつけです。あんまりな言いがかりです。それを真面まおもに受けるのが米友の米友たる所以ゆゑんで、

「先生、そ、そんなわけで言つたわけじゃねえんだ、近所に藪があるというような、そんなあてつこすりで言つたわけじゃねえんだ、藪なんぞは、目黒でなくつ

たっていくらもあらあな」

「なおいけねえ！」

道庵が両手を差し上げたから、米友のあいた口が塞がりません。

けれども藪争いはそれより以上に根が張らず、道庵はいいかげんにして米友のために、二箇の印籠へ充分に薬を詰めてやりました。そうしていったい、旅へ出かけるというのはどこへ出かけるのだと尋ねると、米友の言うことには、このごろ、下総の国の小金ヶ原というところへ山師あらひとがみが出て、目黒の不動様のお札を撒き散らしたり、荒人神あらひとがみのうつしを持ち出したりするということだから、三仏堂の役僧と、講中の重なるものとなり、それを取調べのために小金ヶ原へ出張することになり、その帰りには佐倉、成田の方面へ廻るということで、いま目黒の不動様に厄介になっている米友が、その附人つきびとの一人に選ばれたという次第です。

それを聞くと道庵が珍重ちんちょうがつて、ちょうど、その小金ヶ原へは自分もひとつ下検分に行ってみたいと思っていたところだから、お前が行くならば一緒に行こうと、乗り気になってしまいました。

そこで米友は薬を貰って、一旦目黒の不動院へ立帰る。発足はその翌日未明ということにきまっています、道庵の一行は、上野の山下で不動院の一行を待ち合わせ、そこで相共に小金ヶ原まで乗込もうということに相談がきまりました。

翌朝、道庵は、いつぞや伊勢参りに連れて行った仙

公というのを一人だけ引具ひきぐして、山下に待ち合わせていますと、まもなく不動院の一行がやって来ました。この一行が千住の小塚原こつかばらに着いた時分も、朝未明あさまだきでありました。

なにげなく来て見ると、千住大橋あたりからお仕置場あたりまで、押し返されないほどの人出です。

「えいじゃないか」の踊りがある。木遣きやりくずしのような音頭がある。一天四海の太鼓の音らしいのも聞える。思うにこの夥おびただしい人数は昨夜一晚、踊って踊り抜いてまだ足りないで、ここまで練って来たものらしい。出かけた先は、やはり下総の小金ヶ原でしょう。小金ヶ原から踊り出して、小塚原へ来るまでに夜が明けてしまったと見える。夜が明けても彼等の踊り狂う熱は醒さめない。この分では、江戸の町中を踊り抜いて、また日が暮れて夜が明けるまで、踊り抜くのかも知れません。

不動堂の一行も、道庵先生の一行も、この人数をどうすることもできません。とても正面から行つては、この人数を押し破って通るといふわけにはゆきません。さりとて、行手は千住の大橋で、川を徒渡からわたりでもない限り、裏道を通り抜けるというわけにもゆきません。やむことを得ずしてお仕置場の中へ避けて、この人数をやり過すごうとしました。踊り狂って行く連中のほかに、この時分になると夥しい見物人です。

あとからあとからと続く人数の真中に、馬にのせられた偶像がたった一つある。

それは偶像ではない、たった一人の小坊主が、この人数にもあまり驚かない温良な黒馬に乗って、悲しそうな面かおをして、人波に捲かれていくことです。

その小坊主は、誰が見ても盲目めくらで、おまけに身体からだよりも大きな笈おひを背負っていることがどうにも不釣合いです。この小坊主だけが、どうして馬に乗っているのだろう。馬に乗っているというよりは、見たところ、むりやりに馬へ搔かきのせられて、それを取捲く群集が、山車だしの人形のように守り立てて、山の上まで持つて行くという勢いですから、小坊主は騎虎の勢いで下りるにも下りられず、言いわけをしても、この騒ぎで聞き入れられず、ぜひなく多数に擁ようせられて、行くところまで行くという気になっているものようです。

周囲の人々が熱あつききって、氣狂きちがひいじみているにかかわらず、この小坊主だけが、泣くにも泣かれない面かおいろ色を遠くから見ると、ちょうど、ところが千住の小塚原であるだけに、さながら屠所としよの歩みのような小坊主の氣色けしきを見ると、いかにも物哀れで、群集の熱狂がこれから何をやり出すのだから、心配に堪えられないことどもです。

「皆さん、ここはどこでございます、もうこの辺でおろして下さいまし」

馬上の小坊主は、泣くが如く、訴うるが如く、こう言いますと、

「ここは、まだ江戸のつつき、千住の小塚原だよ」と馬側うまわきから答える者がありました。

「ええ、小塚原ですって？ あ、そんなら皆さん、ここでおろして下さいまし」

馬上の小坊主は声を振ふり絞しぼりました。

「まだまだ小石川の伝通院までは、なかなかの道のりだ、もう少し乗っておいでなさい、伝通院の御門前までは、ぜひぜひ送って上げますからね」

馬側から、またこう言って叫ぶ者がありました。

「いいえ、もうここですよろしいのです、ここが小塚原とお聞き申してみますと、わたくしはここを乗打ちができないわけがあるんでございます。もし、もうこの辺がお仕置場でございましょう、わたくしはここで、お地藏様へお礼をして通らなければならないわけがあるんでございます」

小坊主は、誰がなんと言っても、ここで下りようとなりました。

やがて、その大きな笈おひを背負った小坊主が、馬の背から下りて、小塚原のお仕置場の高さ八尺の石の地藏尊の前へ、ようよう這はいついた時に、それを見た宇治山田の米友が、

「ありやあ、清澄から来た弁信だ」

疲れきっているくせに重たそうな笈を背負った弁信は、ようように地藏尊の前へのたりつくと、そのところへ平伏してしまいました。むしろ、その重い笈のために、つぶされてしまったようです。

それを見た群集は、あわてて弁信を引起して、またも馬上へ運ぼうとしますと、弁信は力なき声をふり上

げて、

「どうぞ、もうお赦ゆるし下さいまし、わたくしは疲れきってしまつたから、もう馬に乗るのはいやでございませ、どこぞへ暫く休ませて下さいまし」

弁信は、再び馬に乗せられるのを頻しきりにいやがるのに、多数の者は、

「もう少しだから、辛抱なさい、お前さんが御本尊だ、御本尊が馬の上にござらないと、踊る人が張合いがない、伝通院まで送って上げるから、ぜひとも辛抱なさい」

弁信をむりやりに馬の背へ掻き乗せようとする。それを弁信はしきりにいやがっているのです。あれほど疲れてもいるし、いやがりもするのを、なんだつて多数おおぜいして担ぎ上げようとするのだから、それがいいよわからないから、米友は人を掻きわけて、ずっと傍へ寄りました。米友が人を掻きわけて行くと、その傍にいた道庵も、こいつはまた変つてると思つて、抜からぬ面かおをして米友にくつついて行きました。

「おいおい、お前は弁信さんじゃねえか」

こう言つて米友が言葉をかけると、弁信が、

「はいはい、あなたはどなたでございましたか知ら」

「俺わいらは米友だよ、友造だよ」

「ああ、友達でございましたか、その後は御無沙汰を致してしまいました、お前さんもお壮健たっしやで結構でございます、わたくしもまた、あれから、お前さんと別れましてからは、下総国小金ヶ原の一月寺というのへ

行つておりましたが、一月寺におりますうちに、わたくしは清澄の茂太郎と一緒にになりました、あなたにも一度お消息たよりをしようと思つているうちに、つい御無沙汰になつてしまいました……」

この場合においても、お喋り坊主の弁信は、一別来の一伍いちぶしゅう一什を喋り出そうとするから、米友も堪り兼ねて、

「弁信さん、御無沙汰どころじゃなからうぜ、お前は今、弱りきつて死にかけてるじゃねえか、いつたい、そりやどうしたんだい、大きなものを背負しょい込んで、死にかけていながら、御無沙汰でもなからうじゃねえか」

「ええ、その通りでございます、友造さん、わたくしはごらの通りに弱りきつております、死にかけているんでございます、どうか助けておくんないまし」
「どうしたんだ、いつたい、わけがわからねえや、どうして助けりゃいいんだ」

「友造さん、わたしはもう、馬に乗りたくないのでございます、わたしを助けて下さろうと思つたら、わたしを馬に乗せないようにしていただきなのでございませ、馬に乗せないで、この笈物おひぶつのお守もりをしながら、どこかそこらで、ゆっくり休ませていただきたいんでございます、皆さんがむりやりに、わたしを馬に乗せて、踊つておいでなさろうとするが、私はもういやでございませ、このうえ馬に乗せられると、私も死んでしまひませ、背中の笈物も死んでしまひませ、どうか、

お助けなすって、私をこのうえ、馬に乗せないようにして下さいまし、お願いでございます」

そこで米友が、いよいよわからなくなってしまうした。わからないけれど、さしあたっての急務は、この小坊主を馬に乗せないで、どこかへ静かに休息させてやればよいのだと思いました。

そこで米友が、大勢を相手にその掛合いをしようという気になっていると、

「なるほど……」

米友の背後から図抜けて大きな声を出して「なるほど！」と言って、人を驚かしたものがありません。一同がその声に吃驚して見ると、それは別人ならぬ道庵先生です。

「こりゃいけねえ、お前たちは、この盲目の坊さんめくらを人身御供ごごとして、むりやりに馬に乗せて引張って来たんだろうが、見た通り弱りきって、疲れ果てているのを、この上馬に乗せようとするのは惨酷じやねえか。

昔、神田の祭礼の時に馬鹿な奴がすっぱだかあって、素裸うろしへ漆を塗って、生きた人形になって山車だしへ乗っかって、曳かれる者も得意、曳く者も得意でいたところが、いいかげん引っぱってから卸して見ると、その人形が死んでいたという話があらあ。この坊さんだって、もう二三丁も馬に乗せて行くものなら往生しちまわあ。幸い道庵が通りかかった以上は、商売の手前、見殺しにできねえ、この小坊主は暫く道庵が預かって、療治を加えてやった上、改めてお前たちに引渡すから、お

前たち、暫くの間、ここで踊って待っている、この小塚原の亡者どもが浮び出すほど、踊って待っている：ところできつたい、お前たちは無暗に踊ったり跳ねたりしているようだが、踊りのこつというものを知っているのか、それとも知らずに踊っているのか、おそらく知っちゃあいめえな。自分からかういふと口幅くちはばつたいようだが、日本広しといえども馬鹿囃子にかけちゃあ、当時下谷の長者町の道庵の右に出でる者があつたらお目にかかる、この道庵の眼から見れば、お前たちの踊りなんぞは甘えあめもので、からつきし、物になっちゃあいねえ」

石の地藏尊の台座の上に突立って、いっぞやの貧窮組の先達気取りで演説をはじめた道庵が、飛んでもないところへ脱線してしまいました。

実際、馬鹿面踊りの極意ごくいに達している道庵の眼から見れば、小金ヶ原の場末から起り出した不統一な、雑駁ざっぽくな、でたらめな、この輩やからの連中の踊りっぷりなんぞは、見ていられないのかも知れません。そうだとすれば、道庵が思わず義憤を発して、この衆愚を啓発してやろうという気になったのも、無理のないところがあります。

「そもそも馬鹿囃子のはじまりは、伊奈半左衛門が、政略のためにやったということになっているが、道庵に言わせるとそうでねえ。ちうこうになって雲州松江の松平出羽守、常陸ひたちの土浦の土屋相模守、美作勝山みまさかの三浦志摩守といったような馬鹿殿様が力を入れて、松

江流、土屋流、三浦流という三つの流儀をこしらえたが、馬鹿囃子の本音は、トテモ殿様のお道楽では出て来ねえ。つづいて旗本の次男三男のやくざ者が、深川囃子というのをこしらえると、本所に住んでいたのらくらの御家人が負けない気になって、本所囃子というのをこしらえやがったが、やっぱり馬鹿囃子の本音は、生白い旗本や御家人の腕では叩き出せねえから、まもなく元へ返ってしまった。ところで、その元というのが、旧来の鰐江流の五囃子だが、道庵に言わせると、こいつもまだ不足がある。ところで……」

道庵は得意になって、馬鹿囃子の気焰をあげはじめました。この場合においてお喋り坊主以上のお喋りが始まりそうだから、気の短い米友がじっとしてはおられませんか。

「先生、いい加減にしねえと、この坊さんが死んじまうぜ」

「あ、そうだそうだ、馬鹿囃子より人の命が大事だ、大事だ」

道庵は、あわてて地蔵の台座の上から飛び下りて、米友と力を合わせて弁信を笈ぐるみ荷って、近いところの休み茶屋に担ぎ込みました。

道庵が、お喋り坊主を休み茶屋の中へ連れ込んで療治を加えている間、外に立っている群集は、相変らず踊り狂っていたが、暫くして頻りに、その偶像を返さんことを要求します。

「坊さんかえしてもえいじゃないか、えいじゃないか」

休み茶屋の周囲を取巻く事の体が、最初から穩かではありません。ところで、跳り出した道庵が、公衆の眼の前へ現われて、

「さあ、お前たち、あの小坊主にいろいろと療治を加えてみたが、少なくともお三日間は安静にいらしむべき容態である、いま動かしては命があぶない。といってお前たちも、折角ここまで引出した人形なしにはうまく踊れまい。そこは乃公も察しているから相談ずくで、新しい人形を一つお前たちに貸してやる、これは鎌倉の右大将米友公という人形で、形は小さいが出来は丈夫に出来ている、ただいまのお喋り坊主と違って、ちっとやそつといじくつたところで破損をする代物ではない、その代りいじくり方が悪いとムクれ出す、ムクれ出した日には、ちよつと手がつけられない、そのつもりでこの人形を伝通院まで貸してやるから、これを小坊主の代りに馬の上へ乗つけて踊れ、踊れ」

お喋り坊主の代りに道庵が提供したのは、鎌倉の右大将米友公と言ったけれども、実は宇治山田の米友のことであります。いつのまにか道庵が米友に因果をふくめて、盲法師の身代りとなるべく納得せしめたと見えて、米友は甘んじて、彼等の偶像となろうとするものらしい。しかし、米友は正のままでそこへ現われて来ませんでした。どこにあったか天狗の面をかぶって、頭へは急ごしらえの紙製の兜巾を置き、その背中には、前に弁信が背負っていた笈を、やはり頭高に背負いなして、手には短い丸い杖を持って現われた

から、それを金剛杖だと思いました。そうして誰ひとり、米友だと気のつく者はありません。

「おやまだいしょうどうみょうおう
大山大聖不動明王！」

群集の中から喚と鬨の声を揚げるものがありました。

「南無三十六童子、いけいら童子、うばきや童子、はらはら童子、らだら童子」

と相和するものもありました。

要するにこの場合は、変ったものでありさえすればよいのです。なんとか納まりそうな人形を提供して、馬に乗せさえすればよかったから、天狗の面が図に当りました。

「大山阿夫利山大権現、大天狗小天狗、町内の若い者」

そこで米友が馬に乗ると、彼等は以前に、しおれきった小坊主をむりやりに人形に奉って来た時よりは、一層の人氣を加えて、再び踊り熱が火の手を加えて、
「大山大聖不動明王、さんげさんげ六根清浄、さんげさんげ六根清浄」

こうして新手を加えた踊りの一隊は、小塚原を勢よく繰出しました。

「鎌倉の右大将米友公の御入り」

声高らかに呼ぶ者があると、

「頼朝公の御入り」

とわけわからずに同ずるものもありました。これが小塚原を繰出すと、ゆくゆく箕輪、山谷、金杉あたりから聞き伝えた物好き連が、面白半分に潮の如く集ま

って来て踊りました。その唄と踊りの千差万別なることは名状すべくありません。大山大聖とあがめまつるものもあれば、鎌倉の右大将だといところから鎌倉ぶしを謡うものもある、木遣を自慢にうなるものもある、一貫三百を叩き出すものもあるという景気は、到底人間業とは見えませんでした。

この噂が程遠からぬ吉原の廓へ響くと、吉原の有志は、どう考えたものか、ぜひ道を枉げて、その一隊に吉原へ繰込んでいただきたいという交渉であります。

ずっと伝通院まで乗込むはずであつたのを、吉原遊廓の懇望もだし難く、大山大聖が、しばらくそこへ駕を枉げることになりました。吉原では、大樽の鏡を抜いてこの一行をもてなします。お賽銭が雨の降るようです。

ここで暫く休んで、いざ出立という時に、米友の馬側に二人の童子が立ちました。その一人は金伽羅童子、一人は制陀伽童子、二人ともに絵に見る通りの仮装をして、これから大聖不動の馬側に添うて、どこまでもおともを仕ろうという気色です。

宇治山田の米友が心中の大迷惑は察するに余りあることで、米友としては面白くもなんでもなく、弁信の身代りのために、しばらく犠牲となつて馬上に忍び、小石川の伝通院とやらへ、ひとまず送り込まれてしまえば、それで一通りの義務は済むものと思つていたのだから、道草を食わずに早く伝通院へたどりついて、

仮面を取ってしまいたいのだが、まずもって吉原の信心家へ招かれて、退引のつぎのならなくなったのが小面倒の起りです。

彼等はこの踊りの一行が、世直しの大明神の出現だとも信じているらしい。ことに一行の本尊様に祭り上げられている馬上の偶像に向つては、正しょう真しんの犬天あまくだが天降あまくだつたものとも思っているのか知らん。そのもてなし方は有難いのが半分、面白がりも半分で、やたらに崇め奉あがつて、これから到るところ、そのお立寄りを願うことになりそうです。お立寄りを請こわれるたびに踊り子の連中には、相当の振舞があるにはあるが、いよいよ大迷惑なのは米友です。

両側めあての家から、紙に捻ひねつたお賽銭を投げるのが、誰を目的めあてであろうはずはない、みんな米友の身体をめがけて投げられるのだから、

「痛工やい」

米友はムキになって痛がっているところへ、馬の側に立った二人の童子は、ヒューヒューヒャラヒャラと節面白く横笛を吹きはじめました。その笛の調べが実にうまい。踊りの連中は、その笛の音でまたいい心持に踊り出しました。

その時、一方、吉原の廓内では、思いもかけぬ天上から、ひらひらと落花の舞うが如く、幾多の紙片が落ちて来るから、或る者は欄干てすりから手を伸ばし、或る者は屋根へ上り、或る者はまた物干へ駆け上つて、その紙片を手にとって見ると、それはいずれも、あらたか

な神仏のお札であります。にわかにおしいただいて神棚へ上げるやら、お神酒みきを供えるやらの騒ぎとなりました。

どうしてもこれには、何か黒幕がなければならぬことです。

それから後、かつて貧窮組が起つた時と同じ伝染作用が、江戸の市中に起りました。前の時は不得要領な貧民どもが寄り集まって、お粥かゆを食って食い歩いたのだが、今度は無暗に踊つて踊り歩くのです。甲の町内で阿夫利山の木太刀を担ぎ出すと、乙の町内では鎮守の獅子頭を振り立てるものがあります。山伏い体の男を馬に乗せて、法螺ほらを吹かせて押出すのもあります。貧窮組が不得要領であつた如くに、この踊りの流行も不得要領です。ひとり馬に乗せられた天狗の面は、必ずしも最初の目的通り、伝通院へ送り込まれるものとは限りません。調子に乗つてここを振出しに、江戸八百八街を引き廻されることになるかも知れません。

金伽羅こんがら童子どうじ、制陀伽せいたか童子どうじが笛を吹いて行くと、揃いの単衣ひとえを着た二十余名の若い者が、団扇うちわを以て、馬上の天狗もろともに前後左右から煽あおぎ立てました。

その煽ぎ立てている揃いの若い者の中を米友が見下ろすと、あつと意外に驚く人物が交つていたから、米友はかぶつた天狗の面の中から、その男を見つめました。

米友が驚いたその揃いの若者の中の男というのは、いつぞや本所の相生町の家で、米友の槍先にかけて、

追払った浪人のなかの一人です。

六

それとは別に、小塚原のお仕置場の前の休み茶屋に収容されたお喋り坊主の弁信の枕許には、道庵もいれば、清澄の茂太郎もいます。道庵のいることは不思議ではないが、茂太郎は、弁信が背負って来た笈の中から出たものです。

疲労しきった弁信は、そこで前後も知らぬ熟睡に耽っているが、さて道庵の身になってみると、小金ヶ原の踊りは、今やああして江戸の市中へ移って来てみると、これから小金ヶ原まで視察に行くほどの必要もなく、またかえってこの江戸の市中のこれからの騒ぎを見のがすわけにゆかないから、そこで弁信、茂太郎の徒をつれて引返すことにきめました。不動院の一行は、ともかく米友は道庵に托しておいて、小金ヶ原へ出かけて一応の視察を試みるようになりました。

弁信と茂太郎とを駕籠に乗せて、長者町の屋敷へ帰って来た道庵、外しておいた門札をかけ返すと間もなく、病家の迎えを受けたから早速でかけます。

弁信は一間のうちに死んだものようになって眠っている。茂太郎はその枕許についていながら、退屈まぎれに庭を見ると、一叢の竹が密生していました。その竹を見ると茂太郎は、笛が作ってみたいく作ってみたいく堪らなくなりました。笛を作るには作りごろの

竹であると思いました。

欲しくなるとじっとしてはおられないのがこの少年の癖で、とうとう庭へ下りて、丁々とその一本の竹を切って取り、手際よくこしらえ上げたのが一管の、一節切に似たものです。

それを唇に当てて、ひとり微笑んで、思うままにそれを吹き鳴らして楽しもうとしたが、それではせっかく寝ている弁信を驚かすことを怖るもののように、弁信の寝顔をながめました。

実際よく寝ることであると思わないわけにはゆきません。自分は、あの狭い笈の中へ押込められて、馬の背に揺られ通して来たけれど、さして眠いとも思わず、またさして疲労も感じないのに、弁信さんの眠たいことと、疲れっぷりは随分ひどいと、今更のようにながめました。しかし、自分は、海へもぐっても覚えのあることで人並よりはズンと息が長いのだし、一晚二晩寝なかつたところが何ともないように生れているが、世間の人がみんなそうではない。そこで、いささかも弁信の安眠を妨げないように、自分も心置きなく、暫くでもこの笛を吹き試みて遊びたいという心から、また廊下へ出てみました。廊下へ出てみたところで、やっぱりその響きが、弁信を驚かそうという心配は同じことです。

笛を携えて庭へ下りて、軒に立てかけた梯子を見上げると、屋根の上高く櫓が組んであるのを認めました。

物干にしては高過ぎる、と思ひながら、あそこなら誰憚らず笛を吹いてみるに恰好だと思ひました。

この櫓というのは、道庵先生が鰯八大尽に対抗して、馬鹿囃子を興行するために特に組み上げた櫓の名残りであります。

茂太郎が屋根の上の櫓で、誰憚らず笛を吹こうと上つてみたところが、大尽の御殿の広間に多数の人が集まっているのが、そこから手に取るように見下ろすことができます。

見れば、それは、やはり踊っているのです。しかも踊っているのは、いずれも綺羅びやかな人ばかりであります。

さても踊ることの好きな国民かなと、笛を携えた茂太郎が呆れて、その広間の中をながめていました。

小金ヶ原から踊り抜いて来た連中は民衆の階級であります。彼等のはのぼせ上つてところ嫌わず踊るから、ついにはふん縛られたりするようになる。この中で踊っている連中は、どんなに間違つても縛られることはないから、男と女とが抱き合つたりなんかして、盛んに踊っているのです。

われら笛吹けども踊らず、と昔の人は言いましたが、笛を吹かないでも、このくらい内と外とで踊れば充分だろうと思われます。茂太郎はそれを見てみると、みんな立派な人たちが、いい年をして、どうしてまた、あんなに食いついたり、抱き合つたりして、臆面もなく踊れるのだろうと思ひました。けれども、この人た

ちは、かの民衆階級のするように、決して無暗に馬鹿踊りをするわけではありません。こうして出来た入場料を、みんな慈善事業に寄附しようという、非常に高尚な目的でやっているのですから、食いついたり、抱き合つたりして踊つたりしたところが、その性質がおのずから違っていることを茂太郎は知らないから、ただ笛を携えて、しきりにながめているばかりです。

さて、ここでひとつ笛を吹いたら、たしかにあの人たちを驚かすことはできると思ひました。人を驚かすために吹きに来たのではなく、人を避けんがために吹きに来たのだけれども、こうなつてみると茂太郎は、踊っている大尽の家の綺羅を尽した紳士淑女のために、吹いてやりたい心を起しました。とりあえず何を吹いてやろうと、歌口をしめしながら、暫く小首を傾けておりました。

何を吹き出そうかと思案している茂太郎の目の前を、二羽の鳩が飛んで行きます。それを見ると茂太郎は、急に笛を取り直して、ヒューヒョロ口と吹きましました。

その笛の音につれて、不思議なことに、飛んで行くこととした二羽の鳩が、急に翼を翻して櫓の上へ戻つて来ました。

続いて茂太郎が笛を吹くと、どこにいたともない多数の鳩が、土蔵の鉢巻の裏や、屋根の瓦の下や、軒の間から姿を現わして、茂太郎の立っている櫓の上へと集まつて来るのが、いよいよ不思議です。

茂太郎は、足拍子面白く、なお吹きつつけていると、集まった鳩が、左右に飛び惑うて、さながら踊りをおどるが如き形が妙です。そうして或る者は茂太郎の肩につかまって、また離れ、或る者は茂太郎の周囲をめぐりめぐって、戯れ遊ぶものようです。

いよいよ吹いている間に、雀も集まります。鳥もやうて来ます。茂太郎の傍にあつて舞い踊るのは鳩だけであつて、そのほかの鳥は屋根の鬼瓦や、棟の上に集まって、首を揃えてそれを見物するかの如き形が、またすこぶる妙なものであります。

と、また、庭に餌を拾っていた鶏がしきりに羽バタキをしました。高く櫓の上まで飛び上ろうとして、翼の力の足らぬことをもどかしがるように、居たり立ったりしている鶏もおかしいが、ついには例の梯子を一步一步と鶏が上つて来る有様です。見ている間に櫓の上は無数の鳥で一パイになりました。

表を通る人は足をとどめて、この家の屋根の上を見物します。裏の大尽の家の庭でも、広間でも、このことの体を認めないわけにはゆきません。

「茂ちゃん、お前また笛を吹くと人騒がせだよ」
眠っていたと思つた弁信が、下の庭から言葉をかけました。

話が前に戻つて、小金ヶ原から繰出して来た人数を、浅草広小路の、とある茶屋でながめているのが山崎讓と七兵衛とであります。

「えらい景気だな」

「えらい景気でございます、けれども、上方のえいじやないかはこれどころではございませんな」

「左様、あれに比べると、まだこっちの方が穏かだな」
「いったい、近頃は関東よりも、上方の方が人氣が荒くなりました」

「そうかも知れない、といったい、あのえいじやないか騒ぎはどこから起つたものだ」

「どこから起つたか存じませんが、神様のお札が、天から降つて来たのが始まりだそうでございますよ、それで忽ちあんなことになつてしまいました、盆踊りのように、時を定めて踊るんならうございですが、朝であろが、昼であろが、稼業が忙しかろが、忙しかるまいが、踊り出したが最後、氣ちがいのようになつてしまふのですから手がつけれません。私はあれを、伊勢から伊賀越えをする時に見物致しました、男だけならまだしも、女が大変なものですから、女が白昼、裸で踊つて歩くんですから、沙汰の限りでございます。どうも人間てやつは、ああして集まつて人氣が立つと、逆上せあがつて人間が別になつてしまふんですね。江戸へは、あんなものを流行らせたくないものでございます」

「そうだ、流行りものとなると、人氣がまるつきり別になつてしまふんだ。今時の攘夷というやつもそれと同じで、そのことができようとできまいと、それを言わなければ人間でないように心得ている。流行りもの

「というやつは全く厄介物だな」

「上方ばかりじゃございません、先生のお国の常陸の筑波山あたりでも、昔はずいぶんあいつたものが流ったというところでございますね」

「古いことを担ぎ出したものだな、あれは歌垣^{うたがき}といって、やっぱり男女入り乱れて踊るんだ、ずいぶんいかがわしい話もあるが、今の流行^{はや}りものよりは幾分か風流だろう」

「伊勢の国には、またつと入りというのがありましてね、大勢して踊り歩いて、日頃、大事なものを隠して置く家の前へ来ると、つと入りこんで、その大事なものを取り出して見るのですが、大事にしている娘や、お妾さんを見られて弱る者があるそうです」

「武州の府中の六所明神の提灯^{あかり}祭りは、一定の時になると、町という町の燈火^{あかり}を残らず消して、集まったものが入り乱れて踊るのだそうだが、お前、行って見たか」

「ええ、行って見たこともございます」

「人間は踊りたがるように出来てるんだ、それが男だけでは熱が出て来ないんだ、女が出て踊るようになるから熱が出て、逆上^{さか}せあがってしまうのだな」

「そうですね。上方で見ました時に、女が裸で踊る有様といったら、とても見られたものじゃありませんでした。女はあまり人中へ出て踊らない方がようござんすな。もっとも、踊りも優美な品のいい踊りならずいぶん結構でござんすけれど、えいじやないかの踊り

ばかりは感心しません。西洋の国では、エライ身分の人たちまでが夜会^{やかい}ということをして、男と女と夜っぴて踊るんだそうですが、日本の土地にもその真似^{まね}が流行^{はや}ったんでございましょう、世が末になるとロクなことは流行りません」

「誰か裏にいて、煽^{おた}てる奴があるんだよ」

七兵衛と山崎とが、こんな話をしているところへ、人混みの真中に揉^もまれて、馬に乗った天狗の面が現われて来ました。

「あれだ、ああいう木偶^{でく}の坊^{ぼう}を祭り上げて、いい気になって騒いでいる」

二人は馬上の人身御供^{にがにが}を苦々^{くさ}しげに、また笑止千万な面^{かお}をしてながめています。

七

「左様でございますね、何ともおっしゃっておいでにはなりません、多分、本所の相生町の方へおいでになったものと心得ております。実は私もこの間、こちらへ御厄介になりました居^い候^{そうろう}でございまして、まだ、先生の御気象もよく吞込んでいるわけではございませんが、うちの先生は、なかなかちよくなお方でございますまして、あれでまた、なかなか物に憐れみがございます。わたくしと、もう一人の茂太郎というのが居候^{ゐこう}をしているのでございますが、まあ命の親^{おや}と言ってよろしいのでございます。始終、お酒を飲んで冗談

ばかり言っておいになりすけれども、お医者の方はたしかにお上手でございます、癒^{なほ}るものは癒^{なほ}る、癒らないものは癒らないと、ハッキリおっしゃるのが何よりの証拠でございます。人間業で癒^{なほ}るものと、神仏の御力でなければ、どうにもならないものとの区別を先生は、あれでちゃんと心得ておいでになるところがエライものと、わたくしは感心を致しておりますのでございます。本当のことを申しますと、人間というのは、決して病気で命を落すものでございませぬ、みんな寿命でございます、前世の宿^{しゅく}業^{ごう}というものでございす。それでございますから世間に、お医者さんを信用し過ぎるものは、まるきりお医者さんを信用しないものと同じことに、間違っているのでございます。

また、うちの先生は薬礼を十八文ずつときめてお置きになります、これが、ケチのようですけれども、できないことでございます。もともとお医者さんという商売は、そんなにお金の出来る商売ではございませぬ、お医者さんで、一代のうちに百万円ものお金をこしらえたりすると、その子供に良いのが出来ません、お医者さんや坊主というものは、人の命を扱うものでございすから、できるだけ綺麗^{きれい}に致していなければ、人の思いというものがたかるのでございます。こんなことを申し上げると、迷信だなんぞとお笑いになるかも知れませんが、それが本当のところでございます。ただ、うちの先生に惜しいことは、お酒を召上ることでございます、梵^{ぼん}網^{もうきやう}経^{きやう}の中にも飲^{おん}酒^{じゆかい}戒^{かい}第二とございま

して、酒は過失を生ずること無量なり、もし自身の手より酒の器を過^{あや}まして、人に与えて酒を飲^のましめば五百世までも手無^むからん、況^{いは}んや自ら飲^のまんをや、とございます。そのことを先生に申しますと、先生は、べらぼうめ、道庵が酒を飲んでゐるから天下が泰平なんだ、道庵が酒をやめたら天下が乱れるから、それで人助けのために酒を飲んでゐるのだと、こうおっしゃいますから、わたくしも二の矢がつけないのでございす。まあ、もう少しこちらでお待ち下さいまし、わたくしども実は茂太郎と二人で、まだ夕飯もいただかないでお待ち申してゐるところでございます。ナニ、もう御膳^{ごぜん}は出来ておりますのですけれども、先生より先にいただいては済むまいと思ひますから、二人ともにまだ夕飯を食べないでお待ち申してゐるところでございますが、いっお帰りになるかわかりませんから、これから、ちょっと用足しに出かけて参ろうとすると、ころでございす、なにぶんよろしく」

お喋り坊主の弁信は、一息にこれだけのことを喋って、杖をついて道庵の屋敷を出かけました。

本所の相生町の老女の屋敷の中から、琵琶の音が洩れ聞えたのはその夕べのことです。

道を通る人は、わざわざ立ち止まってその音に耳を傾けるものもあります。聞き流して通り過ぎる人もあります。屋敷のうちにいる娘たちも、思いがけなくその音を聞いて、珍しがって耳を傾けました。その琵琶

の音は、正銘の薩摩琵琶の音でありますけれども、聞く人は、何だかわからないと言っている人が多いようです。

外に立って聞いている人の評判を聞くと、はじめは三味線だろうと言いました。やがて三味線ではない、琴だと言いつたものもありました。琴でもないと言消す者もありました。琴の曲弾きをしているのではないかと付け加えるものもあつたけれども、これが琵琶だと断言したものは一人もありません。

「皆さん、御存じでもございましょうが、あれは薩摩の国で流行ります地神盲僧の琵琶のうちの、横琵琶というものでございます。どうして私がそれを知っているかと申しますと、私は平家琵琶を少しばかり心得ているのでございます。御承知の通り琵琶にもいろいろございまして、妙音の琵琶、平家の琵琶、荒神の琵琶、地神盲僧の琵琶……名はいろいろございまして、源は一つでございます」

寄つてたかつて聞いている連中は、思いがけないところから一人の小坊主が飛び出して、問われもしない説明をやり出したのに驚かされました。

お喋り坊主はひきつづき、海の中に漂う海月のように、小路の暗いところで法然頭を振り立てて、「わたくしが琵琶を習いはじめにお師匠さんが、薩摩の琵琶はこうだと弾いて聞かせてくれました、あの国では、おさむらいたちのうちに専ら琵琶が流行しまして、二本差して琵琶を背負つて歩く人が多いそうでござい

ます、それで薩摩の国の琵琶は、おさむらい風の勇ましいものでございます、私共が習いました平家琵琶とは、なかなか趣が異つたものでございます、けれども源はみんな一つでございまして、やはり、薩摩の琵琶も地神盲僧から出たものでございますから、わたくしがこうして耳を傾けて聞いておりますと、なるほどと思い合わせる人が多いのでございます。エ、地神盲僧とは何だとおっしゃるのですか、地神の地の字は、天地の地の字を書くのでございます、神は神様の神という字、盲僧の盲は盲目でございまして、僧は出家の僧でございまして、地神というのは地の神様、盲僧というのは、私共みたような目の見えない坊主のことでございます」

お喋り坊主がこう言つた時に、人々ははじめて、この坊主は盲目であつたのかと思つて、その面を篤とのぞき込みました。のぞかれてもそれと知る由もない弁信法師は、聴衆が静まつていてと見て、なおそのお喋りをつづけました。

「そもそもこの琵琶というものを始めましたのが、天竺の妙音天でございまして。妙音天が琵琶をお始めになつたのでございますが、この妙音天というお方も盲目であつたそうでございます。それでございますから、この妙音天様が地神盲僧の守り本尊になつてゐるのでございまして、私共も琵琶を弾きます時は、その妙音天様を本尊と致します。また一説と致しましては、お釈迦様のお弟子のなかに巖窟尊者という方がござい

ました、この方が、やはり盲目でいらっしやいました、ところ、お釈迦様がかわいそうに思召されて、お前は目が見えないでかわいそうである、その代り心眼を開くがよろしい、心眼を開いて悟りに入れば、なまじい眼の見えるために、五欲の煩惱に迷わされる人たちよりは遙かに幸福であるとお教えになりました、そこで巖窟尊者が一心に修行を致されまして、ついに心の眼を開くようになりましたのでございます。いよいよ尊者が心眼を開きになりました時に、妙音弁才天が十五童子をひきつれて、お釈迦様の御前で、琵琶の妙音曲を巖窟尊者にお授けになりました。その頃、中天竺に阿育大王とおっしゃる王様がございまして、そのお世継が俱奈羅太子と仰せられました、一国の太子とお生れになりましたけれども、何の因果か、このお方がふとお眼をおわずらいになって、私共同様の盲目の身となっておしまいになりました。四海を治め給う御方でも、私共のような漂泊の小坊主でも、眼が見えなくなりましたは世間は闇でございます……」

「おやおや、雨が降って来ましたぜ」

さきほどから怪しかった空がバラバラと雨を落して来たので、集まっていたものがどよめき渡りました。そこで盲目法師のお喋りも一段落になって、濡れるを厭う人たちは、右往左往に馳せ出しました。

「もし、先生、長者町の道庵先生は、まだお屋敷にいらっしやいますか、それともはやお帰りになりました

たか」

弁信の姿が表の門のところに現われて、案内を頼みましたのは、それより後のことでしたけれど、やや暫くというものは返答がありません。返答がありませんでしたけれど、自分の訪れは奥へ届いたものと信じて弁信は、それ以上には念を押さずに待つておりました。果してバタバタと廊下を渡って迎えに来た者があります。

「おお、あなたは弁信さんとおっしゃるお方でしたか、あなたも琵琶をお弾きになるそうですね、ただいま、こちらにも琵琶のお上手な方がおいでになりました、道庵先生もそれをお聞きになっていらっしやいます、ぜひ、あなたもその席へおいで下さるようにと、先生も、皆様も、そう申しとおいでなさいます、さあ、お上りくださいまし」

こう言って、わざわざ奥から弁信を迎えに来たのはお松であります。

「左様でございましたか、実は私もただいま外でお聞き申していたところでございました、それを聞かせていただきますれば、私と致しましたも願ったり叶ったりでございます。そういうことでございますなら、好きな道でございますから、遠慮なしに上らせていただきますでございます」

弁信は杖をさしおいて、はや玄関へのぼってしまいました。

やがて弁信が広間へ案内されて見ると――弁信は

盲目^{めくら}だから見るわけにはゆきません、推量してみると、かなりの広間に、かなりの人が集まって、琵琶を弾いている人は、その広間の真中にいることはわかります。だから自然、聞く人は皆その周囲に端坐したり、柱にもたれたり、障子や唐紙^{からかみ}をうしろにしたりしているといふことがわかります。

弁信が招ぜられたのは、例の道庵先生が控えているその次で、この際先生は謹聴しているのだから、それとも居眠りをしているのだから、ともかく、もつともらしく下を向いて控えていました。

静かに道庵の次へ坐った弁信は、やはり前と同じように歌のない琵琶だけが、老練な人の手によって弾きこなされているのを耳にします。それを聞いていると、弾いている人の年頃もほぼ想像されます。決して若い人ではない、年齢においてもかなりの老練家であり、それで琵琶を弾く人であって、歌わない人だということともわかります。歌えないのではなく、歌う必要のない琵琶を弾くことを心得ているもののようです。弁信はそれをいっそう面白く思つて、いよいよ席を構えて、ほんとうに身を入れて、しんみりと聞こうとした時に、室の中程から立ちのぼる異様な臭氣に打たれました。勘の鋭いように、嗅^{きゆう}覚^{かく}もまた鋭敏であつた弁信は、それほど好きな琵琶の音をさえ打忘れて、その立ちのぼる異様な臭氣に心を取られました。

「おや」

その時に琵琶の主^{ぬし}が代りました。琵琶ばかり弾いて、

あえて歌わなかった一曲はそれで終つて、新たに代つた人が同じところへ坐つて、徐^{おもむろ}に歌い出したのが「木崎原」の一段であります。席はいよいよ静肅なものになりました。

薩摩の島津家にとっては「木崎原」の歌は大切な歌であります。藩主もこの木崎原を聞く時には端坐して、両手を膝の上へ置いて謹んで聞くのだそうです。それですから弾ずる人は無論のこと、ここに集まるすべての人が、みな相当の敬意を表して、いよいよ席が静肅なものになつたのでしよう。

ひとり、道庵先生のみは相も変わらず、謹聴しているのか、居眠りをしているのか、わからない形で、尤もらしく下を向いて控えていることは前と同じです。見ようによつては、下を向いて時々欠伸^{あくび}を噛み殺しているようにも見えるところが、この先生の持つて生れた人柄です。

木崎原の琵琶歌は、島津家先祖の功業をうとうたもので、その初段の歌い出しはこういう文句であります。

「つらつら世間の現象を觀ずるに、積善の家には余慶あり、積悪の家には余殃^{よお}あり、尤^{もつと}も慎むべきは此道也、ここに薩隅日三州の太守、島津修理^{しゆり}太夫義久と申し奉るは、うやうやしくも清和天皇の御苗裔^{ごびようえい}、鎌倉右大将征夷大將軍源頼朝公の御子、左衛門尉忠久公より十六代目の御嫡孫也、文武二道の名將にて、上を敬ひ下を撫で、仁義正しくましますば、靡^{なび}かん草木はなかりけり、御舍弟^{ひようごのかみ}には兵庫頭忠平公、左

衛門尉歳久公、中務大輔家久公とて、何れも文武の名将なり、其の外、家の子郎等に至るまで、皆忠勤を励ませば、古今稀なる御果報、近国他国の者までも、羨まざらんはなかりけり……」

こんなふうには、薩摩の国主の讚美歌になっているのだから、苟くも薩摩に縁のあるものがこの歌を聞く時、多くの敬意を表さなければならぬのは当然であります。

こうして一座が水を打ったようになり、歌う人の意気が、いよいよ昂つて、

「彼の島津殿と申すは、かたじけなくも清和天皇の御末、多田満仲よりこのかた、弓箭の家に誉を取り、政道を賢くし給へば……」

という大干にかかった時に、最初から鼻をひこつかせていた盲法師の弁信が、いよいよ法然頭を前後左右に振り立てて、さながら見えぬ眼に、何かを探そうとするらしき振舞のみが甚だ目ざわりです。

この弁信もまた、自ら名乗るところの如く、上手か下手かは知らないが、かりそめにもその道に心得のあるものだから、礼儀から言っても、趣味から言っても、もっと温和しくしていなければならぬはずのが、ついに堪り兼ねると見えて、

「あ、もし、皆様、せっかくの弾曲の間を大変に失礼でございますけれども、皆様に申し上げなければならぬことが出来ました」

琵琶歌の半ばに、席の隅っこにいた見慣れぬ小坊主

が叫び出したから、

「叱ッ」

叱りつけた者がありましたけれど、弁信はそれをも入れないで、

「もし、皆様、火薬の臭いが致しまする、このお部屋の中に烟硝の臭いが致しまする」

言いも終らぬ時に、轟然たる響きと共にこの一室が、裂けて飛んだかと思われる家鳴震動です。

静粛な弾曲の半ばに思い設けぬこの出来事は、一座のすべてを驚かさぬわけにはゆきません。少なくとも三十余人は集まっていた勇士豪傑の驚きぶりが、またそれぞれ個性を発揮しているところが面白いと言えば面白いものです。或る者は二三間飛び退いて太刀を抜かんと構えました。或る者は下へつくばるようにして、身を沈めながら敵の呼吸を見るような形であります。或る者はまた、列座のうちの少年をかこうて、身を以て降りかかる災難に当ろうとするもあります。

けれども、誰ひとり、この思い設けぬ出来事の原因を知ったものではありません。謀叛人がこの屋敷へきりこんだというわけでもなく、また謀叛が発覚して御用の手が混み入ったというわけでもなく、ただ一発の弾丸が——それも無論、大砲の丸ではなく小銃の弾丸が、つまり火鉢にかけた薬罐の下から爆発して、この場の空気をかくの如く破りました。

さりとて人命には露ほどの怪我はなく、犠牲になつたものと言えは火鉢の薬罐があるのみです。けれども

たとえ、小銃の弾丸一発といえども、在るべからざるところに在り、発すべからざるところに発したのは、どうしても由々しき出来事といわねばならぬ。

この出来事のために、集まっている人々の日頃の嗜^{たしな}みというものが、露骨に現わされたことは、一種の試験といえば試験のようなものです。前に言ったような余裕を見せたのは、さすがに見苦しくもありませんでした、中には正銘に狼狽^{ろうばい}して四つん這^ばいの形になった者もないではありません。殊に道庵先生の如きは、たしかにそれまで居眠りをしていたものと見えて、その響きが起るや否や脆^{もろ}くもひっくり返り、それも一つで済むのを、三ツ四ツ一度に宙返りをして、廊下の隅へころがり出して腰を抜かした形などは醜態です。最初に警告を与えた弁信法師は、爆発起ると見るや衣の袖に頭を包んで、その場に突伏してしまいました。

見上げたのは、木崎原の一曲を弾じている琵琶の老手で、この不時の出来事のために、撥^{ばち}の捌^{さば}きが少しも狂わず、歌いかけた歌の詞^{ことば}に滞りがあるでもありません。大風の吹き去ったあとの枯野に端坐している心持で、従容^{しやうよう}としてその一曲を弾じつづけている形は、見事というべきものです。

そこで、一座の連中は忽^{たちま}ち、以前の通りに席に戻って、身にふりかかる灰神楽を払おうともせずに、再び座を正して、相変らず弾じつづけている木崎原の一曲に耳を傾けはじめました。

それですから爆発も、その爆発から起った狼狽も、

ほんの瞬時の光景で、席は以前と同じことの静粛なものに返り、琵琶の弾者は一層の勇気を以て、首尾よく木崎原の初段を語り済みました。

その曲が終った後に一同が初めて、ホッと息をついて、さて、いま起った不意の椿事の原因いかにと眼を光らした時に、犠牲となった薬罐をつるし上げて、莞爾^{かんじ}として火鉢の灰を搔きならしているのが益満です。

一座の者の荒胆^{あらだん}を挫^{ひし}いで興がるために、火鉢の中へ弾丸をうずめておいたものがある。それが匆^はね出した時に、一座の狼狽^{ろうばい}ぶりを見て笑ってやろうという悪戯^{いたずら}者があつたのだと思いました。して、その悪戯者は誰であろう、多分、薬罐をつるしてほほ笑んでいる益満の仕業ではなかうかと思いました。

その場合は、これだけの悪戯^{いたずら}で済んだけれども、その翌日あたりから、この種類の悪戯を江戸の真中に向って試みて、市中の狼狽^{ろうばい}ぶりを見物しようという評議が、この物騒な屋敷の中で行われるようになってと穏かではありません。

穏かでないのはこの屋敷に限ったことはありません。この頃、一体の世間がそうであります。いつも暢^{のんき}気であるべきはずの長者町の道庵先生の屋敷までが、この穏かならぬ雲行きに襲われているというのは嘘のような真実^{まこと}であります。先生は相変らずだが、その子分たちが枕を高くして寝られないことがたつた一つあります。それはほかでもない、洋行に出かけた鰐^{ぼら}八大^{はちだいじん}尽

がいつ帰って来ないものともわかりません。帰って来れば必ず、これ見よがしのお祝いが、この隣りの御殿で行われるにきまっています。その際において、指を啣くわえて見物していなければならぬことの残念さを思うと、自分の者が躍起になるのも無理はありません。そこで、今のうちから、それに対抗する方針を考えておかなければならないと、道庵の子分たちが、夜の目も寝ずに苦心していることの体ぐは、よその見る目も哀れであります。

八

染井の化物屋敷はまた化物屋敷で、神尾主膳はあの時の井戸釣瓶いどづるべの怪我からまだ枕が上らないで、横になりながら焦じれきっています。眉間みけんにつけられた牡丹餅ぼたんもち大の傷は癒着ゆちやくしたけれども、その見苦しい痕跡こんせきばかりは、拭ぬつても、削けつても取れません。

そうして時々思い出しては齒噛は噛みをして、

「あいつ、お喋り坊主はどこへ失せおったかなあ」

取とつかまえて八つ裂きにしてやりたいほどの口惜くやしがり方です。弁信の方にこそ怨みはあれ、神尾のこのていたらくは言わば自業自得に過ぎないのに、その逆さ怨みが、因縁いんねんずくと思われるほどに骨身に食い入っていて、明暮あけくれ、弁信を憎み憤いっていたが、さてその後、弁信は再び彼の土蔵へは帰って来ませんでした。弁信が帰らないのみならず、それと一緒に出た竜之助も、

あれからまた再び戻っては来ません。お銀様は、土蔵の中に引籠ひきこもって、針で血を刺してはお経を写すことを、以前のようには繰返しているらしい。

或る夜、神尾主膳は囁言ささやのように、枕許にいた福村を呼んでこう言いました、

「福村、このごろ、毎夜のように、この屋敷へ狸が入り込むな」

「狸？ そんなことはござるまい」

「夜中に眼が醒さめると、狸の足音がする、耳を澄まして聞いていると、離れの方へ忍んで行くようだ、おれは、二晩までその足音を聞いた、この調子だと今夜あたりもやって来るぜ、取とつかまえてやろうと思うが、足音だけが聞えて、身体が利きかぬ」

「それは穩かでない、いったい、狸の足音というのを、どうして大將は聞き分けた、狸なら狸のように、もし人間であつたら人間のように、ずいぶん打捨うつちやっちゃおけねえ」

と言って福村は、今更のように離れの方を見ました。離れには例のお絹がいます。

福村は気をつけていたけれども、その晩は狸の足音は聞えない代りに、遠からぬところで狸たぬき囃子ばやしの音が起るのを聞きました。

その翌日の晩もまた、お囃子の音が賑やかに宵のうちから響き出しました。この屋敷の界限かいがいでも、例の踊りが流行はり出したものです。

「うるさい百姓共だ、誰か行ってあれをさしとめて来

い」

神尾主膳は病床のうちで、そのお囃子を焦^じれたが
ったけれども、ほかの連中はかえってそのお囃子で浮
き立ちました。

踊りの同勢がこの化物屋敷の前へ来て、そこでまた
盛んに踊り出している時に、

「喧^{やかま}しいやい」

神尾だけが焦れているけれども、そのほかの連中は
面白^{おもしろ}がつて出て見ます。

離れにいたお絹もまた、じっとしてはいられません。
女中を連れて垣根からしきりに踊りを見物していた
が、つい面白さに釣り込まれて、門の前へ出てしま
いました。

「このお屋敷の中には、たしか八幡^{やわた}のお稻荷様があり
ましたぜ、お稻荷様の前で踊らせてもらいましょう」
「そういうことに願いましょう」

同勢は踊りの威勢で、化物屋敷の中へ混み入ってし
まいました。もとより形の如き荒れ屋敷ですから、門
と垣根の締りも嚴重というわけにはゆきません。屋敷
の中へ混み入った同勢は、庭の方へと踊って行き、
提^{ちようちん}灯をブラ下げて、えいや、えいや、と踊りはじめ
ました。

迷惑^{めいわく}がった連中も、実はそれが面白いので、大いに
おだてて踊らせたいくらいであるが、神尾主膳はその
物騒^{ものさわ}がしさを聞くと赫^{かっ}と逆上しました。

「誰にことわってこの屋敷へ入った、追い返せ」

ひとりで喚^{わめ}いているけれども、誰も相手にする者が
ありません。

繰^{くり}込んできた同勢は手を取り組んで、ここの木蔭や、
かしこの築山^{つきやま}の蔭で散々に踊ります。はじめのうちは
頬冠^{ほおかぶ}りをしている者も多かったが、いつか知らずそれ
も脱^ぬけて落ちて、果ては自分の帯の解^ぬけて落ちたのを
知らないで、踊り狂う女もありました。

「お屋敷のお方も踊りなさい、皆さん一緒に踊りまし
よう」

踊りの同勢は見物のすべてを踊りに巻き込まずには
おきません。それを巻き込んで行くから、おのずと同
勢が殖えてゆくのです。

「どうも御苦労さまでした、また明晩も来て踊って下
さい、待っていますから」

夜明け近くになって、踊りがいよいよハネようとし
た時に、お絹の挨拶がこうです。だから、いやでもそ
の翌晩、この踊りの同勢が繰込まないという限りはあ
りません。

果して翌晩、また同勢が押寄せて来たには押寄せて
来たが、驚かされたことには、その多数の人が悉^{ことごと}く、
紙製の狐の面をかぶって来たことです。

「これから王子の衣裳^{いしやうえのぎ}榎^えへ行って踊ります、皆さん、
後からいらっしやい」

こう言^いって狐の面をかぶった者共が、この化物屋敷
の前で、あっさり踊ると、今晩は屋敷の中へは入らな
いで行ってしまいます。多分これから王子の稻荷の衣

裳褻とやらへ行つて散々さんざんに踊るのでしよう。

その翌日になってみると大きな評判が立ちました。王子の稲荷の衣裳褻の下へ、関八州の狐が悉く集まるという噂であります。それで十里四方から狐火が炬火たいまつのように続くという噂であります。それを見物せんがために、江戸の市中をはじめ近在から集まる人が雲の如しという噂であります。ついには人と狐が一緒になつて踊り出し、人が狐だか、狐が人だかわからないで踊り出すという噂がいつぱいに拡がりました。

これによつて見ると、今年はたしかに豊年である。こうして衣裳褻へ多数の狐が集まるのは、それぞれの狐がみな官位を欲しがるからで、それと人間と一緒になつて踊るのは、人間も狐も共に有卦うけに入ったのだという縁喜のよい解釈であります。今夜はまた昨晚よりは一層盛んで、これから毎夜の如く、人と狐の踊りがあるだろうという評判です。

化物屋敷の離れにいたお絹はその評判を聞くと、昨晩貰い受けた狐の面を取り上げて、女中を相手にその話をしていたが、今晚は王子の稲荷まで出かけてみようとの相談です。

お絹が王子稲荷の踊りへ出かけるという話を聞くと、べつだん誘いをかけたわけでもないが、化物屋敷に居合わせた御家人崩れの連中が、我も我もとお伴ともを志願することになった。ここから繰り出しただけでも十人余りです。

してみると、屋敷に残されたのは、神尾主膳ひとり

であります。彼等は主膳に酒を飲ませておいて——ではない、主膳が昨晚から酒浸りさけびたになつて、今は熟睡しているのをよいことにして、体のいい置いてけぼりを食わせて、みんな出払つてしまいました。こうなると、これらの連中はかなり薄情なものであります。

眼が醒めて神尾主膳は、しきりに水を呼びました。けれども、水を持つて来るものではありません。返事をする者もありません。

神尾は病床でしきりに怒鳴りました。いくら怒鳴つても、今宵に限つてこの化物屋敷には人間一人いないのですから、神尾の怒鳴りも空雷くうらいに過ぎないのです。酒を多く飲めば酒乱の萌もしがあり、今も飲んだ酒が醒めたというわけではないのですから、主膳は赫かつと怒り、一時に逆上さかせあがりました。病床からよろよろと這はい出して、あぶない足を踏みしめると、長押ながしにかけた槍を取卸しました。逆上すると槍を取るのが神尾の癖であります。

「騒々しいわい、者共、何が面白くつて踊るのだ」

槍をしごいて縁側から庭へ飛んで下りました。けれども、今宵こよひに限つて誰もお危あばいのございますと言つて止める者はありません。荒れ出した神尾主膳は、この手槍で真一文字に庭の石燈籠へ突っかけて行きました。それが真面まおもに石燈籠へ当たったら、槍の穂先もポツキリと折れるのでしようが、燈籠の屋根の上を掠かすめて流れたから、そのハズミで主膳は石燈籠へブツつかつて、挫くたと後ろへ倒れました。

神尾主膳は、起き上って手近な植木を滅茶滅茶に突き立てます。主膳の眼には石燈籠も立木もみんな人間に見えて、当るを幸い、それを突き伏せていることに、少なからず痛快を貪^{むさぼ}っているようなあんばいです。

幸か不幸か、いくら荒れ狂っても相手が石燈籠であり、植木であるから、手答えはあっても手向いはありません。それに、一家を挙げての留守と来ているから、荒れたい放題に荒れたところで、それを取押えようとする者がないから、神尾主膳は思うままにその酒乱と逆上とを発揮することができました。さりとて、先方が全然無抵抗であるとはいえ、もと、人間の暴力には限りがあるものであります。放っておけばおのずから疲れて、暴力そのものが無抵抗の中へ沈没してしまうにきまっております。神尾はついに綿の如く疲労してしまいました。それでも、水が飲みたくなると共に、井戸までのたつて行くの本能だけは残っております。例の井戸のところまでのたりついて行って、無暗に水を汲み上げて、釣瓶^{つるべ}に口をつけてガブガブと飲んでいたが、いい加減飲むと共に、その残った水を頭からザブリと被^{かぶ}り、

「ああ、いい心持だ」

つづいて釣瓶を繰り卸して汲み上げると共に、水をまた頭からザブリと被^{かぶ}って、

「なんといういい心持なことだ」

釣瓶を卸して二杯三杯汲み上げては、それを頭から被^{かぶ}り、頭から被^{かぶ}っては、また汲み上げるのが、やはり

正気の沙汰ではありません。五杯も十杯も十五杯も汲んでは被^{かぶ}り、被^{かぶ}っては汲み、その度毎に、車井戸の車がけたたましい音を立てて火の発するほどに軋^{きし}ります。程遠からぬ庭の土蔵の二階には、この車井戸の音が嫌いなお銀様が、もしいるならば、今頃もたしかに、血を刺して、お経を書いていなければならないはずです。

その水を汲むたびに井戸をのぞき込むと、神尾主膳は血管が裂けるほどに憤^{おこ}り出して、

「お喋り坊主、出て来い」

と怒号します。主膳の眼には、たしかにこの井戸の底にお喋り坊主がいて、減らず口を叩いて自分を、おひやかしてもするものと見えているらしい。

「お喋り坊主、貴様の言い草が、いまだに耳に残って不愉快千万でたまらぬわい、おそろく一生のうちに、貴様ほど不愉快な奴はなからう、貴様のことを思い出すと、骨から肉が浮び出すほど忌^{いや}になるわい、つべこべと尋ねられもしないお喋りを、井戸へ投げ込まれてまで喋りつづけている声が、地獄の底から迷^{まよ}うて来たもののように耳に残っている、思い出しても癪^{かん}にさわってたまらぬ、貴様を引き出して、骨も身も一度に擦りつぶしてくれぬ上は、この癪^{かん}が納まらぬわい」

神尾主膳はこう言って地団駄を踏みながら、しきりに水を汲み上げては被^{かぶ}ります。その度毎に、弁信に対する恨みは骨髓に徹するもののように、身を戦^{たたな}かせるのであります。

果してお銀様はその時、たった一人で土蔵の中でお経を写しておりました。針で自分の肉体を刺して、その血で丹念に一字一字の法華経を写して「我此土安穩、天人常充滿」というところに至った時に、車井戸がキリキリと鳴り出したから、お銀様はゾツと身ぶるいをして筆を下へ置きます。

「お喋り坊主」

神尾の世にも口惜しそうな声が、そのいやな深夜の車井戸の響きと共に、お銀様の耳朶に触れると共に、お銀様の眼前に現われたのは、そのお喋り坊主の弁信の姿ではなく、甲州でむごたらしい虐殺に遇って、訴うるところなき恨みを呑んで横死を遂げた愛人の幸内が姿であります。

「お嬢様、あなたは幸内がかわいそうだと思召しになりませんか、もし幸内がかわいそうだと思召すなら、なぜ、あなたは神尾主膳を殺して下さらない、神尾を討って幸内の仇を酬いて下さらないのがお恨みでございませう、俱に天を戴かずと申しますのに、私をなぶり殺しにした神尾主膳と、そうして同じ屋敷に住んでいいのですか、それでこの世に残した幸内の恨みが消えると思召しますか、今も神尾主膳は、ああして私を苦しめています、あの車井戸の音がキリキリと軋るたびに、私の骨と肉がそれだけ擦り減らされて参りますのです、死んだ後までも、私がかわいそうだと思召すなら、どうか、あの車井戸の音だけでも差止めて下さい、ああ、苦しい、私は神尾主膳のために、鉄の

熊手で骨と肉とを掻きむしられながら、地獄の底へ落ちて行くのでございます」

お銀様の耳には、車井戸の音も、神尾の怒号も、一つになって幸内が恨みとなって響いて来るのです。

「わたしは、あの車井戸の音がいやだ、夜更けにあの音を聞くのはいやだ」

お銀様は目を閉じて幸内の面影を見まいとし、耳をふさいで車井戸の音を聞くまいとしました。けれども車井戸は一倍けたたましく軋り、神尾の怒号は、耳をふさいでいるお銀様の両手をもぎ離すほどに烈しく鳴りはためいて、

「寝ても醒めても、貴様のお喋りが癪にさわってたまらない、井戸の中から出て来い、それとも土蔵の中に隠れているのか、土蔵の中に隠れているならば、土蔵の戸を打破って、この槍で突き殺してくれよう」

散々に井戸へ当り散らした神尾主膳は、投げ捨てた槍を拾い取って、この土蔵をめがけて突進して来ました。

神尾主膳は土蔵の引戸を手荒く引っぱったけれども、それは内から錠が卸してあつて、引いても押しても容易にあくものではありません。

そのたびに激昂する主膳は、ドシンドシンと戸前にぶつつかりはじめます。果ては槍の石突で戸の隙をコジにかかります。けれども尋常の雨戸と違って、いったん、内から錠を卸した以上は、兇暴な力を以てしても外から打ちこわすわけにはゆきません。

自分の力いっぱい暴力を利用したけれども、ビクともしないので神尾は、いよいよ激昂しているが、その激昂はいたずらごとで、この時分にはお銀様も、神尾の無駄骨折りを冷笑するくらいに余裕を持っておりました。破れるものなら破ってごらん、という驕れる態度を以て、お銀様は戸前で狂っている神尾主膳を笑止がっていました。

さりとて、お銀様のこの驕慢心が永く続くものではありません。常識を失っているとはいえ、兇暴の時には兇暴の知恵が働くものであります。

「坊主、お喋り坊主、中で押えてるな、小癪な奴だ、しっかりと押えてあかないようにしているな、よし覚えていろ、今、あくようにしてあけて見せるからな」

神尾主膳はこう言って、暫く暴力を中止しましたから、中でお銀様は、それ見ろと言わぬばかりの心持です。それは力の尽きた神尾主膳が、負惜みから言った捨て台詞すてざいふと思ったからです。この捨て台詞で引上げて、母屋へ帰って寝込んでしまうのが落ちだろうと思ったからです。

果せる哉かな、それから後は扉へ突当る音もしなければ、押したり引いたりしてみることもなく、槍を隙間へ突込んでコジあげようとするような無茶な物音も聞えませんが。しかし、左様な物音が聞えないからといって、それは決して神尾主膳がこの場を去って、母屋へ引揚げたわけではありません。神尾主膳は今もなお土蔵の周囲をうろうろしながら、よろめく足を踏み締めては酔

眼を睜みって、槍は片手に、そこらあたりから頻りに物を掻き集めています。その掻き集めている物というのは、荒れた庭内に落ちている杉の枯葉だの、木の枝だの、竹の折れだのという物を、手に任せて掻き集めているのであります。危なっかしい手つきで、それを掻き集めては例の土蔵の戸前へ持って来て、無暗に積むものだから、忽ち小山のように盛り上げてしまいました。

「占めた！」

最後に神尾主膳が、槍を投げ出して両手で抱え込んだのは一束の薪です。その土蔵の廂ひさしに高く積み上げてあった薪の束を発見したからのことで、それを発見すると神尾は占めたとばかり、槍を投げ出して、一束ずつ抱え出して、前に積み上げた枯葉や、木の枝の上へ、左右から立てかけたものです。

時分はよしと見た頃合に、主膳は、やはり本性たがわず、投げ出しておいだ槍を手さぐりに拾い取って、「坊主、覚えていろ、今、あくようにしてあけて見せるから後悔するな」

こう言って、今度は、たしかにこの土蔵の前を立去って、母屋の方へ行く足音がします。

お銀様は神尾の挙動がわからないから、この時も負惜みの捨て台詞すてざいふだろうと思って、やはり七分の冷笑気味でおりましたが、暫くして、また足音が聞え出したので、オヤと思いました。さても執念深い、力が尽きて、テレ隠しの捨て台詞で、母屋へ逃げ帰って寝込んだもの

だろうと思つていたところが、たしかにまた、やつて来た。

「さあ、どうだ、お喋り坊主、この蠟燭で焼き殺してくるぞ」

その声を聞いたお銀様がたちあがらないわけにはゆきません。事実神尾主膳は、母屋へ行つて蠟燭へ火をつけて来ました。さいぜんのガサガサは、実にこの土蔵の戸前を焼こうとする材料を集めていたのだと氣のついた時には、決して好い心持はしません。

神尾主膳はたしか、提灯へ入れて持つて来た蠟燭を裸にして、それを積み上げた枯葉と木の枝と薪の中へ突込んで、火をつけはじめたものです。それと覺つたお銀様がじつとしておられないのはその道理です。

主膳のやりそうなことであると思ひました。酒に乱れて惨忍性を發揮せられた時の神尾は、たしかにそのくらいのことはやり兼ねません。また、そういう場合に限つて、惨忍性を煽るには都合のよい知恵だけが働くように出来た神尾の性格を知っているだけに、お銀様の怖れが一層深くないということはありません。

この土蔵は一方口である。前に火をつけられると後ろへ逃げることができない。横にも縦にも、蹴破つて走るといふわけにもゆかない。二階に窓があるにはあるけれども、それは筋鉄が入つて鉄の網が張つてある。

逃げるのならば今のうちである。火の手のまだ揚らない先に内から戸を押開いて、そこを突破するよりほかは手段も方法も無いことです。聡明なお銀様がそこに

氣のつかないはずはありません。同時にまた走り出せば当然、神尾の網にひっかかゝることを覺悟しなければならぬのを知らないはずはありません。神尾の憎んでいるのは盲法師の弁信にあるらしいけれど、さりとてこうなつた時には、獲物の見さかいがあるべしとは思われぬ。土蔵の戸前を突破し得た時は、神尾の槍先が待つてゐる。最後までここに踏みとどまつて焼死ぬか、それとも一刻を争うて突破を試むるか。お銀様は手早く身づくろいしました。同時に神尾の声高く笑うのが聞えます。

「アハハハハ、火水の苦しみとはこれだ、水の中へ投げ込まれて往生のしきれぬ奴が、火の中で焼け死ぬのだ、お喋り坊主、これでも出て来ないか」

パチパチと火の燃える音が聞えます。プスプスと枯葉のいぶる音も聞えます。土蔵の戸前は非常に厚味のある板を二重に張つて、中には筋鉄が入つて、上の部分がやつと日の目の透るほどの格子になつてゐるから、そう容易く焼け抜けるとも思われぬが、相手は火であるから、相当の時間と力が加われれば何物をも燃やしてしまひます。それが燃える時分には、土蔵の中は煙でいっぱいになつて、火で焼け死ぬ前に、人は煙のために窒息してしまわねばならないことは明らかです。

身仕度したお銀様は、この際に何を持って出ようとの分別はありませんでした。手に触れた一本の脇差を持つて、土蔵の二階の梯子段を転がるように走せ下り

ました。

「お喋り坊主、何か文句があるならここで一番、喋ってみろ、久しく乾いているから、メラメラと赤い舌を出して小気味よく燃える、井戸の底へ投げ込まれて往生をしそこなうのと、火の中で苦しがるのとどちらがよい、貴様のために、この面体に生れもつかぬ大傷が出来た、それが憎いからこうしてくれるのだ、よく焼かれて往生しろ」

神尾主膳は濡れみづくになった身体で、燃えさかる火を望んでは喜び狂い、手に持った槍の石突を火の中へ突込んで薪を浮かせて、火勢を煽ろうとしています。

頭から搔卷を被ったお銀様が、内から戸を押開いて、脱兎の勢いで、その燃えさかる火の中へ飛び出したのはこの時であります。

「熱、熱、熱」

お銀様は火を踏んで、搔卷もろともにその中を転がり出しました。

「熱、熱、熱」

同じように叫んで火の外に転がったのは、神尾主膳であります。

「熱、熱、熱、出たな坊主、熱」

お銀様も転がる、主膳も転がって起き上れない。勢いのようやく加わった火は炎々と燃え上ります。

頭から搔卷を被ったお銀様が、俵を転がしたように火の中を転がり出ると、それに驚いた神尾主膳が、同

じように槍を持ったまま転がりました。

「出たな坊主」

それでも神尾の転がったのは、それと見定めてから転がったものらしく、転がっても槍は手放さないで、二三度もがいてから起き直った時に、その槍をとりのべて、眼前に転がり出した搔卷の俵を伸突きに突きました。

ところが慌てているから、槍の石突で突いてしまっているから、また槍を取り直す時にお銀様は、ようやく搔卷の中から脱け出すと、その鼻先に神尾の槍の穂の稲妻です。危うくその槍の穂先を避けましたけれども、神尾の足許も手先も狂いきって、繰りのべる槍も、手許へ引く槍も、すこぶる怪しいものとは言いながら、たしかにめざすものを見かけて突く槍です。ことに相当に鍛錬を積んでいる槍ですから、一つ逃れてまた一つです。それを逃れると、ひよろひよろしながらも、よろよろしながらも、ほとんど透間もなく、やっと搔卷から抜け出したばかりのお銀様の腰を立て直す隙もあらせず、神尾が突っかけて来る槍は凄じばかりです。

「誰か来て下さい」

さすがにお銀様は女ですから、こうなってみると我知らず叫びを立てました。

この叫びはかえって神尾にとっては、よい目標を与えたようなもので、得たりと畳みかけて突っかけるのを、幸いに梅の木があったから、それを廻り込んでお

銀様は、またしても暫しの息をつきました。

その梅の木の前から諸突もろつきにしてみたけれども、それが外れたと見え、神尾は左からねらうて突きました。それも手答えがなかったために、右から覗のぞつて突いたけれども、お銀様の身には当りません。こうなると神尾は再び激昂を始めました。

お銀様と神尾とは、槎さ枒がたる梅の太木を七たび廻つて、追いつ追われつしています。

「誰か来て下さい」

ふたたびお銀様が叫びを立てた時分には、神尾とても、これが目的のお喋り坊主ではなく、日頃苦手にがてのお銀様であつたことに気がついたのでしょう。しかしながら、今となつてはかえつてそれが面白そうです。当の敵は變つても、苦しむことに變りはない。苦しめて興の多いことにも變りはないのだから、神尾は一層の惨忍なる好奇を振り起して、お銀様に槍を突掛け突掛けて、更に萎ひるむ色がありません。

梅の木の周囲をグルグル廻つて必死に逃げているけれど、前に言う通り狂つているとは言い条、神尾の槍は相当の覚えのある槍であつて、それに油を差した兇暴性が加わっているのだから、槍の筋は存外狂わず、その精力も容易には衰えません。お銀様は命からがら逃げ廻っているうちに、帯がほどけました。ほどけた帯を踏んで危うく倒れようとして帯に手をやった時、覚えずその手に触れたのが、土蔵の二階から駆け下りる時に手に触れた脇差であります。お銀様は帯をかい

こむと一緒に、その脇差を抜き放ちました。片手では帯をからみながら、片手でその脇差を構えたのは多分、神尾の槍をあしらうつもりでありましょう。

こうして見るとお銀様には、どうも多少、武術の心得があるようです。女軽業の親方のお角ほどの女が、お銀様を怖れるのは、一つはお銀様の傍には大抵の時には脇差がひきつけてあつて、話の調子によつては、いつそれが鞘走さやばしるか知れないような心持がすると話したことがあります。神尾主膳もその後、お銀様に対してはうっかり冗談もいえないと言つたのは、たしかにその用心があるらしいからです。

女だてらに脇差を抜いて、一方に槍を防ぎながらお銀様は、ようやく梅の木を離れて榎かじの木の後ろへ避けることができました。覚束おぼつかないうちに本性がいよいよ冴さえて、神尾主膳は透すかさずそれを追いかけました。

榎の木を移つてお銀様が、石燈籠いしどうろうの蔭へ避けた時に、神尾主膳はさながら絵に見る悪鬼の形相ぎやうそうです。いかなるところへ逃げ隠れようとも、この怨敵おんてきを突き伏せずしては置かずという意気込みで、燈籠の屋根の上や、台石の横から無二無三に突き立てました。

形ばかりに脇差を構えたお銀様は、それを振りふり閃ひらめかしては槍の穂先を逃れようとする。槍はしばしば流れ、手元はしばしば狂うけれども、その狂暴はいよいよ衰えることあるべしとも覚えません。ついに石燈籠もろともに、お銀様を縫いつけるのかと思われるばかりです。

お銀様は石燈籠の蔭から追いつめられたのが池の端です。池の汀^{みぎわ}を伝って逃げると巖石がある。後ろへすされば一步にして水です。進退谷^{きわ}まったお銀様は、ついに脇差を振り上げて、勢い込んで追いかけて来た神尾主膳の面^{かお}をのぞんで、その脇差を投げつけました。その規^{あらう}いは過^{あやま}たず、神尾の面上へ飛んで来たから、狂乱の神尾も落ちかかる刃を払わずにはおられません。それを槍の柄で払おうとして、あぶない足許が一层あぶなくなつて、ついに堪らず挫^{どろ}と尻餅をついたのが、お銀様にとっては命の親でありました。

この僅かの間を利用してお銀様は、池の端^{はた}を通つて、橋を飛び越えて、一息に本邸の縁側へ飛び上つて、障子を蹴開いて奥へ逃げ込みました。

つづいて起き上つた神尾主膳は、同じように池を飛び越えて縁の上へはね上つたが、ここではお銀様が広い母屋のいずれの部屋へ逃げ込んで、いずれの方角から抜け出したかということは更にわかりません。

主膳がただ何事かを、しきりに怒号して間毎間毎を荒し廻っている音声が、外で聞くとものすごいばかりです。いつまでたつても例の槍ははなさず、間毎間毎を荒し廻りながら、襖^{ふすま}といわず天井といわず、その槍の石突と穂先との両方でブスブスと突き立てたものです。

幸か不幸か、日頃は少なくとも十人以上も、ごろごろしているはずのこの屋敷に、この晩に限つて一人もおられません。今頃、彼等は王子稻荷の衣裳^{いしやうえのぎ}褌とやらで

狐の面をかぶつて、夢中になつて化かしつ化かされて、しているところでしょう。

こうして間毎間毎を存分に荒し廻つた神尾主膳は、やや暫くあつて、再び縁側から池のほとりへ身を現わしました。その吐く息は大風のように、身体の疲れきっているのは綿のようであらうとも、さいぜんからの主膳を物狂わしく働かせているのは、たしかに別に天魔^{てんま}波旬^{はじゆん}の力が加わっているのだから、絶え入らないところが不思議です。

再び池のほとりへ立つていた主膳は、やはり槍は持つていたけれども、獲物^{えもの}はありません。お銀様はついにいずれの方角へ取逃がしてしまいました。

残念で、無念で、腹が立つて、業が煮えてたまらない神尾主膳は、火のように燃える眼を瞋^{いか}らして四方をながめる。その池の中がまた火のように燃えているのを認めました。池が燃えているのではない、この時分に、さいぜん焼き残しておいた土蔵の戸前の火が本物になつて、炎々と燃え上り、その炎の色が、この池の水を真赤に染めているのです。

それと気がついて主膳が土蔵の方を見やると、植込の間から猛烈なその火勢がうずまきのぼる。火は土蔵の中へ侵入すると共に、その附近の木小屋へ燃えうつたものらしい。いよいよ本物の火事です。

その火炎の勢いを見て神尾がはじめて、やや溜^{りゅう}飲^{いん}を下げました。

暫くして手製の大炬火^{おおたいまつ}を持った神尾主膳は、土蔵に

燃えている火を持って来て、本宅の戸と、障子と、襖ふすまと、唐紙からかみへうつしはじめました。

そこで土蔵と本宅とが相呼応して燃え上ります。いかに燃え出しても、この家にはそれを消そうとするものがあります。附近の人々も大方は狐の踊りに出かけているところであります。ようやく人が騒ぎ出して火消が駆けつけた時分には、土蔵も、本宅も、大半は焼けて手のつけようがありません。暁方あけがた近くなつて、お絹をはじめ踊りに出た連中が帰って見た時分には、土蔵も、本宅も、物置もの置きの類たぐいも、すっかり焼け落ちていました。

九

王子稻荷の衣裳いしやうえのぎ榎えから、狐の踊りが流行り出したということに刺戟されて、上州の茂林寺もりりんじから狸の踊りを繰出して、その向うを張ろうというのはばかばかしい凝り方こりかたです。

人間はそれぞれ負けない根性に支配されて、負けない根性のために、滑稽なる競争と、無用の濫費がつづけられてゆくのが人間の歴史の大部分です。

茂林寺の狸踊りは、土地の若い者から始まったということだが、おそらくそうではあるまい。江戸のものを上州名物の名で、江戸へ繰込ませようという寸法であるとは受取れる。これは茂林寺名物の分福茶釜ぶんぷくちやがまを

かたどったもので、それに毛が生えて、絵本通りの狸に化けたところを、大きな張物にこしらえて、それを真中に昇あがぎ上げて、日ならず江戸の市中へ乗込もうというのは、まだ噂うわさだけであつて事実に見われたわけではないが、その噂は早くもこちらに響いて喧かまびすしいものです。

王子から狐、上州から狸の挟撃はさみうちにあつて、それを江戸ッ児が黙って見ているつもりかどうか、と余計なところに気を揉もむ者もあります。

「近いうちに、お狸様がおいでなさるそうですね」

「左様でございます、お近いうちに、お狸様のお通りがあるそうでございます、どこらをお通りになるか、それはまだわかりませんそうでございます」

水戸様街道といわれる松戸の方面や、奥州仙台北奥守むつのかみがお通りになるという千住の方面から、中仙道の板橋あたりでも、お爺さんやお婆さんが、真面まがおもになつてその噂をしているほどに評判になりました。街道の商人らは、それでももし、お狸様がお通りになるならば、なるべく自分たちの方の街道を通っていたきたいものだ、ひそかに願っていないものはありません。

「お狸様のお通りは一体、いつ頃なんぞございましょう」

「まだそのお日取りがきまりませんそうで」

商人たちが心配するのは、そのお通りの日と、お道筋とによって、商品の仕込みをしなければならないの

であります。

すでにお狐様があり、またお鷲様とりさまがあり、ここにお狸様が崇拜されることも当然であります。明治の世になって、東京と横浜の間に一つの穴が発見せられました。それが忽たちまち大穴様となって、京浜の人士を無数にひきよせ、それがために臨時停車場ステーションが出来たことを思えば、お穴様よりはいっそう由緒ゆいしよがあり、来歴がある茂林寺のお狸様のために人間が狂奔するのは、決して笑うべきことではありません。

ところが、そのお狸様は噂ばかりで、まだ御通行の模様が見えないのに、その前後に、各街道からゾロゾロと町の立ったように多数の乞食が、江戸の市中をめぐって繰込んで行くのが目につきます。鼻の欠けたのや、目のクシヤクシヤや、跛足びつこや、膝行いざりや、膏藥貼こうやくはりが、おのおの盛装を凝こらして持つべきものを持ち、哀れっぽい声を振絞こって、江戸へ向って繰込むことの体が世の常ではありません。

「今度、お情け深い江戸の公方様くぼうさまが、哀れな俺たちにお救い米を下さる、だからこうしてそのお救い米をいただくに上るんだ」

かくて毎日、江戸の市中へ繰込む乞食の数が少ないものではありません。

沿道の商人たちがこぼすまいことか、水戸の中納言様、奥州仙台の陸奥守様、さてこのたび評判の館林たてばやしのお狸様、それとは違って、箸も持たぬお菰様こもさまのお通りでは、どうも商売がうるおいっこはありません。

こんな碌ろくでもないお通りは、追払うしはらってしまいたいものだと思いました。

この際、南条力の東漂西泊ぶりもまた、かなり忙がしいものと言わなければなりません。

甲州街道筋を出かけるから、やはりこれはお馴染なじみの甲州入りをするものだろうと見ていると、八王子から急に南へ折れました。

ここを南へ行けば、甲州へは行かないで相模さがみへ出るのです。このとき南条の身なりは、ちょっとした無宿の長脇差といったふうをしていることも、いつもとは趣が少し違います。そうして八王子を南へ相原道あいはらみちを出かけると、路傍の松の木の蔭から、

「先生」

ぬつと現われたのは、たしかに待伏せをしていたものらしい。これも一癖ありそうな旅の無宿者の風体ふうていです。

「やあ」

「ずいぶんお待ち申しました」

「相変らず早い奴だなあ」

こう言ってうちとけた話ぶりで、穏かならぬ雲行きは、すっかり取去られたものです。

「時に先生、御案内でもございましょうが、あれが相模の大山の阿夫利山あふりさんでございますよ、こっちのが丹沢で、相模川があそこを流れているんでございます、甲州では例のそれ猿橋のあります桂川で、それがここいらへ来ては相模川になります、これからずっと下しもへ

さがると馬入川^{ばにゅうがわ}で、東海道は平塚のこつちの方へ流れ出すのがそれでございますな、秋になると鱗^{うろこ}の細かい鮎^とが漁れて、ギョデンで食うと、ちよつと乙でございますよ」

待伏せていたのが案内ぶりに、こんなことを言いながら先に立って歩き出したのを見ると、なんの珍しくもない、がんりきの百蔵でありました。

「そうか。そうして荻野山中はどの辺に当るんだ」

「山中はここですよ、向うの林に柿の木が見えましよう、あれと尖^{とんが}った山の間あたりになりますな、あの山は鳶尾山^{とびおさん}というんで、あれに抱かれてこうなつたところに荻野山中、大久保長門守一万三千石の城下があるうというもんです、たとえ一万石でも、あんな山の中に御城下があるうというのは、ちよつと素人^{しろうと}が驚きます」

「なるほど」

「なーに、ほんの一足です、真直ぐに引張れば五里と行ったところでしょうけれども、いったん厚木へ出て戻るのが順ですから、延べにして八里と見積れば、たつぷりです」

がんりきの案内ぶりによって見れば、南条は、右の荻野山中、大久保長門守一万三千石の城下なるものへ志して行こうとするものらしい。無論がんりきの百蔵は、案内を兼ねてそこまで同道するものと思われる。

こうして二人は相模野^{さがみの}を歩き出しているうちに、がんりきの百蔵が、

「さて南条様、つかんことを承るようでございますが……」

事改まって、仔細らしい物の尋ねぶりであります。

「何だ」

「ほかではございませんが、あの相生町のお屋敷というものも、ずいぶん変てこなお屋敷でございますな」

「うむ」

「先頃まで、御老女様という大へんにけんしきの高いお年寄が采配^{さいはい}を振っておいになりましたが、近頃では、すっかり浪人者で固めておしまいになりましたね」

「うむ」

「ところが南条様、相手かわれど主^{ぬし}かわらずというんでもございましょう、かわらないのは、やっぱりかわりませんな」

「何を言っているのだ」

「御老女様だけが抜けて奥向の方は、すっかりかわらないじゃございませんか」

「あの屋敷には、奥も表もありはせん」

「御冗談でしょう、奥方はおいでにならずとも、奥向の女中たちの綺麗^{きれい}なところが、うようよといはるはずでございます」

「そりゃあ、いかなる屋敷でも、女手をなくするといふわけにはゆくまい」

「先生、ところで一つお聞き申したいのは、あの別嬪^{べっぴん}は、ありやあ今じゃあどなたの持物になつていゝるんでございます」

「あの別嬪とは誰のことだ」

「お慌とまけなすっちゃいけませんね、多分あなた方が甲州から連れておいでになったんだろうと思いますが、ただ、ああして預かりっぱなしにしてお置きなさるのか、それともほかにもう定まる主がおありなさるのか、その辺が気になってたまらないから、いつか、あなたにお聞き申してみたいみたいと思つていたところですよ」

「ふん、早い奴だな、もう、あれを知つてるのか」

「先生、余人ならぬが、のんりきの百をみくびりつこなし、人の物でもわが物でも、一旦、のにしようと思つたら、逃したことのねえが、のんりきの百でございます」

「それで貴様、あの女をものにしてみてもあるのか」

「ははは、先生、あればっかりはいけませんよ」

「ふーん」

「先生、いやな嘲笑あざわらいをなすっちゃいけません。なるほど、たつたいま申し上げた通り、ものにしようと思えば、どんな物でもきつとものに見せるが、のんりきではございますけれど、あれだけがものにならないというのは、失礼ながら、あのお屋敷にああしてたくさんの豪傑が詰めておいでになるから、それにが、のんりきほどの者がすくんで手を引いているなど、こう思召しなつては違いますよ、どなたが幾人おいでになろうとも、それを怖がつて、ものになるものをみすみすそのままで置いては、が、のんりきの沽券こけんにかかわりますよ」

正直のところ、靦ねいをつけてみたことも無いではございませんが、怖いですよ、このが、のんりきほどの男が慄ふるえ上つてしまいました」

「意気地のない奴だな」

「全く意気地がございせん」

「何がそれほど怖いのだ」

「は、は、は、が、のんりきの目には、あなた方は怖くはございせん、江戸の町奉行や市中の金持は、あなた方を怖がつて慄え上るかも知れませんが、私共はそれほど怖いとは思いませんよ。ただ、怖いのはあの犬です、あの黒犬だけには、が、のんりきも怖毛おそけをふるいますよ、あの犬がついている以上は、ものになるべきものものになりません」

が、のんりきがここで怖ろしがる犬というのは、ムク犬のことです。ムク犬に護られているから、お君というものに、いかなる意味においても一指を加えることのできないのを、南条の前でこぼしているのは、この男相当の愚痴であります。

南条は充分の揶揄からかい気分きぶんを以て、

「が、のんりき」

「はい」

「貴様、それほどに男自慢なら、左様に怖い思いをせず、もっと面白い獲物えものがあるのだが、相談に乗つてみる気はないか」

「ずいぶんやりやしよう」

「器量はなんとも言えないが、格式はあれよりズット

上だ」

「なるほど」

「あれは貴様も知っている通り、駒井甚三郎の寵物だ、駒井は甲州勤番支配で三千石の芙蓉間詰め直参だが、ここへ持ち出したのは大諸侯だ」

「お大名なんですね……」

がんりきの百が咽喉から手の出るような返事をする。

「そうだ、それを一番、貴様がものにしてみる気なら、尻押しをしてやるまいものでもない」

「御冗談をおっしゃっちゃいけません、あなた方に尻押しをしていただかないからって一人でやりますよ、昔の鼠小僧なんぞは一人でお大名の奥向を、どの位荒したか知れたもんじゃありません、そういう仕事は一人に限りまずよ」

「よろしい、それでは貴様に知恵をつけてやろう、ほかでもないが相手は出羽の庄内で十四万石の酒井左衛門尉だ。今、江戸市中の取締りをしているのが酒井の手であることは貴様も知っているだろう、我々にとつてその酒井が苦手であることも貴様は知っているだろう、酒井は我々の根を断ち、葉を枯らそうとしている、我々はまたそこにつけ込んで酒井を焦らそうとしている、その辺の魂胆はまだ貴様にはわかるまい、わかつて貰う必要もないのだが、貴様の今に始めぬ色師自慢から思いついたのは、酒井左衛門尉の御寵愛を蒙つた尤物が、いま宿下りをして遊んでいることだ。それ

は佐内町の伊豆甚という質屋の娘で、酒井家に屋敷奉公をしているうち殿に思われて、お手がついてお部屋様に出世をして当時は、ある事情のもとに宿下りの身分であるという一件だ。その名はお柳という。これだけのことを聞かせてやるから、あとは貴様の思うようにしてしろ」

南条は平気な面で、これだけのことを言いました。いったい、この南条という男は、ある時は慨世の国士のようにも見え、ある時は、てんで柙に合わないことを言い出して、掠奪や誘拐を朝飯前の仕事のように言つてのけもする。

ここにはまた勧めるのにことを欠いて、がんりきの百蔵というやくざ者に向つて、こんなことをも勧めたのは、油紙へ火をつけてやるようなものです。ただでさえも、そういうことをやりたくつて、やりたくつて、むずむずしている男に向つて、こう言つて筋を引いては堪つたものではありません。つまり、いま江戸市中の取締りに当っている出羽の庄内の藩主、酒井左衛門尉の愛妾を盗み出せとけしかけたものです。

「先生、がんりきを見込んでそうおっしゃって下さるのが有難え」

がんりきは、額を打って恐悦しました。

十

多分、厚木へ一晩泊り、荻野山中へ南条を送りつけ

て一晚泊ったのであらうと思われながら、がんだりきの百蔵は、前と同じ道を逆に八王子方面へ向けて帰り道です。

南条は多分荻野山中に逗留とまりゆうしていることだろうが、あの先生、あんな山の中の城下に逗留して何事を為さんとするのか、へたなことをして、また甲府の二の舞を踏んで牢屋へ叩き込まれるようなことをしなければよいが。

南条を残して、ひとり帰るがんだりきの百蔵は、ほくそ笑みして、何とやら包みきれぬ嬉しさが面にいっぱいです。これもまた相当の謀叛気があって、当りがついたことから嬉しさが包みきれないものと思われる。

「もし、あなた様はがんだりきの親分様ではございませんか」

これには、さすがのがんだりきが少し吃驚びっくりさせられました。と言うのは、以前、来る時に自分が立って待伏まちばたせしていた路傍の松の木の下に立って、同じような形をして自分を待受けていたのが、思出し笑いをしながら歩いているがんだりきの横合いから不意に浴びせかけたものですから、そこでがんだりきが吃驚びっくりして踏みとどまると、

「エ、これはがんだりきの親分様でございましたか、御免なさんせ、斯様かよう、土足裾取りどそくすそとまして、御挨拶失礼さんでござんすが、御免なさんせ、向いまして上さんと、今度はじめてのお目通りでござんす、自分は相州足柄上あきはたの秦野の仁造にぞうの一家、唐駒からこまの若い者市助と発し……」
ともかく相当の心得ある博徒と見えて、切口上で

賭博打ばくちうちの言葉手形を本文通り振出したから、がんだりきの百蔵もいよいよ面食めんくちしました。百蔵とても、こうして無宿渡世のならず者だから、その道の挨拶ぐらいを心得ていないはずはないが、この畑道の真中で、だしぬけにこんな挨拶を受けようとは思いいもよらないことです。

「まあ、待っておくんない」

ことがあんまり突然だから、がんだりきも改まって同様の挨拶で返答をすることができません。

「御賢察の通りし、がない者でござんす、後日にお見知り置かれ、行末万端ごじゅっこんに願います。承りますれば親分様には……」

こちらは面食っているのに、先方はいよいよ澄まし返って、賭博打の言葉手形を正式に振出して来るのだから堪らない。第一、自分が、がんだりきの百蔵なるものだということを、この遊び人がどこから聞いて来たらう。様子ありげにここに待伏せて、わざわざ名乗りがけようとするのが、気味が悪いと言えば甚だ悪い。ところがその遊び人は遠慮なく喋り立て、

「親分様には、これより江戸表へおいでなさんして、お仕事をなさるそうに承りましたが、手前、いかなき者でござんすが、お手下にお使い下さいますれば有難い仕合せにござんす。手前、生国しょうごくと申しまするは、出羽は庄内、酒井左衛門尉の城下十四万石、伊豆屋甚兵衛の娘お柳と発しまして……」
「ばかにしてやがる」

がんりきがここに至って吹き出しました。吹き出したけれども剣呑は剣呑です。誰かこんな奴を使って、碌でもない文句を吹き込んで、おれの度胆を抜こうとした奴がある。誰というまでもなく、それは南条先生のいたずらに違いなと思うから、ばかばかしくなつてその遊び人の面をじつとながめました。

じつとながめられてもこの先生、あまりお感じがなようです。

「兄い、お前は男だと思つたら女なのかい、酒井様の御城下でお柳さんというのはお前のことかい」

がんりきは呆れてこう言いましたけれども、その男はがんりきが呆れたほどに呆れはしません。あつけらかんとしているところは、どうしても誰かに知恵をつけられて、一夜づくりの言葉手形を濫発したものに違いないのです。

その男が、あつけらかんとしている途端に、四辺の稲叢のかげから、同じような程度の遊び人体の（旅装の）男がこのこと出て来ました。

「エ、これは、がんりきの親分様でございましたか、御免なさんせ、斯様、土足裾取りまして御挨拶失礼さんでござんすが、御免なさんせ、向いまして上さんと、今度はじめてのお目通りでござんす、自分、武州は青梅宿、裏宿の七兵衛の一家、若い者八助と発し……」

「ふざけるない、ふざけるない」

がんりきが腹を立てると、また一方の稲叢からの、このこと出て来た同じようなのが、

「エ、これはがんりきの親分様でございましたか、御免なさんせ、御賢察の通りしがなき者でござんす、後日にお見知り置かれ、行末万端ごじゅっこんに願います。承るところによりますと親分様には……」

「やい、何を言つてやがるんだい、冗談もいいかげんにしねえと撲るぜ」

がんりきが、ぽんぽん言っているのに頓着なく、ひきつづいて稲叢の後ろから二人三人と出て来ては、入り替り立ち替り同じような挨拶を述べるのだから、がんりきもやりきれない。その言うことを聞いていると挨拶の末には、親分はこれから江戸へ出て面白い仕事をなさるのだそうだが、どうか自分たちを子分にして、その仕事に一口乗せて下さいというのであります。その面白い仕事というのは、南条力からそのかされた一件であることを、その連中はよく承知の上で、こういうことを言いかけるものだということがよくわかります。同時にこの連中をつつについて、こんな悪戯をさせたのはほかでもない、南条力のいたずらであることがよくわかります。

そこでがんりきは、南条の人の悪いのに苦笑いをしていると、取巻いて来た連中の口説き立てることが、いよいようるさいので閉口です。

「クドいやい、この胡麻の蠅め」

がんりきは、この連中を振切つて通り過ぎようとすると、その袖に縋つて、

「御免なさんせ、御賢察の通りしがなき者でござんす、

後日にお見知り置かれ、行末万端ごじゅっこんに願います、このたびは親分様のお引立てにより、江戸表へお召連れ下さんして……」

追いかけて来るのだから、どうにも困ったものです。「わかった、わかった、お前たちは、いやに切口上で遊び人づきあいをしたがるけれど、あとの半分が物になっちゃいねえ、誰かに教えられた附焼刃だ、いいから、そうしていねえ、一人前に二分ずつやる」

が、んりきは金で追払おうとすると、遊び人どもは、「御免なさんし、手前、金銭に望みはござんせん、親分様のお手先になって、江戸表へお伴が致しとうござんす」

「勝手にしやがれ」

が、んりきは出しかけた財布をひっこめたが、手早く手近な奴の横面を一つ撲り飛ばしておいて、一散に八王子の方面へと走り出しました。

「御免なさんし、親分様、お江戸までお伴が致しとうござんす」

これらの遊び人どもが、が、んりきのあとを慕ってどこまでも追いかけるのは、かなりいつこいものです。

十一

この時分、高尾山薬王院の奥の院に堂守をしていた一人の老人がありました。

以前、不動堂がまだ麓の登り口にあった時分は麓

にいたが、不動堂が頂上の奥の院へ遷されると共に、この老人もまた頂上へ移りました。

この老人の前生を聞くと、やはり一個の武芸者であったようです。少壮の頃より諸国を修行し、年老いてこの堂守となりました。齢はもう七十を越しているから、武芸の話は問う人でもなければ滅多にすることはないが、発句を好んで自らも作り、人を集めては教えておりました。麓にいる時分にはこの老人を中心として、よく運座が催されたものですけれども、頂上へうつってはそのことがありません。発句の代りに一陶の酒を楽しんで、ありし昔の夢に耽りながら、多年の間、山上でひとり夜を明かすことを苦なりとはしていません。

ある晩——ちようど、十六日の月が東から登って、満山ことごとくその月光を浴びた夜半のことであります。この奥の院近くに人の足音を聞きましたから、老人は坐ったまま居間の扉を押開いて、傍らにあった瓶子を取って逆しまにし、その水を外へこぼすと、その傍らを風のように通り抜けた人があります。

瓶子を片手に、長い白髯を撫でながら堂守の老人は、その後ろをじつとながめました。奥の院から大見晴らしへ通る木の根の高い細道へ、その人は早くも隠れ去って影だに残してはいません。そこにはおもに樺木科の植物が多いから、あるところは、ほとんど月の光をも漏らさぬ密林です。

老人は後ろを見送ったままで小首を捻りました。今

は、たしかに丑三時^{うしみつどき}、麓の若い人から頼まれた発句の点をして、今まで夜更かしをしていたが、ようやくそれを終ったから瓶子を洗って、また一陶の酒を汲もうとしている時に、この人影でしたから、老人が沈吟をはじめたのも無理はありません。時は既望^{きぼう}の夜で、珍しいほどに霽^はれた空の興に浮かれて月を観る人が無からうはずはないが、月といっても今宵に限ったことではない。未だ曾^{かう}てこの夜更けに、一人でこの頂上までさまよい来る風流人はありませんでした。

しかしながら、年をとっては無精^{ぶしよう}ですから、わざわざそれを追蒐^{おいか}けてみようとの好奇心も動かず、やがてハタと戸を締めきってしまいました。このあたりでは鳴かない怪禽^{かいきん}が、やや下ったところの飯綱権現の境内の杉の大木の梢では、しきりに鳴きます。奥の院から山脊^{さんせき}を走るところの樺木科の多い大見晴らしへの道は、筑波の男体から女体に通う道とよく似ております。月の光も漏らさないほどの密樹を分けて、やはり大見晴らしへ通う人があります。堂守の老人の見たのが僻目^{ひがめ}ではなく、或る時は、さやけき月の光を白衣に受けて、それが銀のようにかがやき、或る時は、木の下暗に葉影を宿してそれが鱗のようにうつります。道の程、八丁ばかりのところを、よれつもつれつ走って行く人の形が、時とすると白蛇ののたって行くやと疑われます。

高尾の本山から右へ落つる水が妙音の琵琶の滝となつて、左へ落つるのが神変の蛇滝^{じやたき}となるのであります。

琵琶の滝には天人が常住琵琶を弾じ、蛇瀑^{じやばく}の上には俱利迦羅^{くりから}の剣を抱いた青銅の蛇^{じゃ}が外道降伏^{げどうかうふく}の相を表わしている。その青銅の蛇が時あつてか、竜と化して天上に遊ぶことがあるそうです。禹門^{うもん}三級^{さんきゅう}の水は高くして、魚が竜と化するということから、蛇滝の蛇が竜となつて天上に遊ぶのは当り前です。けれどもこれは左様なものではありません。人界の竜か、みみずか、行者の着る白衣を着ている机竜之助が、密林の細径を出でて薄原^{すすきはら}の大見晴らしの真中に立っています。

高尾の山の大見晴らしは、誇張することなくして関東一の大見晴らしということができるとしよう。この大見晴らしを絶頂とする高尾の山は、名の示す通りに山というよりは山の尾であります。二千尺を越ゆることのない地点ではありながら、その見晴らしの雄大闊な趣が無類です。

その地点だけは、樹木といつては更にない一面の薄原で——薄原といつても薄だけが生えているというわけではなく、薄も、尾花も、荳荳^{かろかや}も、萩も、桔梗も、藤袴も、女郎花^{おみなえし}もあつて、その下にはさまざまの虫が鳴いています。

ここに立つて東を望むと、高尾の本山の頂をかすめて、遠く武蔵野の平野であります。東に向つてやや右へ寄ると、武蔵野の平野から相模野がつづいて、相模川の岸から徐々として丹沢の山脈が起りはじめます。それをなおずつと右へとつて行けば甲州に連なる山ま

た山で、その山々の上には富士の根が高くのぞいているのを、晴れた時は鮮かに見ることが出来ます。それを元へ返して丹沢の山つづきを見ると、その尽くるところに突兀として高きが大山の阿夫利山です。更に相模野を遠く雲煙縹渺の間にながめる時には、海上微かに江の島が黒く浮んでいるのを見ることが出来ます。

この時に、素人は、どうかすると相模川を多摩川と見誤ることがあります。ややあつて多摩川を発見して、あれは利根か知らんと訝る者もありますけれど、少しく頭を冷やかにして地理を案ずれば、その区別は苦にするほどのことではありません。

人跡の容易に到らない道志谷を上って行くと、丹沢から焼山を経て赤石連山になって、その裏に鳥も通わぬ白根の峰つづきが見える。富士の現われるのは、その赤石連山と焼山岳の間であります。空気のかげんによつては、道志谷の山のひだが驚くばかりハッキリして、そこを這う蟻の群までが見えるような心持がする。

やはり東を向いたままで、関東の平野を左の方にながめてゆくと、筑波と日光の山を見ることが出来ます。月の出るてう武蔵野の西の涯に山があつて、そこがすなわち秩父根であります。秩父の山と上毛の山とは切っても切れない脈を引いている。妙義も、榛名も、秩父を除いては見ることも答えることもできないほど微かに、信濃なる浅間の山に立つ煙がのぼるのを眺めた時に、心ある人は碓氷峠の風車を思い出して泣きます。

碓氷峠のあの風車

誰を待つやらクルクルと

その碓氷峠は想望するのみで、ここから見ることはできないが、小仏峠はすぐ眼前に聳えているのがそれです。東へ向つていたのをグルリと西へ向き返つて見ると、高原の鼻の先にお内裏雛のお后にそっくりの衣紋正しい形をしたのが小仏山で、駒木野の関所から通る小仏峠道はその上を通ります。

小仏の背後に高いのが景信山で、小仏と景信の間に、遠くその額を現わしているのが大菩薩峠の嶺であります。転じて景信の背後には金刀羅山、大岳山、御岳山の山々が続きます。それから山は再び武蔵野の平野へと崩れて行くのだが、小仏の肩を這つて真一文字に甲州路をながめると、またしても山また山で、街道第一の難所、笹子の嶺を貫いて、その奥に甲信の境なる八ヶ岳の雄姿を認める。富士をのぞいてすべての山がまだ黒い時分に、まず雪をかぶるのは八ヶ岳です。

こうして見ると高山があり、峻嶺があり、丘陵があり、平野があり、河川が流れ、海島が漂い、人跡の到らざるところと、人間の最も多く住むところとを、すべてこの高尾の大見晴らしの一眸のうちに包むことができる。大見晴らしの大きさは、その接触点に立つの大きさであります。

それはさておいて、今、月明を仰いでこの高原の薄原の中に、ひとり立つ机竜之助はこの時、もう眼

があいていました。いな、少なくとも月の微光をながめ得るほどには、眼が開いていなければならぬはずで。

すすき尾花の中に西を向いている、たったひとりの人影に、ちょうど、天心に到る十六日の月が隈なく照しています。

もし、煙霧がなければ白根山の峰つづきが見ゆるあたりに、竜之助はいつまでか立ち尽しているが、風はそよとも吹かず、ただ高原の夜気が水のように流れているだけです。

鳥も通わぬ白根の山に
月の光りがさすわいな

多分、その白根の山ふところに心残りがあるのでしよう。

白根の山ふところの奈良田の温泉で、似而非の役人を一槍の下に縫いつけたのは、さのみ恨みの残るべきことではありません。

徳間峠で倒れた時に介抱を受けた山の娘の頭のお徳のことが、思い出になるとすれば、思い出にはなりません。

お徳は親切な女でした。温和なうちに、かいがいしいところがあって、世話女房としての無類の情味があったことを、今こうして白根の方をながめるにつけて、思い出さないう限りはありません。眼に見えない面影ながら、それを思い浮べると、肉附のよい、血色の麗わしい、細い眼に無限の優しみを持った、年増盛

りであったことを思いやらないわけにはゆきません。お徳の面影が思われると、同じような月夜の晩に、月見草の多い庭で砧を打ちながら、

甲州出がけの吸附煙草
涙じめりで火がつかぬ

と得意の俚謡をうたったことが耳に残ります。眼の見えた以前の人は暫く措き、眼が見えなくなってから後の人の面影が知りたい。少しでも眼が見えるようになったとしたら、今までの絶望がまた新たな希望として現われない限りはあるまい。

その時分は荒れ果てて狐狸の棲処となっていた蛇滝の参籠堂に、行者が籠りはじめたと麓の人が噂をはじめたのは、もはや百日ほど以前のことです。その後、夜な夜な女の姿をした人がこの参籠堂へ物を運んで、忍びやかに来ては、忍びやかに帰るということも人の噂に上りました。

人の噂とは言いながら、この山麓であるから、それが拡がったところで大した範囲ではありません。噂は噂だけにとどまって、誰しもその真相をたしかめようとの暇を作るものではありません。その時分こそ廃ったけれども、その以前は、この滝にかかつてかなりの荒行をしたものさえあるとのことだから、隠れて行をする信心の行者を妨げるのを恐れ多いとして、やはり噂を噂だけにして、里人はあえて近寄ろうとしません。

百日の間に、参籠堂に籠って、夜な夜な霊ある滝に

打たれてみた時には、信心のなきものもまた、冷気の骨に徹るものがありましよう。心頭が冷却して、心眼が微かに開くと共に、肉眼に光を呼び起してくることはありそうなことです。

巢鴨、庚申塚のあたりの一夜の出来事が縁となつて、机竜之助は夢のように導かれて甲州街道を辿りました。夢で見た時に、自分の眼が明らかにあいて、以前、東海道を上って行った時の旅のすがたで、女を守る駕籠に引添うて河原の宿、小名路の花屋まで来たが、現実にはそれと反対に女に誘われて、駕籠に揺られて小名路まで来ました。

そこはこの女の土地で、その好意によつて蛇滝の参籠堂に隠れて、ついに今日に到りました。蛇滝の水に霊があるならば、この男の眼を癒さないという限りもあるまいが、事実、こうして夜歩きをすることは、この高原に來た時とのみ限ったことではありません。全く見えない時ですら、江戸の市中を自在に潜行して人を斬りました。

その時、小仏峠の一点に火が起りました。

大見晴らしから小仏峠へ出る細径があります。火はその一点、小仏山の頂上に近いところで起りました。野火というほどのものではありません、まさしく焚火でありましよう。そうでなければ松明であります。焚火としても松明としても、それが時ならぬ火であることが、怪しいといえは怪しい火です。

尾花の中から、その怪しい火に頭を向けて眼を注い

でいるらしい竜之助は、たしかに眼が見えるものです。その手には僧侶の持つ如意のような尺余の鉄棒を、後ろにして携えていることも、その時にわかりました。

野分の風が颯と吹き渡ると、薄尾花が揺れます。薄尾花が揺れて高原が海のように動くと、その波の間を泳いで、白衣の鮮かなのが月に背を向けて、山の頂上に近いところから中腹へ下りて来ることは来るが、果してそれがこの高尾の山へ来るのか、それとも右へ廻つて与瀬、上野原の方へ下りて行くのか、そのことはまだわかりません。見ているうちにその火が消えました。消えたのではない、隠れたのでしよう。

大見晴らしからながめた小仏の全山は、坊主山とは言いながら、それを与瀬へ下りようとする中腹には林があります。多分、火の光はその林へ紛れ込んだものでしよう。

果してその松林の中を人が通ります。怪しい火と見たのは、その人の手に持っていた提灯でありました。その提灯とても、二つ引両の紋をつけた世間並みの弓張提灯で、後ろには「加」という字が一字記してあるだけです。その提灯を携えて小仏山から下りて、この松林に入つて、多分この松林を抜けたらば、また薄尾花の野原を、高尾の大見晴らしへ出て山上に詣でるか、或いは山下の村へ行くものでしよう。

月夜に提灯は、ふさわしくないけれど、これとてもおそらくは、自分の足許を照すためではなく、悪獣や怪鳥の害を避ける要心のためと見れば、さのみ怪しむ

べきことありません。怪しいのは、いかに旅慣れたとは言いながら、深夜、この間道を一人で通るという豪胆と、それから、しかく豪胆であらしめた用向そのものであります。

ところが、この豪胆なる旅人は女でありました。笠に、てっこう、きやはんのかいがいしい身なりをして、いるけれども、女は女です。しかも背に男の子を一人背負うて、ほかに全く連れとでもなく、この山道を急ぐのであります。

竜之助がもと来た道とは全く別な方面、つまり小仏峠へ出る細径こみちのことです。蛇滝へ帰らないで、この路を行くとすれば、右の怪しい火に心がうつって、それを突き留めてみたくなったのかも知れません。突き留めれば斬ってしまうつもりでしょう。たとえ眼があいても、心の悟りが開けきれない限り、彼のいたずら心は遽にわかに止むべしとは思われません。

来た時の路とは違って、これから小仏へ出るまでは坊主山です。小仏そのものの全体が坊主山ですから、樺木科かばのきかの密林も無ければ、松杉科の喬木もあるのではない。ただ薄尾花が一面の原野をなしているのだから、月に乗じて行く白衣の人の影は、そのまま銀のようにかがやいて、野分のわきに吹かれて漂うて行くばかりです。けれども、それとても長い間のことでありません。最初は膝のあたりに戯れていた薄尾花も、ようやく胸に達し、ついには人丈ひとたけよりも高くなって、いつしか人影

を没してしまいました。月は相変らず天心を西へ少し傾いたところに冴さえてはいるけれども、高原の上は、今や人の影というものはありません。

しかしながら、あちらの小仏山の頂上に近いところに見えた一点の火は、消えたということはありません。極めて小さい火ではあるけれども、火のあるところには人間のあることは確かです。人間が無ければ、それは野火の卵ですけれども、その小さな火が、少しずつ山を下りて来ることによって、人間の手に操あやつられて、いるということは疑うべくありません。

その女は、徳間峠とくまとうげから縁を引いた山の娘の頭かしらのお徳であります。どうしてこの女が、真夜中にここを通るのか。蛇滝の参籠堂にその人がいると知って、わざわざこの難路を訪れるのか。もし、そうであったなら、今宵に始まったことではあるまい。与瀬か上野原あたりに宿を取っていて、夜な夜な参籠堂に物を運ぶというのは、この女の仕事かも知れません。

大見晴らしに立って認め得た一点の火を、それと知ればこそ、竜之助は迎えのために薄尾花の海へ身を隠したのでしょう。蛇滝へ参籠して既に百日にもなるとすれば、その間に、篠井山しののいざんの下つぎの月夜段よだんの里まで消息を通ずることは、あえて難事ではありません。ともかくも峠一つ越えての甲州国内のことですから、女の身でも真心さえあれば、訪ねて来られない道ではないのです。ましてお徳は旅に慣れた女であります。奈良田の湯まで看病に行った時の熱が冷めないでいるなら

ば、遙々^{はるばる}かけた呼出しに応じないというはずはありません。お徳の目的はわかりました。たしかに蛇滝の参籠堂をめぐって小仏の裏道を急いだのであります。背に負うている男の子は先夫——というても今も夫があるのではないが、亡くなった夫の子の蔵太郎であることも疑いはありません。

しかしながら、竜之助の気は知れない。遠く白根の山ふところから、かりそめの縁^{ゆかり}の女を呼び寄せてどうする気だ。彼には近き現在に於てお銀様があるはずだ。また庚申塚の辱^{はづか}しめの時から、夢のようにここまで導いて、蛇滝の参籠に骨を折ってくれた小名路^{こなじ}の宿の女も、たしかに宿に隠れているはずだ。理想のない人には、人生が色と慾とよりほかにはない。生きていることが真暗であつた竜之助に、人を斬るの慾と、女に接するの慾と、その二つよりほかになかつたものか知らん。今、幸いに、何かの恩恵によって、臃^{おぼろ}げながら再び人の世の光明を取返しかけたという時に、もう女無しではいられないというのはあまりに浅ましい。呼び迎える男も男だが、それに応じて来る女も女だ。愚かなのは人間のみではありません、虫のうちの最も愚かなのを火取虫と申します。気になるのはこの女の携えている提灯の、後になり先になり二羽の蝶が狂うていることです。あまり気になるから、追つてみたけれども離れません。叱つてみたけれども驚かないで、提灯の上へとまり、後ろへ舞い、その志はひたすら中なる火を取らんとして、焦^{あせ}るもののようにです。

二つの蝶のうちの一つは白くして小さく、他の一つは黒くして大きなものです。白くして小さきは多分白蝶と呼ぶもので、黒くして大きなは烏羽揚羽^{からすはあげは}でありましょう。この二つだけが提灯のまわりで狂います。「叱^{しつ}、いやな蝶々だこと」

女は気になるから片手で打つ真似をしました。その手をくぐって白いのは後ろへ、黒いのは前へ隠れて、また二つが一緒になつて提灯の上へ現われるのは、人をからかっているような仕打ちであります。

猛獸毒蛇も怖ろしいけれども、それは火を見ると逃げます。弱々しい蝶に限って火を見ると、かえつてそれを慕い寄るのが怖ろしい。避けるものは身を惜しむことを知っているけれども、寄るものは身を殺すことを惜しみません。火に焦^{こが}れて来て、身の程を知らぬ望みのために、身を焼かれることを知らないものは、憐れむべくもまた怖ろしいものです。

「叱^{しつ}、あちらへ行つておいで」

この時の蝶は、たしかに戯^{たわむ}れているのではなく、噛み合っているのです。いずれが早く火に触れようかとして、先を争うて噛み合っているのに違いない。その時、提灯の火がパツと消えました。二つの蝶がその火を消してしまいました。

再び火をつける必要はありません。月の光が明るいのに、そこらあたりには大文字草^{だいもんじそう}と見える花がいっぱいに咲いております。

「もし」

消えた提灯を持って空しく立っていたお徳は、人を呼びかけました。やや離れたすすき尾花の中に朦朧^{もうろう}と人の影があります。

「あなたは、どちらからおいでになりました」

「蛇滝から」

というのがその返事です。

「ここまで、わたくしを迎えに来て下さいましたか」

お徳は息をはずませて、問いかけました。

「月が好いから、つい」

「ああ、よくおいで下さいました」

二人はまだ離れて立っています。

「まあ、わたくしは、どんなにあなた様のことを心配しておりましたでしょう、甲府へおいでになってから後も、それとなくお尋ねしてみましたけれど、一向わかりませんでした、お消息^{たより}をいただくと、取るものも取りあえずにこうして急いで参りました。お目はいかがでございます、もう、お見えになるようになりまして、もうでございます、それが何よりでございます」

お徳は、やはり息をはずませて言う言葉です。それでも、二人は、すすき尾花の中に、やや距離を置いたのみに、相ちかよえることを致しません。

「眼が少し見えるようになりました、薄月^{うすづき}の光で物を見るほどになりましたわい」

「それは何よりでございます、どうしてそれまでにおなりなさいました」

「この下の蛇滝というのに、百力日ほど打たれている

うちに、おのずから光がさして来ました」

「それで、もうこんなに山道をお歩きになって毒ではございませんか、お疲れにはなりませんか」

「一向、疲れはせぬが、久しぶりでそなたに会ったこと故に、あの松原で暫く休息して、ゆっくり物語をしたいものじゃ」

「それもよろしうございますが、蛇滝のお堂とやらまでお伴^{とも}を致しましょうか」

「参籠堂へは、やっぱり女人は近づかぬがよい、行って見たところで何の風情^{ふぜい}もない、それよりか、あの松原の月の光の洩れるところが休みごろ、話しごろと思われる」

「では、あれへお伴を致しましょう」

「後へ少し戻ってもらいたい」

「どうぞ、あなた様からお先へ」

高尾と小仏の中のすすき尾花の高原の中に立った二人は、たがいにその細い道を譲りました。けれども二人の中に、距離のへだたりがあることが変りません。

一方は、火の消えた提灯を持って、懐しさに息をはずませておりながら、その人に近寄ろうとはせず、一方も、わざわざ迎えに来たと言いながら、むしろ、人には背^{そむ}を見せて月に心を寄せるように、すすき尾花の中に立っていました。

「細い道だから、遠慮をしないでは際限がない、一足お先に」

こう言いながら、お徳の前を通り抜けた竜之助の白

衣が透きとりました。その腰から裾へ臙染おぼろぞめのよう
に、すすき尾花が透いてうつりました。そうしてなん
らの音もなく、風の過ぎ去るようにお徳の前を通ると、
二三間の距離を置いて松原さして歩んで行きます。

この時にまた提灯の光がパツとさしました。氣を利
かせたお徳が早くも提灯に火を入れたものか、そうで
なければ、いったん、消えたと見えたのが、消えたの
でなく、また燃え出したのでしよう。

提灯の光が再び松林の中へ入ったのは、久しい後の
ことではありませんでした。

竜之助は松林の、夜露のかからないようなところへ
ゴロリと横になりました。いたいけな藤袴ふじばかまが、それ
に押しつぶされ、かよいい女郎花おみなえしが、危なくそれを避
けています。

疲れのせいかな横になって、うつらうつらと眼を閉じ
ていると、暫くして紛ぶんと鼻を撲うつ酒の香りがしました。
それはあまりに芳烈な清酒の香りであります。

思いがけなく眼をあいて見ると、いくらも離れない
ところの松の木蔭で、お徳が火を焚こいていました。手
頃の木の枝を三本組み合わせて、それに土瓶をつるし
て、下に枯葉を置いて程よく火を焚こいているのは、そ
の土瓶をあたたためているのです。いつのまに用意して
来たか、それとも前の日あたりにこの林へ隠してでも
おいたのか、土瓶の中には黄金色の清酒すましざけが溢あふれるほ
ど満ちていることは、その香りでわかります。その焚
火と向い合わせに、背中から下ろした蔵太郎を坐らせ

て、余念なく火を焚こいていたが、こちらを向いて、
「もし、お目ざめならば、一口召上めしあって下さいまし」
こう言われてみると、秋の日に晴れて松茸狩まつたけがりに來た
もののような気分です。

「どうしてまたこんなところまで、酒を持ち込んで來
たのだらう」

竜之助はそれを訝いぶかりながら、懶ものうげに起き直ろうと
する鼻の先へ、例の土瓶と小さな茶碗をもって來まし
た。

「さだめし御不自由でしようと思つて、昨日のうちに、
お酒とお米を少しばかりここへ持つて來ておきまし
た、山を通る時に松茸もありましたから、これも取つ
て参りました、これを召上めしあってお待ち下さいませ、た
だいま御飯を炊たいて差上げますから、松茸の即席料理
を、わたくしの手でこしらえて上げようと存じます、
温かい御酒と、温かい御飯を差上げたいと思ひまして」
酒を手に取りらないうちに、竜之助は酔よわされた心持
です。口をつけると上じょうかん燗かんに出來上あっている酒の香り
が、五臟六腑ごそうりくふに沁しみ渡ります。

「ああ」
と言つて咽喉のどを鳴なりました。温かい酒と、温かい飯
の誘惑おほが、己おのれを物狂ものぐるわしくするのを制さ制さすることがで
きません。

土瓶の中を立てつづけに飲みました。義理も人情も
なく飲みつくしてしまいました。

その間にお徳は、更に温かい飯と、新しい松茸の料

極なものではありませんか。

理にかかるべく焚火を加えて、その火加減をながめています。それによって見ると、飯を焚いているのではなく蒸しているものらしい。よく山の旅に慣れているものがするように、湿気のある土地に穴を掘って木の葉を敷き、それに米を入れてまた木の葉と土とかぶせて、上で焚火するという仕組みでやっているものらしい。松茸の料理というのも、多分そうしてこしらえるのでしょう。

温かい酒と、温かい飯とに瞑眩めいげんした竜之助は、久しく潜なまぐさんでいた腥なまぐさい血が、すつと脳天へ上って行くのを覚えます。この時に、むらむらと人が斬りたくなりました。眼に触るる人を虐しいたげて、その血を貪むさばってやりたい心持が、ようやく首を持ち上げてみると、刀のないことが、もどかしくてたまりません。腰をさぐって見たけれど刀がありません。

ぜひなくその心をじっと抑えて、また弱々しい女おみなえし郎花を虐しいたげて横になって、かすかに眼を開くと、焚火にかがやくお徳の血色というものが、張り切れるほどに豊満な肉を包んでいました。

百力日の参籠ということによって、辛からうじて恵まれた肉眼の微光は、その間、やむことを得ずしてさせられた精進しょうじん潔斎けつさいの賜物たまものであるとわかつているならば、再び人間の肉と血を見ることによって、もとの無明むみょうの闇に帰りたいはなからう。肉と血を見ないことによって光が恵まれ、肉と血を見ることによって光が奪われるということなら、人間というものの生涯も、厄介至